昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅九年七月一日発行卅九年七月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通刊四四六号

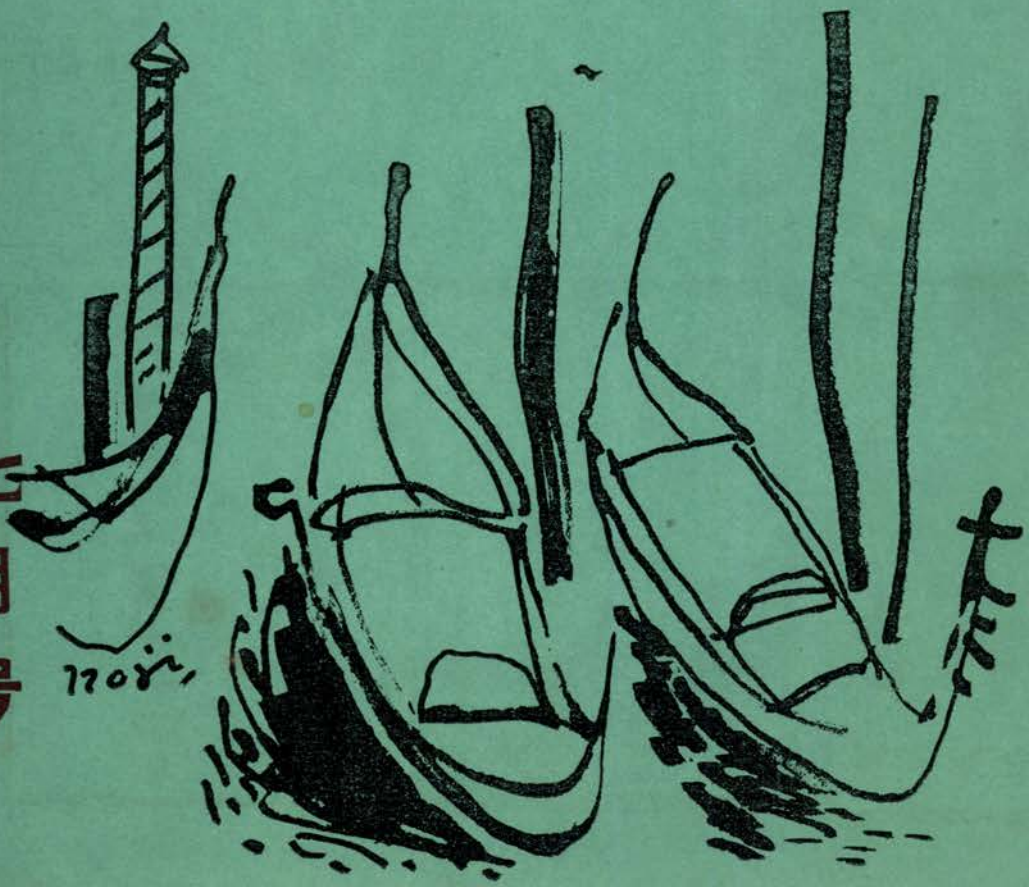
川柳雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No.446

麻生路郎☆主宰



七月号

気軽で！朗らかで！新鮮味ある

川雑 川柳ゆかた会

8月9日（日）午後一時

★恒例の「川雑川柳まつり」は一九六三年度で十年間の予定が終了したので、今夏は昨年の優勝者川雑備前支部（支部長永松東岸氏）の優勝楯返還式と十回中二回優勝された最優勝者川雑篠山支部（支部長小西無鬼氏）の優勝楯永久保持への贈呈式を華華しく挙式する。この光輝ある盛典へ柳縁の人々はどなたでも参列されたい。

日時　8月9日（日）午後一時

会場　大阪府信用金庫会館
大阪市天王寺逢坂上之町五九
（市電天王寺西門電停南西角）
電話大阪七一六局八四八一―二
七七一局九九〇四

司会　西田柳宏子
開会の辞　辻　圭水
挨拶　北川春巣

兼題
「神　経」（二句）　麻生路郎選
「泳　ぐ」（三句）　内藤きさ子選
「　滝　」（三句）　橘高薫風子選
「部分品」（三句）　菊田いさむ選
「隣り」（三句）　早川清生選
出席者も兼題全部・各題句箋別紙・裏面に雅号明記七月末日本社着便のこと

席題　当日　三題発表（各題三句）

呈賞　★各題天地人・各題天位から路郎選により不朽洞賞

余興　林家染丸師
諸家
樋口舟遊

会費　百五十円
会費八百円（同会場において5時半から7時までの予定）
★投句だけの方は郵券五十円同封（〆切7月末日）

懇親宴　▼夫人同伴歓迎・初心者歓迎▲

大阪市住吉区万代西5丁目25番地　川柳雑誌社
電・大阪（671）6081

7月6日～11日

野尻弘個展

大阪市北区曽根崎新地2丁目
白楽ビル2階TEL（312）3281

白楽廊画

大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

近鉄2階特急

大阪一名古屋ノンストップ
2時間13分

大阪上本町発……毎時0分
名古屋発…毎時30分
▶伊勢・名古屋ゆき
大阪上本町発…毎時15分
▶伊勢・大阪ゆき
名古屋発…毎時45分

特急券のお求めは21日前から近畿日本ツーリストと日本交通公社の各案内所

近鉄

ハンディな生ビール
アサヒスタイニー

1本65円

不朽洞句帖

麻生路郎

ガガーリンと握手した日もあったけど

妻いつか襟垢のよに　休臭のよに

たれに買ってもらった振袖かい　錦魚

硬貨のぬくみ鍵ッ子の掌(て)に

あれが初恋かしら　鍵ッ子のころ

鍵ッ子だったからか　虫けらに魅力

肩たたかれるまで鍵ッ子は虹へ立ち

鍵ッ子は働らく母の味方なり

川柳雑誌★七月号目次

題字…麻生路郎・表紙…野尻弘

不朽洞句帖……麻生路郎…(3)

川柳名句抄の鑑賞……麻生路郎…(4)

因縁の山河……東野大八…(22)

塚越迷亭を語る……高須唖三味…(20)

句評「デイスカッション」……(15)

春三・薫風子・晃・夢虹・清生

古俳句と古川柳……冨士野鞍馬…(32)

柳誌の在り方批評……長野笛郎…(23)

川傍柳初篇研究（一六）……(12)

丸十府・岡田甫

川端柳風・高須唖三味・前田喜代人

岡崎重義・清博美・藤井和雄

増田耕民氏の死を悼む…大西八歩…(33)

大万川柳「勲章」発表……(29)

旅情は駅弁から……(34)

栞・半休・日満・暁童・娯句楽

・霊眼子・竹荘・丁路・凉人・

緑之助・孤呂二・普天

不朽洞の人々（霊眼子氏の巻）……(41)

一鶴を悼む……河楊梵鐘…(24)

★

川柳塔……麻生路郎選…(6)

同舟近詠……諸家…(28)

近作柳樽……麻生路郎・北川春巣選…(24)

人生譜……河野春三選…(30)

金泥集……麻生葭乃選…(19)

各地柳壇……(42)

柳界展望……(40)

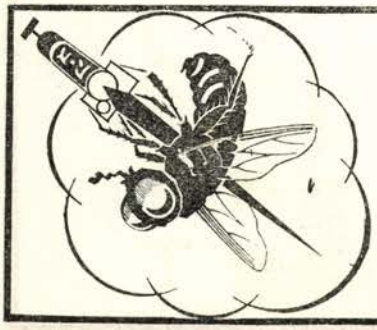
入門講座……清水白柳…(36)

一路集「灯明」……浜田久米雄選…(38)

「辮」……真鍋一瓢選…(39)

「座布団」……山川阿茶選…

★柳樽室……(46)



す早い効き目！よい匂い！

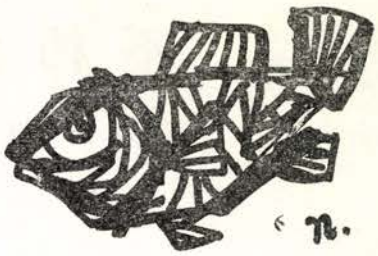
安全殺虫剤

アース

旅行・登山等御携帯に
自噴式罐入

アースエアゾール

アース製薬



川柳 名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔四八〕

集団就職君に召されてゆく如し

（宗太郎）

近ごろの集団就職を見ていると、戦時に、君に召されて出征した学徒に似ているような気がするというのである。中学や高校の新卒者が校庭に整列さされ、校長さん等の訓辞や激励や祝辞で送られ、集団で他郷へ就職するのであるから親たちにとってもそんな感じがするであろう。

「つらかったら逃げて帰りや」という親たちもいないことはないだろう。

少し大げさだが比喩としては面白い。調子もいいし、修辞もきれいだ。

集団就職というのは一地方の中学卒業生が集団で都会の商店街や工場に勤めることで、昭和三十年三月に、東京都世田谷の商店街組合で、新潟県高田職安を通し六〇人を採用したのが始まりだそうだ。

〔四九〕

親の死へ泣き泣きパーマへ走るなり

（可住）

親を喪った女性の悲しみを詠んだものではなく、作者の意図は泣きながらもパーマへ走る女性心理をキャッチしたのにある。こうした心理は女性特有のものであろう。「親の死へ」といい、「泣き泣き」という表現はされていても、悲しみへの線に少しも触れて来ないのは、そのせいである。

〔五〇〕

開業医株の相場も診にゃならず

（どんたく）

開業医の俗っぽさを巧みにつかんでいる。夢は医院の改造を、僅かばかりの持株の上がり下がりに賭けているのであろう。「株の相場も診にゃならず」とは皮肉な句だ。

〔五一〕

寒い日よ戸棚をあけても風が来る

（きさ子）

静かで、うそ寒い日、誰も来ない。どこからともなく風が来る。戸棚をあけても風が来る。おとなになった女性らしい感想である。なんでもない表現だが捨てがたい情緒のある句だ。作者の実感であろう。いわゆる川柳としては多少物足りないという人もあろうが、川柳の領域をここまで広げることも差しつかえないと思う。

〔五二〕

タイミング悪く当たりや昇天す

（一鶴）

当たり屋というのは会社社長や有名人芸能人などの高級新車にぶつかっていって、いろいろといんねんをつけ、社会面記事にならぬよう示談に持ちこみ、金をゆする知能犯であるが、こうした事故屋がタイミングが悪く、ホントに轢かれてしまったことを詠んだもの。「昇天す」で自業自得とはいいながら笑えないとどめを刺されたのだ。

〔五三〕

転んだ子を起こして女中叱られる

（七面山）

坊っちゃんが転んだので、素早く駆け寄った女中さんが助け起こした。

それを眺めていた奥さんが

「アラ、起こしてはいけないのよ」

と叱ったのである。

「どうして起こしていけないの、可哀そうじゃありません」と女中さんは不満そうな眼を向けた。

「今の育児法は転んだからといって、すぐ起こしてはいけないのですよ。捨てておけば、自分で勝手に起きあがるものです」

「そんな育児法があるのかしら。」

と、女中さんはまだ腑に落ちないという眼つきで坊っちゃんの方を眺めているところをスナップしたもの。育児法の推移を巧みにキャッチした句として面白い。

〔五四〕

舞姿孫の色気にはっとする

（阿茶）

あどけない孫娘とばかり思っていたのに、日本舞踊の舞姿にこぼれるほどの色気を出されたので、ハットしたというのである。老人の心の底に残る色気をひき出されて、ちょっとあわてたかたちである。

とりすました老人心理を巧みにつまみ出した作者の手腕をたたえたい。

〔五五〕

逢えば消ゆ烈しきものは何ならん

（新子）

それは彼氏を思慕する恋以前の具象化しない恋ごころだと思うが、それをあからさまに、うちあけ得ない自分の弱さに対する烈げしい怒りかも知れない。「何ならん」はこの場合の表現としては弱い。むしろ「何か」で打ち切った方がよいのではない

か。字足らずの句となるが、句意は確かに強くなると思う。

〔五六〕

おとしよりに席を譲って舌出す娘

（谷　水）

娘の子はなんでもない時にもよく舌を出すものだが、この句の場合、いかにも謙譲の美徳を行ったような気がしたので、ちょっとてれたのである。

おとしよりに席を譲るなんて、陳るいわよと友だちからさげしまれるような気がしたのかも知れない。いずれにしても、近ごろのこうした娘の自己批判から心理を巧くつかんだ句には違いない。

〔五七〕

丸出しのパートタイマーが酌いでくれ

（圭井堂）

人手不足から、パートタイム勤めの奥さんが殖えた。事務には不馴れだが、社長が一杯やるのを見たら、社長さんお酌しましょうかと奥さん丸出しのお酌をしてくれたというのであろう。時代をあらわした句として面白い。

パートタイムは短時間勤務をいうのであって、昭和二十九年十月、東京都八重州口に開店したデパートが採用した勤務制で、この場合は朝夕の二班に分かれていた。奥様お嬢様の三時間の百貨店づとめという宣伝で募集したところ、二百五十名の定員に、八千名の人が押しよせたそうだ。

〔五八〕

書道展なのでこれをも字と思い

（日東里）

書家にとっては実に痛い句だろうと思うが、時代の流ればかり追うている書家には案外痛痒を感じないのではなかろうか。

俗っぽい文字や、奇をてらった文字や本人以外には読めない文字は邪道だといっても過言ではないだろう。この句の作者が書道展を観ての批判をそれ等邪道書家の脳裏に烙きつけてやりたい。

〔五九〕

大時計励ますようでしかるよう

（路　也）

大時計を見上げて、その短針の動きをジッと眺めていると、ピリリ、ピリリと小刻みに、右へ右へと移って行くのが、オレのように寸時も休まずに働くんだよと励ましているようにも思えるし、時には何をぐずぐずしているんだ、サッサと働けと叱っているようでもあるというのである。労れているときには励まされているように感じ、怠けている時には叱られているように感じるのかも知れない。面白いネライの句だ。

〔六〇〕

随筆家と信じていたら理博なり

（光　郎）

こんな例はよくある「はだか随筆」で売り出した一橋教授の佐藤弘人氏も理学博士である。阪大の名誉教授笠原路生氏なども医学博士にならなかったら文学博士になっていたろうと自らいわれていたぐらい随筆も巧まかった。故野村胡堂氏が捕物帖で売り出したが音楽通のあらえびすと同一人だとは知らない人がいるようなもの。

〔六一〕

上げ膳下げ膳うれしい御婦人共の旅

（好　祐）

ご婦人のたびといえば、宿についても夫の世話から子供の面倒まで見るのが宿命のようになっている。ところが、この句の場合、ご婦人ばかりの旅で、上げ膳も下げ膳もすべて宿の女中がやってくれたので、全く食事の世話から解放されたよろこびは大きかったのである。近ごろ流行る観光ブームの婦人ばかりの一行を詠んだ写生句である。聞くところによると、こうしたご婦人の中にはなかなかの芸人がいて食後の賑やかさは大変だそうだ。

〔六二〕

お女将さん悪どうなってボテが入り

（一　瓢）

どっから見ても小料理屋のお女将の貫禄だ。どっしりと下腹にボテが這入っている。若い女を二、三人口先で使って、売春もさせているという噂。近ごろでは小金も貯めているそうだ。場末街にいるこの種の女を巧みに描出している句だ。

〔六三〕

死にたくないかと酷い事を聞く

（秋　星）

老境に入って足腰たたない病人であろう。誰も世話してやる身寄りの者もいないのだ。他人の厄介になって僅かに糊口を凌いでいるのを見て、

「それじゃ、おじいさん、なんの楽しみもないだろう。」

「そうです」

「いっそ死にたくないかネ」

それには老人は答えなかったのである。

〔六四〕

素人でも可売春の匂いする

（弘　道）

仲居さん募集の広告文句によく使われるのが、「素人でも可」で、二間間口そこそこの小料理屋の軒先にブラ下がっているのを見かける。この文句には何んとなく売春の匂いがするというのである。素人で仲居さんにでもなろうという女性は夫が病床にあるか、夫に死に別れ子どもを抱えて、忽ち金の要るのが多い。たとえ売春の匂いがしようが、外に金の得られる手段がないので、ズルズルと悪の道へ墜ちてゆくのである。

結婚式場
長生殿
近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場　貸衣裳も
豊富にそろえております●6階
大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

八尾市　西尾　栞

ネックレス修験者程に巻きつける
げんげ摘む妻にもあった娘の姿態
夕桜人恋う心つのって来
スタミナがどうのこうのと普茶料理

西宮市　若本多久志

おでん屋の手酌手酌へ話しかけ
米の値を口にせぬようになって生き
レントゲン根性まではよう撮らず
退院をすれば変らぬ恐い父
その通り浅学非才と挨拶し

大阪府　川村好郎

義理で来た見舞病室読んでゆき
持って来たように養子肺を病み
銀行は貸すと信じている会議
本当の残業で乗る終電車
生花か造花か真実うすれゆき
筆まめな君が返事もくれぬ旅

麻生路郎選

大阪市　正本水客

膝小僧おとこは夏の雲見てる
片棒をかついだことを自慢にし
串かつへ誘う男のわるびれず
手のひらに真珠は朝のものとみる
考えても世の中が変るはずはない

高槻市　若柳湖花

鍵かけて団地まつりの灯へ出かけ
妓とは勝手の違う師匠の地
お師匠はんばかりで囲む苺皿
生てゆく力で踏んだ足拍子

大阪府　西いわを

療養生活
看護婦と友達になり親しめず
マスクしてるが笑った顔であり

大阪市　北川春巣

歯が抜けて血が一滴も出ず淋し
うちの子はお金使わん自慢する
町会の班長防犯灯も点け

内科学会出席（於京都会館）
京都弁聞いてて市電乗り過ごし

ハワイ　羽佐間柳葉

時代の娘竹の柱が笑わせる

堺市　吉田圭井堂

勲章は子の気になって貰っとく
小道具の一つとなって人力車
なんかなし生きて勝手に来た米寿
養老院で金婚式をあげる羽目

防府市　長野井蛙

店閉める覚悟税務署けむに巻き
片意地が袋小路へ迷いこみ
面張ってやりたい札に縁がなし
命あってのこと、退職匂わされ
成り上り恩を忘れた口を利き

岡山県　直原七面山

仮面脱いで女いのちの限り燃ゆ
藪医者を最敬礼で送り出し
人形の愚痴が聞えるのも詩人
ミミズある日立って歩けたらなと思い
オールドミス方角なんか言うとれず

鳥取市　河村日満

国際見本市にて

大阪の空気は茶褐色で浮き
石橋の色よみがえる雨あがり
面積を波に食われた新潟市

倉敷市　木村千容

仕合せは茶呑妻あり扶持もあり
日々好日八十の坂もひといき
まのびした顔へ集金また来ます
丸刈を嫌う中二の男の子

倉敷市　田垣方大

ともすれば女性に視線のゆく講師
出世コース平気で女捨てている
二三日は元の社宅へ足を向け
家族風呂妻の背中を洗わされ

大阪市　木村水洞

善政と云うは辞典だけの文字
ストせねば労使の話纒らず
妻の肩揉んでもてれぬ齢になり

米子市　小西雄々

齢のこと聞くなと酒を注ぎこぼし
静養へ下駄の感触なつかしみ
水害へ臍までつかった体験記

故郷の良さがわかった都会の灯

大阪市　山川阿茶

お家はんに古曲を太夫習って来
こいちゃんも算盤だけは親ゆづり
法話集読んでて背鰐まだ欲しく
姑が一番別居に賛成し

加賀市　那谷光郎

便笺に父よりとだけ為替くる
ラブレター附笺で戻って気がくさり
特価でも売りたし娘三十の
失恋の死ぬ気だったに美容院
体まで張るではないと貸すつもり
着更えても左官の体壁匂い

大阪市　福井野迷路

闘争か喧嘩か知らぬが花の春
オリンピック烏の啼かぬ日はあれど

鳥取市　大西八歩

長男浩の新居を訪う

さて次は愛の結晶待つばかり
目覚しを掛け新妻の座を守り
春はよし寝ころぶ場所にこと欠かず
ふるさとは風香れども退屈し

岡山県　浜田久米雄

高野山参詣

ほろ馬車がわがもの顔の高野山
高野山夫婦は広う広うに寝
分骨の墓がこれかと高野山
嘘の世を見おろしている高野山
高野山女人の多いのにあきれ
信心のこゝろへ高野緑する

京都市　大鶴喜由

ハンパ市蠅のむらがる姿なり
ラブシーンを見られてからの当りよう
父と母けんかしいしい子が生れ

奈良県　飯降白香

売家の庭えにしだの花ざかり
彼岸桜署の玄関に匂ってる
炭坑への夢も消え果て離職者の

門真市　福島鉄児

けなげにも妻は税吏に立ち向う
死ぬ事も今の私にゆるされず

岡山市　服部十九平

芸術と別な視線にモデル耐え
自首をする決心下着更えて出る
リヤカーを散歩の人が押してくれ

高槻市　山田勲賛

初夏の道床へ草伸びに伸び
岡山県　田村藤波

求人難社長三顧の礼をして
亡き母の朝な夕なに汲んだ井戸
老妻に代書を頼むもどかしさ
偽善者と言われてもいい人の世話
児島市　本田恵二朗

雨洩りのにくたらしくもリズミカル
こゝが洩りそこが洩りして旧家です
長男結婚に
好々爺におなりんさるとおだてられ
堺市　高崎雄声

訪れるひとは支出の方ばかり
幼稚園もう損得を言うている
七十の目にもストッキングの皺味気なし
倉敷市　野田素身郎

汽笛一声の情緒電化とともに消え
会議中蜘蛛の巣ばかり見ていたり
大阪市　伊達堰子

博物館我一人ゆく下駄の音
夕顔の水で踏切撒きおさめ
晴ばれと西成署長転任す
芦屋市　丸川初甫

約束へ雨が不義理をして仕舞い
胸中を察し焼香順を待ち
信州松本城にて
外堀は街にとられた城屋敷
残雪は槍か穂高か城の窓
唐津市　新岡回天子

四畳半しかないのにあるテレビ
ふとんの深みぐっすりとねた朝となり
岡山県　池田古心

金儲けテレビで見れば分けはなし
ハンドルを握って命粗末にし
子も居ぬに誰に譲る気植林し
大阪府　早川清生

久濶のいきなり借りた本のこと
刑事定年靴何足を履きつぶし
いくさすむたびに女のべにが濃し
傑僧の過去たずねれば父がなし
日蓮正宗ネグロに日本妻がいる
宗門の会議眼鏡の僧並ぶ
堺市　辻圭水

敬語など知らず自由の世に生きて
交通マヒの世にすくすくと背丈伸び
子供さえ休みぼつぼつもてあまし

言葉づかい知らぬに高校卒と云う
西宮市　小浜牧人

襟足の魅力色街初夏となり
慰めの言葉に頼る二三日
水と藤しばらく生活苦を忘れ
餌を撒けば恐れを知らぬ雀の子
大阪市　橘高薫風子

制帽の汗を先ず拭き顔を拭く
鯉のぼり氏素姓なき爽やかさ
金借りに蛙のごとく手をつかえ
豆秋さんの霊前を訪う
桐の花豆秋居士は寡黙居士
勇退の浜田久米雄氏へ
いざ孫と麦藁帽に親しまん
水都祭初恋の人年とらず
四十の恋昨日は待たせ今日は待ち
奈良市　宮口笛生

国鉄と云う処
機関士の重責安い腕にかけ
違法スト承知たまには肉も欲し
事故絶えぬ因内職に身をけずり
米子市　石坂新雪

盲人のスタミナ月にいどむなり

朝起もバラの手入に皆つぶし
十七時惜しいＫＫふり返り

大阪市　西　川　晃

こつこつと悪書を売って疲れける
これっぽっちの恩給に捨てた若さよ
よれよれの紙幣かぞえつつ干からびる
街の虹ああ空があるのを忘れてた

神戸市　仲　どんたく

恋人のどこまでがそのテクニック

「砂の女」を観る

人ごとと思えずあえぐ砂地獄

Ｏ氏逝く

白き骨ああ煩悩も執着も

平田市　久家代仕男

盛装も見て頂戴のリサイタル
母の日に母なく薔薇の咲き乱れ
弁当の結び目弛く母の老い

大阪市　本　多　柳　志

札束の何か妖しいかげを見せ
又かいな大阪城の石を見せ
子は首席内職なんかしておれず
母の日の父は残業して戻り
前歴をほめて職安そっけなし
勲章を吊って戦争などしなや
天下り履歴書程は間に合はず

出雲市　原　独　仙

外人に河岸の柳もワンダフル
学校で習はぬ学の要る社会
社長の額朝々拝めの社風とは

西宮市　野　呂　鵜　汀

転んでも目は蝶を追う男の子
逆立ちをしてはみたいが女の子
しなやかに芸者水切りした蛇の目
取りあえず客を返してから喧嘩

新潟県　高　野　不　二

悪口を一日毎に覚えて来
車買う貯金中途で又おろし
明治生れ海軍記念日まだ云うて

高砂市　吉　原　紅　月

播州北条五百羅漢吟行（二句）

連れて来た子にはつまらぬ石仏
新緑へ泣き出しそうな石仏
愛憎もなく鶯の餌を摺る

大阪市　石　倉　旅　風

素ッ気なく新国道は村の裏
要領を覚える勘も大学出
親友の手紙うれしい旧漢字
連休も金魚悠々春うらら
春うらら踏切番をハッとさせ
飼うてみりゃ小鳥は物を言わぬだけ

大阪市　魚　住　満　潮

続・西成界わい

シャツ一でまだ西成をうろちょろし
街頭賭博ジェット機が通り過ぎ
自衛隊員募集ニコヨン足を止め
幼な馴染みもかつかつの生活（くらし）をしい
久し振り亭主の長患いから話し
刺青（いれずみ）の男の顔がまだ二十才
表まで呼出し明日までの金

愛媛県　村　上　旭　童

何にでもすぐエンジンをつけたがり
はげ山に育ち庭木として売られ
母の日へせめて風呂なと沸しとこ

高槻市　傍　島　静　馬

木石にあらず五十で恋を知り
ステレオを買うのに仏壇売り払い
たかが係長ぐらいへこのつけっ屈け

大阪市　河　井　庸　佑

肩書きがこうも人柄変えていき

ふみ台にされると知ってもやめられず
大阪府　谷沢好祐

大空も知らずに死んだ十姉妹
トップ会談せねば守れぬ法も法
青森市　工藤甲吉

戦前の話を鼻でわらわれる
ダイレクトメールはあわれ屑籠へ
郵便だけが左遷の後を追って来る
松江市　小林孤呂二

長島が王が食卓かたずかぬ
一家みな疲れきったり子供の日
空席が目立つ推選映画なり
贋硬貨つかまり贋札捕かまらず
ながらえる命尊し湯にひたり
豊中市　林夢虹

塔の影なくなり白昼夢始まる
因襲の沼どうどうと美女生る
千姫

千狂乱恋得し夜の野分
大阪市　今西章雅

記念切手ハイここ迄と売切れる
母一人子一人成人式たのし
趣味のないいとこ個室の病床(ベッド)で寝

つめ込んで見せると予備校口約し
京都市　室井八九寸

撞き手撞き手の性格を鳴る梵鐘
百歳と横綱の掌の顔並ぶ
ふたりともパジャマステレオ昼を鳴る
長訓示市長の義歯鳴り通し
岡山県　横山一声

愛情と別の気分ですするデート
値切られてまけたに品物うたがわれ
小松市　関戸宗太郎

泣いたまゝ通園バスへ保母が乗せ
証人に呼ばれ人生狂い出し
薄給を義理人情でまたしばり
たかゞ市議なにしにドルをまきにゆき
石川県　高山凉髪

スリが眼をつけるほど肥満型となり
君たちの気持は分るがと社長
はしご酒いつのまにやら一人欠け
社の自慢ばかりしていて出世せず
美祢市　安平次弘道

強精剤妻は予算に計上し
先生をヒハンし子等の夢こわし
成金の不満紳士録にもれ

宇部市　平田実男

悪友が一番しょんぼりしてた通夜
素人の恐さは投資して儲け
家計簿を閉じて流行あきらめる
野良犬のまだ親切をうたぐる眼
写真機の前では素直な父となる
特ダネを取って番茶のうまさ知る
小松市　浅野芳朗

都会とてマネキンほどのはたんと居ず
大した事あれへんかったと野次帰り
操業難小火まで変な目で見られ
諫早市　川岡霊眼子

女児ばかりだから株なと買ってんの
また殺す積りか叙勲また決まる
岸和田市　内藤きさ子

脱ぎすてゝ女二人の春の部屋
犬は犬づれ菜の花は真盛り
女みな五月の肌の女風呂
造幣局夜桜

通り抜けすめば屋台の灯がまねき
青森県　木村凉人

右左ないから軍手性に合い
貧農に天地信じるほかはなし

戦没者勲章返上さもあらん
文化文化間借りにプロパンガスボンベ
葉桜やカメラを向ける人もなし
無精髭三船敏郎なら似合い

倉吉市　奥谷弘朗

馴れた頃規則の変るのも役所
希望さえ忘れた顔の小役人
弁当のおかずに通う夫婦愛
拝啓お得意様とはおそれ入り

兵庫県　遠山可住

ひからびて九人育てた乳房なり
アメリカの例を挙げれば合点され
智恵は俺チビはお前に似て育ち

兵庫県　河原みのる

姉さんのセコハン氏などフフンだ

農民気質

お隣の麦も倒けたでそれでよし

ビニール袋死体に及ぶ

首だけは出しといてやと頼んどき

姫路市　隠岐不酔

総理様やめてしまえば池田君
ストをしたお蔭で物価又上がり

鳥取県　清水一保

連休に家計息つぐ暇もなし
勲章が決まり政治がやめられず

出雲市　中川晃男

メーデー歌うたう口紅うすくつけ
出頭のはがき冷たく屈けられ
軽石でみがいた祖母の足の艶

松江市　柳楽鶴丸

五十才の悟り子供に負けてやり
私の倖せ女にうばわれる

京都市　都倉求女

語らいの頭上に門灯突如点き
三日月の細さへ願い減らしとく
死刑囚の手記さえ僕より字がうまい
席譲るぐらいが美徳になって来た
右書きの看板のままいく老舗

兵庫県　大江秋月

出世した教え子記憶は中だった
灰皿が並んで会議待っている
酒が出る迄にと幹事撮らせとき

大阪府　松田半月

バスガイド家へ帰れば常の声
もの真似の上手な人で物たらず
長距離の雷話に足許うばわれる

今治市　越智一水

碾臼がわが家の骨董品となり
警官の護衛がついた花簪
オールドミス貯金課にいて株をもち
野ざらしにされて微笑む石仏

竹原市　山内静水

遊び場になるから田圃に植た麦
雨の駅家まで走る肚を決め
水神を信じ小川に口をつけ

加賀市　細呂木魯木

悲しみの家の桜も見事咲き
勲章はほしいが一回目は遠慮する

笠岡市　高木桃里

老らくの恋結ばせて春が酣け
折り鶴が揺れてる下で喀血死
停年の顔ゆるませるベレー帽
鉄瓶の水注ぎたして妥協せず
道楽を知って春雨好きになり
帰る気を赤信号がふと変える

新居浜市　小林孝正

日曜日ロマンスもなく薪を割る
クーポンの旅は雨にもめげず発ち
団体で来たのに幹事だけがもて
生意気とだけで殴った反抗期

川傍柳初篇研究（一六）

丸十府　高須啞三味
岡田甫　前田喜代人
○　岡崎重義
川端柳風　清博美
藤井和雄

182　**金つかふすべも入むこ知ている**　眠孤

清＝「金使うすべ」とは、女郎買いのことか？　とすれば、当時の入聟の境遇はみじめなものだったが、それにもかかわらずこの入聟は女郎買いをした、という句か。

藤井＝「金使う術」とは「道楽」の事で飲む・打つ・買う術。堅蔵に見えた聟殿もやがて日数もたてば……という所。

川端＝「入聟」は、家付き娘の聟養子だから、素直に金を活用する法を知っているという、お家安泰と解したい。

高須＝堅物のはずのお聟さんも、結構金の使い方は知っていた、という句で、その金をどう使ったかまでは、この句では示していないのだが……。

前田＝昔から「米ぬか三合あれば養子に行かぬ」といわれている。しかし、この入聟は、金使うすべ即ち女遊びを知っているのだから、一寸した曲者であろう。

岡崎＝前田説に賛。入聟に対する一般の定評とは異った聟であることの意外性に、面白さを見つけたもの。

丸＝金を使うすべ――打つ・買う・飲む――は知っているが、それが出来ない境遇なのだ、と承知している入聟の苦衷を、言った句と解している。

岡田＝小生は、前田説。やはりひそかに……と思う。

183　**あさつきハあいそつかしの論也**　三朝

清＝「あさつき」は百合科の多年生草本でラッキョウに似た小さな鱗茎をもっている。葉と地下茎を食用とするが、当時三月四日に、このナマスを、供えてから、離を仕舞った。このあさつきのナマスは、食べた後、相当臭かったらしい。それで、離を仕舞うことと、対人関係とかけて「あいそつかし」と言ったのであろう。

藤井＝賛。この対人関係には、出代りの下女もにおわしているのではないか？

涙雨あさつきくさい口を吸う

高須＝「アサッキのナマス」の口臭と、下男・下女の出代りとをかけて、そういう季節奉公人は、たとい愛しあっても、またいつ逢えるかわからないので「あいそつかし」と言ったのであろう。

岡崎＝「あさつき」は、わかりやすく言えば、春の野菜の浅葱。ワケギよりも細いネギの一種で、それを酢と味噌にあえてナマスとする。それが離への供え物の最後なので「あいそつかし」と言ったのである。

丸＝清・岡崎説賛。藤井・高須説の出代りまで考える必要はあるまい。

岡田＝同。

高須＝「愛想つかし」という言葉を、物を仕舞う時に使う例を知らぬので、どうも納得できぬ。

愛想ずかし針箱を持って立ち（傍二）

あさつきはナマスの中の面よごし（桜17）

（11）ウ

184　**とめた荷をミれば葛籠にてんとくじ**　眠孤

清＝「嬉遊笑覧」巻二上、服飾の項に「紙被を今江戸の俗にはてんとくじと云、古に日向ぼこを天たらぼこりといひし如く日の暖かなるをよそへ天徳と言うなるべし」とある。とすると、天徳寺は貧乏を表現する言葉で、句意は貧乏人の引っ越し荷物を詠んだ句か？

天徳寺おんむくしって藪医みる（タル二一）

という貧乏を詠んだ句もある。

藤井＝「とめた荷」とは、引っ越し荷物ではなく、関所か何かで、不審で留めた荷のことではないか？　それで、あけて見たら、案外天徳寺だけだった、という解は、どうであろう。（自信なし。）

川端＝小生は、運搬中の荷物を、不審に思って、調べたら、夜逃げの貧しい荷物だった、と解していた。

高須＝「天徳寺」とは「かみぶすま」または「わらぶとん」で、江戸芝西久保巴町の天徳寺前で販売したから、そう言われたと「広辞苑」にある。この「とめた荷」は人目をさけて運ぶ荷を留めたと解して、どうも「夜逃げ」と見られるが？

前田＝「天徳寺」は高須説で「とめたつづら」に「天徳寺」と書いてあり「かみぶすま」（紙布団）であったと解す。

丸＝「とめた荷」は、返すべき筈のものを、一時とめおいた荷物の意で、句意は、出代りで出て行った下女が、奉公先がきまったら取りに来る約束の（主人側からは、

止めておいたわけの）荷物を、何気なく調べてみたら、つづらの中に天徳寺が入っていた、というのであろう。

岡田＝「とめた荷」に、いろいろ説が出たが、これは宿屋の宿泊料不払いなどで、差し押えた荷物と思う。それをあけて見たら、衣類どころか、紙製のテントクジだけしか入っていなかった、これでは三文にもならず、大変な損害という句ではないか。

三月五日開

185 **近星を見に出てこなを挽おくれ**　枡水

清＝「近星」は、月の近くに現われる星で、この星が現われると、時の大臣に災難が起こると、信じられていた。それを見に出て、うわさ話しに時をすごし、すっかり仕事がおくれてしまった、という句。

高須＝「近星」は「金星」ではないか。何年目（何十年目）か毎に、金星が光り輝くことがあり、それが地球上に何か凶事のあるシルシだと信じられた。で、この「粉を挽きおくれ」が、ただ仕事がおくれただけでなく、何か時期に関係あると思う。

前田＝その通り、「粉を挽きおくれ」は八月十五日の名月用の団子の粉の挽きおくれで、延享四年八月十五日、細川越中守が板倉修理のために千代田城中で殺害されたことを諷したもので、その年「近星」が見えて、江戸市民が皆さわいだのである。

丸＝賛。

岡田＝同、前田説に敬服。柳雨、三面子両先生にも解けなかった句である。

186 **蛤にひらめの交る大あたり**　魚交

清＝この「蛤」は、雛節句の供物の蛤と解したい。

蛤に比目魚女房は不得心　（タル二〇）

と同意句であろう。つまり、蛤だけならば、雛の供物として喜んでもらうのだが、比目魚が交っているので、納得が行かないというわけ。特に比目魚は「親を睨むと比目魚になる」と言われ、雛の節句には向かない魚である。

藤井＝雛の供物に、比目魚は無駄との、女房のフンガイではなかろうか？　蛤だけでよいのに、比目魚まで買ったのは、飲む算段だろうと、女房はとかくソロバン高く出来ている。

川端＝礒橋のように考えたいが、下五の「大あたり」がわからない。婚礼の句ではないかとも考えてみたが、不解。

高須＝「大あたり」は、女房の立腹ではなく、「大当たり」で「大儲け」とか「大うけ」という意味の「大漁」と解して、汐干狩の句と思う。

前田＝「大あたり」は、芝居などが図にあたって大入りしたことからして、高須説の「大漁」をとるが、汐干狩と限定しなくてもよいと思う。

丸＝高須説に賛。

岡田＝同、高須解でよし。

187 **椎の木を木立矢を射るやふに漕**　五雀

清＝この椎の木は、既出の159「首尾の松万民これを賞翫す」の首尾の松の対岸にある松浦邸の「椎の木」で、山谷通いの豬牙船は、この椎の木を見て通った。で「木立矢を射るように」が生き生としている。

高須＝「矢を射るよう」だから、豬牙船に違いないが、ボクには「木立」がわからない。コダテと読むなら「木楯」（或いは「小楯」）で「コダテに取って」などと使い、「木立」と書けば「コダチ」で「木のむらがり生い立ったもの」だから「椎の木のコダチ」でなければならぬ。それについて明解がほしい。

前田＝「木立」は「小楯」で、楯の代用すなわち仮の楯。椎の木が大木であったから、楯にみなしたので「大木を小楯にして云々」と、盛衰記にある。句意は、礒解通りでよいと思う。

丸＝賛。木立は木盾、小盾の当て字。この句、曽我兄弟の父河津三郎が、工藤祐経らに赤沢山で討たれた、それを踏まえた句作。「…赤沢山の麓、八幡山の境にある切所を尋ねて、楯の木三本小楯にとり、一の射弩には大見小藤太、二の射弩には八幡三郎、手だてなれば余さじものをとて立ったりけり…」（曽我物語巻一）こうして、河津三郎は、八幡三郎の矢にかかって、死んだのであった。

岡田＝丸先生引用の通り「曽我物語」の文句取り。もちろん、句は吉原行きの豬牙船を詠んだものである。

高須＝「木だて」納得。けだし、ずいぶん持って回った句だナと、感心するより、少しあきれている。

188 **太夫とハ菰をかぶらぬ礼に付ケ**　水砥

清＝不解。御教示を乞う。

川端＝この句は、始皇帝が雨宿りをした松の大木に、五太夫の位を興えた、というはなしから、雨の中を「菰をかぶって」走らずに済んだ礼に「太夫」と付けた、という句で、それだけの句。

高須＝「松の太夫」の句であること、川端説通りだが、秦の伝説に「菰をかぶる」などという我が国の風俗を詠んだので、和唐混同で、わからぬ句となったのである。

丸＝賛。「秦始皇、泰山に幸し給うに、俄に雨ふり、五松のもとに立ちよりて雨を過したまえり、此の故に彼の松に位を授けて五太夫といえり、五品を松爵という是れなり」（十訓抄）

岡田＝諸説に尽く。

189 **ございよと呼んでとらせる右の爪**　枡水

清＝この句も不解。

藤井＝「こちらへ御座いよ」の意で、嫁が下女を呼んで、琴の爪をとらせた、という句ではないか。

川端＝「御座い」説賛。「右の爪」は琴爪か。「ここへ来て、爪を取って…」で、琴を弾く準備をさせるのではないか？

高須＝原句は「右の爪」だから、左手の爪は、自分の右手できれたが、右手の爪は左手できれないから「ございよ」と、次の間にいる召使いを呼んで、右手の爪をとらせるという句である。

丸＝高須説に賛。姑が嫁を呼んで、右手の爪を切らせる句で「ございよ」に、その人柄を出したのである。

岡田＝賛。礒解者は、原句をよく見なければいけない。この句、最初の三人までは「石の爪」と読んで考えたらしい。一応みんな岩波本で進行して欲しい。

190 **太郎が軒も笠木ほどみゆる也**　菅江

清＝「太郎」は、向島弘福寺門前の西の方にあった鯉料理屋。「笠木」は鳥居の横木。そこまでは解るのだが……。

藤井＝岡田先生の「末摘花詳解」によると「かかが口延びあがらねば吸へぬなり」（末三）は、河東節「隅田川」の〝少しこなたの森つづく若葉に植えし鳥居こそ笠木ばかりを三囲の、伸び上がらねば見えぬなり〟の文句取り、としてある。

「隅田川の堤に、桜の並木植えしも、この頃のことなり、むかし此の堤高からず、三囲の稲荷の石の鳥居は笠木堤の上に出たりしが、三股中州の新地とりはらいになりし時、其の土を以て堤を高く築き上げたり」（梅翁随筆）とあり、三囲神社の鳥居の笠木と、鯉料理屋葛西太郎の軒が、隅田堤の向うに（上に）見えたことが判る。端唄にも〝夕立や田を三囲の神ならば、葛西太郎が洗い鯉〟などとあり、当時この二つは並んで有名であったわけ。

鯉を食う相談鳥居下で出来（？）

高須＝藤井解詳細をきわめ、付言するところなければ、この句、猪牙船で隅田川を上る時の景ではなきや？　次の如き類句あり、何となくそう思われる。

三囲の鳥居を猪牙は越えたどら（籠三）

三囲はよせと鳥居を越したやつ（傍五）

丸＝藤井説よろし。

岡田＝同。

191 **七けんの外ハ不沙汰なその当座**　五雲

清＝「七軒」は巴屋、井筒屋、近江屋、ます屋、松葉屋、松屋、駿河屋。、吉原仲の町右側の里俗。この七軒が特に繁盛した情景を詠んだ句か？

藤井＝この「七軒」は、鉄漿をもらった七軒で「何故うちへは来てくれなかった」となじられるのがつらく、その七軒以外は当分御無沙汰をする、という句である。

高須＝初めてカネをつける時は、親しい七軒から、そのカネをもらうことになっている。いわゆる「初カネ」である。それでこの句が「初カネの礼」の句であることは間違いない。

初かねはばちばちとした顔になり　（タル六）

初かねの下女は茶台を置いて逃げ　（傍一39）

等、顔がかわって恥ずかし句がある。

前田＝小生は、清説をとる。遊びはじめは、有名な家ばかりで遊ぶもので、仲の町の七軒以外、当座は行かない、という句と解す。この作者五雲は、40惣花、43しゃば中、44紋日の月、というように遊里の句の多い人なので、特にそう思う。

岡崎＝小生は藤井・高須説に賛。ただなじられるのが辛いばかりでなく、初カネで面変わりしたはじらいで、そのカネをもらった七軒だけの外には、当分顔を出さないという句である。

丸＝岡崎説に賛。

岡田＝初カネ説をとる。

192 **上野からこぼれたやうな法花寺**　秋紅（12才）

藤井＝不解。

川端＝既出2「大阪と言いたい所にきらず桶」の類で、「上野には寺が多いが、法華寺はない」と、言うのではないか。

高須＝どうも、江戸地誌にくらくて、その方は全くダメだが、上野の近くに日蓮寺はないか？　「こぼれる」という言葉は、「あふれ出る」とか「落ち散る」ということだから、寺の多い上野の近くの日蓮寺を詠んだ句なのだが……。

前田＝これは、こじつけ解だが「上野」は花の異称、「法華寺」は日蓮宗にかかわらず、美しい花の寺と解す、花からこぼれたような美しい寺がある。道成寺か？

清＝「法花寺」は、上野東叡山寛永寺の法華堂か？　寛永寺は別名忍が岡といい、それに対して不忍池の出合茶屋があり、周囲の賑やかさに比べて、寛永寺は全然色気がない。そこで、賑やかな上野からはずされたようになっている寛永寺を、こう表現したのではないだろうか。

丸＝上野寛永寺の末寺として、ポツンとこぼれたように、谷中に法華寺の感応寺がある、という句で、感応寺は日蓮宗の有名な寺であったが、元禄十二年に天台宗に改めた。従って、本句の安永頃は既に天台寺であったのだが、もともと日蓮寺として有名だったので、作者が思い違いで、こう詠んだのではないかと思う。感応寺を江戸市民に有名にしたのは「富突き」で、宗旨の方は余り気にかけなかったのであろう。

岡田＝「江戸名所図会」によると、寛永寺について長い記述があり、その次に瑞林寺、感応寺、本行寺の記述がある。この三寺は、すべて今の上野公園からつづく谷中にあって、またすべて日蓮宗だが、丸先生の言われるように、富クジで有名な感応寺は元禄年間に天台宗に改まったので、どうも法華寺とはピッタリしない。小生は、この法華寺は瑞林寺（瑞輪寺とも書く）の方と思う。同書に「慈雲山瑞林寺は、上野清水門の外、二三丁北の方にあり、日蓮宗にして、甲州身延山の触頭、江戸三箇寺の一なり。……当寺に安置せる日蓮大士の像はむかし同所谷中感応寺にありしを、彼寺改宗のときより、ここに移すといえり」と記しているが、江戸切絵図を見ても、わりに大きな寺だ。日蓮像が安置されているぐらいだから、これを指して「上野からこぼれたような法花寺」と言ったものと思う。なお付記すれば、この近くに川柳でおなじみの「いろは茶屋」あり、また笠守お仙で有名な笠守稲荷がある。

○

輪講誤植訂正（一四）

14頁上段8行目「殺したくでも」ハ「殺したくても」

15頁三段23行目「大振袖病いの」ハ「大振袖の病い」

〃　四段5行目「眼狐」ハ「眠狐」

〃　〃　9行目「揺曲」ハ「謡曲」

句評 ディスカッション

――四四四号本誌より――

出席者

早川清生
西川晃
林夢虹
橘高薫風子
河野春三

（晃提出）

人間の軽さはお温泉にプイと浮き　無鬼

晃＝おそらく作者はお湯につかったときにふと感じた気持ちをそのままに詠ったものであろうと思う。〝人間の〟と言っているが、これは勿論作者自身なので、作者はこの瞬間に於いて他人を自分の外として眺める分離的存在から、他者と一体となって生きる融合的生存になっていたのである。人生のある一つの坂を登りつめたあとの安息と弛緩の状態がこの句を通してうかがわれる。ユーモラスな表現ではあるが、人間感情の深いところに触れていると思う。

夢虹＝日頃万物の霊長だとかなんとか偉そうなことを言っている人間が、プイと湯の表面に浮いた。横をみれば軽石も浮いている。ふと苦笑がもれる。川柳的な川柳だ。だが、人の心の深みに沈んで醗酵する句ではない。私には人間の軽さと言い切ってしまっているのが何か物足りない。プイと浮きと云う表現はうまいと思うが。

薫風子＝浴槽に頭をあずけて身体を伸ばしたら木片か何かのようにぶわっと浮いたので「人間の軽さは」と実感がほどばしったのである。作者はその時おほっと姿勢を立て直しながら苦笑したに相違ない。読者もまた頬が綻ぶのである。プイの二字が飄逸で効果を出しているが、広い雰囲気を出そうとした故か、「お温泉」と書いて「おゆ」と読ませたのは少し苦しい。

清生＝私はプイと浮くというのがちょっとたいそうな表現なようにも思う。温泉だから普通の湯より浮力が大きいのか、故意にからだを浮かせているのか、あるいは温泉にはいったときプイと浮く感じを受けたのかといったこまかい穿鑿よりも句の意図を直接にくみとるべきであろう。軽妙な滑稽感の中に人間の卑小さを巧みに描き出している。

晃＝薫風子さんの「お温泉」を「おゆ」と読ませるのは苦しいとの発言だが、これを問題にしよう。今までの川柳の中に沢山の例があるのだが私の気持ちとしては、こういう特殊な読ませ方は無くしたいと思う。けれども、実際にはどうしてもこういう使い方をしなければならない場合が多いようだ。根本的には日本語の文章に用いる言葉と日常用語との関係にまで遡らなければならぬと思う。この句の場合「お湯」とすれば果たしてどう受けとられるだろうか。

清＝文芸には日本語を正すという役割があるとも云われるが、川柳の場合もっと勇敢に俗語をとり入れた方が良いのではないか。我々の感情生活というものは日常使用している言葉から成り立っている。しかつめらしく云うと微妙なニュアンスの相違が生じるのではないか。

薫＝路郎先生の句に「入学（はい）れたか花火揚げたい程うれし」というのがあるのを今思い出した。

夢＝「お温泉」と書いて「おゆ」と読ませるのはたしかに問題だが、川柳は音律ということを重視するのでやむを得ない時もあると思う。短い言葉の中で調子を整えながら意味を深めるということが、このようなことを認めさせる。但し、読む川柳という制約はまぬがれえないが…。この句の場合には、私は特に「お温泉」として「おゆ」と読ませる意味を見出さない。

晃＝川柳に俗語をとり入れたら良いという清生さんの意見は「お温泉」を「おゆ」と読んで良いという解答にはならないと思う。之に対して清生さんも反論があるだろうが、別の機会に譲ることにしよう。

薫＝夢虹君が、人間の軽さと言い切ってしまっているのが物足りないと云っているのは、この句が何か教訓的な響を感じさせもするので妥当な批評だと思う。

晃＝私は教訓的とは思わない。先に述べた通り、これは作者の実感そのもので、人間と言ったのは作者もこの場合人類一般の普遍的な存在になっているのだ。夢虹さんの言う人の心の深みに沈んで醗酵する句ではないと言うのも肯定出来ない。

清＝人間の軽さとまで云い切らねばならないだろうか。この為に説明的な感じを与え通俗的な考えに終ってしまったようにも思われる。

薫＝「お温泉にプイと浮き」といった軽いユーモアの味を出している下半に対して、上半が少しとりすました気取った堅さが目に立つ。

春三＝この句は僕は「人間＝そのものへの自嘲のあるところが面白いと鑑賞している。しかつめらしく、いろいろ物を言っている人間が湯槽の中で「軽かった」という人間としての重量感への自嘲めいた諷刺が〝プイ〟という表現に出ている。夢虹君がいうように「川柳的な川柳だ」と片付けてしまう事には反対である。

随って僕の解釈からゆくと、ユーモアとか、教訓だとかの批判は当っていないと思う。「軽さ」といいきった事に夢虹君は物足りなさを感じているようだが、僕の自嘲説からゆけば、「軽さ」に生命がある事になる。

問題になった「お温泉」を「おゆ」と読ませることは確かに指摘があった通り、作者も再考の余地

はあろう。晃説のごとく、なるべくルビをつけづに行けるよう心掛けたいものだが、まだ、過渡期的に私達もその例から免れていない。

（薫風子提出）

年令の差を宝石で埋め合わせ　鵜汀

薫＝「白粉の下は光陰矢の如し」と言う句があるが女性にとつて顔の小皺は大敵である。

若さの美は何にもまして尊く、所詮金銭ではあがなえないのだが、美しくありたい女性の性情は高価な宝石で身を飾り、色あせてゆく若さの埋め合わせをしようとする。様々の装飾品を女性の虚栄心からのものと見るのではなく、若さに拮抗せんとする女の美への執念だとの見方は、中年の女心の深層を一歩深く穿っているように思う。鵜汀氏は女と女性心理を捉えて詠んでいる句が多い。

夢＝若いと云うことは何よりも強い武器だ。

特に若い女性は美しい。ダイヤも真珠もエメラルドも若さの前には太陽の前の人工灯に過ぎない。それを宝石で埋め合わせ出来ると思うのが女である。またそれにだまされるのが男でもある。

本当に若さに対抗出来るのは魂の豊かさだけなのに、その若さもやがては老いる。ビクトル・ユーゴーの次の詩句を思い出した。

「うつそみ、姿、外なる形のみを愛せる者は、わざわいなるかな。死は、かれよりなべてを取り去らん、魂を愛せよ。さらばふたたび、そを見出すべし。」

晃＝薫風子さんも夢虹さんも懇切丁寧な解説をされたが、この句が果たしてその解説に価する句であろうか。この句、女性側から詠んだ句とすれば現代女性のドライさが出ていていくらかはいいところがあるが、男性側から詠んだものとすれば至極陳腐だと思う。何れにしても私には佳作とは考えられない。諷刺が常識的でありぎすてピリッとしたところがないと思う。薫風子さんが中年の女性心理云々といわれたが、この句の何処から中年女性の心理というものが出て来たのだろうか。

薫＝晃さんにはそれが判らないとすると一体どういう解釈をされているのですか。

晃＝薫風子さんと私とこの句に対する鑑賞が全く喰い違っているらしい。薫風子さんは対象を考えずに中年女性の心理としてこの句を捉えられておられるようだが、私は男性対女性、或は女性対男性の或る種の取引きを表現したものだと解釈する。

清＝私も衰えてゆく肉体を宝石のきらびやかさで補おうとする女の性のかなしさを詠んだのだと思う。若い恋人を持った中年の紳士が年令の相違を宝石、すなわち財力で埋め合わせる現在の世相を詠んだとも考えられるが、この句の場合は薫風子さんの意見で良いのではないか。私自身も精神的に欠けるところを物質で補おうとすることがなしとしない。

薫＝私も男性の方がうんと年上であるという男女関係の状態は考え及ばなかったが、女性の方が年上である男女関係を衝いた句として一応鑑賞の俎上にのせたのだ。併し最終的には前に述べたような鑑賞に落着いたのです。

晃＝結論として皆さんはこの句を佳句と思われるのですか。

薫＝水準より一歩抜んでいると思う。

清＝どのような解釈をしてもこの句は常識的だ。

春＝解釈としては薫風子説でよく晃君のは少し考えすぎる。然しこれはハッキリうがちの句であり、晃君の言葉通り諷刺が表面を撫でていて佳句とは申し兼ねるよ。

（春三提出）

半裸の表紙絵飯場誰もゐず　満潮

清＝飯場も大きな建設会社のものは工員宿舎などと称してアパートなみのものがあるが、まだ工事用の板をつなぎ合わせた粗末なものも多い。中は案外整理されているものだが、好色雑誌が放り出されているのを良く見かける。飯場には家族向きのものもあるが、この場合は勿論独身者用であろう。「誰もゐず」はやや手ずれた感じのする言葉だが昼の飯場を的確に再現している。男達の残臭と抑圧された性を感じる。

この句「続・西成界わい」の前書きがあり、作者が意欲的に釜ヶ崎を詠んでいることは敬服に堪えないが、この句は前書きが感動を強めてこそおれ、決して前書きに助けられたという句でなく成功作だと思う。

薫＝解釈は文字の通りで云うことはないが、仕事に出払った飯場の殺風景な荒々しい静まりの中に半裸の表紙絵が、ピンで柱にとめてあるのか、雑誌のまま放り出されてあるのか、とも角それが印象的なのである。その雰囲気は充分に描写してあって余すところはないが、「続西成界わい」という前書きが、私には多少浮き上がっているように思える。西成ならずとも飯場は現代全国的な普遍性を持っている。「西成界わい」というからには、西成でなければといったものの把握が望ましい。

晃＝薫風子さんの云われた前書き云々は浮き上がっていない。それは飯場の状態を「西成界わい」という前書きで或る程度限定している。この句は小説的な構成の作品であるが、作者の経験の再現というよりも、豊かな想像力がつくりだしたイメージであろう。詩的な雰囲気をもっているのは、これが単なる写生ではなく作者のある心象を具象化した作品だからである。夢虹君の流儀で云えば対象にむかって感情移入されているということになるだろう。

夢＝私には理解し難い句だ。この句の云わんとしていることが良く判らない。飯場、これは私も一度見たことがある。そこにはこの句のように半裸の女の表紙絵の雑誌が落ちていた。この句の詠っている情景はよく判る。ところがこの句下五で、「誰もゐず」と云っている。これはその通りであったかも知れないが、ここに作者の主張があるように思える。とすると、半裸の表紙絵の雑誌が飯場に置いてあって誰もいないということで作者は何を云わんとしたのであろうか。何をうったえようとしたのだろうか。それが私にはよく理解出来ない。

晃＝作者は人間が煩悩のまにまに流転する相を表現しているのだと思う。夢虹さんは「大菩薩峠」を読んでも恐らくこの句と同じように何を表現しようとしたのか疑問に思われるのではなかろうか。

夢＝飯場、それは荒くれた男だけの世界だ。人の心をやわらげるなにものもない。そこに半裸の女の表紙絵の雑誌がある。その気持ちは判る。だがそれは男の狂気をかきたてるだけのものだ。昼下がりの飯場でもあろうか。男達は働きに出て誰もいない。そこには表紙のちぎれかかった古雑誌が落ちている。この情景を捉えて作者は何を云わんとしたのだろうか。情欲の虚しさだろうか。それなら私にも理解出来そうだ。近頃の雑誌、新聞、映画、テレビ、ラジオ、あらゆるメデアを通じてセックスが人間のすべてでもあるかのように呼びかけている印象を受ける。人間は皆、色情狂になってしまったかのように。この句はこのような現象に対する批判であるのか。それなら私にも判る。哲学者アウグスチヌスは「情欲はいくら食べても食べても飢えている狼のように私を喰いつくす」と嘆いたが、今日の社会はまさにそのようだと指摘しているのか。それなら私にも判る。生々流転の相と云われても大雑把過ぎて理解し難い。

清＝感覚的に全体から作者の主張を受け止めれば良いのだと思

う。具体的なものを一々挙げることもなかろう。

晃＝この「誰もゐず」に夢虹さんは何か作者の主張がある筈と感じられたのも判らなくはないが、私はこの句の場合この「ゐず」は作者のおどろきを表わしたものだと思う。

薫＝西成と云えば安宿が先ず頭に浮かぶのだが、飯場といったものも西成にふさわしい程沢山あるのですか。晃さん。

晃＝勿論固定してあるものではなく、時たま見かけます。

薫＝晃さんの先に言及されたように、これは作者の「西成」に対する観念的な「おもわく」から発表された句で、飯場もそういった過程から、作者が最も適切な文句だと引用したものではないかと思えます。

清＝釜ヶ崎の飯場の住人は釜ヶ崎の人ではない。釜ヶ崎という特異な環境に置かれた飯場を詠んだ句としては、もう少しオリジナルな面があっても良いと思う。

晃＝この句をはっきり釜ヶ崎と限定してしまうことはいけないと思う。それでは前書きをとれば句が成立しないことになる。この句の場合、先に清生さんが云われたアパートのようなもの或は整然とした夫婦でいるような飯場ではなく、みすぼらしい飯場を想像してもらえばそれで良いのだと思う。

春＝この句の飯場のことだが、私は釜ヶ崎のことは本で読んだ知識しかないので、釜ヶ崎界隈に限定したとしたら誰かがいった通り少し、前書きが浮き上がっている。而も前書きが歴然とある以上限定されたものと解釈する方が一応正しいのだからその点では僕も一寸首をかしげたのだ。ひっかかるのだ。

だが、幸か不幸か僕の住んでいる大阪の西北隅のデルタ地帯には小さい飯場が沢山あって、商売人である僕は、実際によく、おそるおそる飯場へ行くチャンスが多くて、こうした飯場風景によく出合った経験がある。

この句の通りのシーンに出合わしたことが一度ならずあって、その度毎に飯場の荒らくれ男の出払った場面の、飯場生活の男の生活の単純で素朴で、喧嘩早くて、殺ばつで、食欲と色欲に飢えた若ものの達の、留守のシーンには小説的な、彼等の爪跡の空虚な而もシンプルな生活が瞬間的に感じられた事をありありと思い出す。

この場合、作者が「誰もゐず」とさりげなく、而も緊密な表現をしたことに、「成功」が感じられる。勿論「誰もいず」か「誰も居ず」と当用流に使わねばならぬだろう。この表紙絵はやはり押ピンで木の壁に貼られているものにちがいないと思う。

（夢虹提出）

寒い日よ戸棚をあけても風が来る　きさ子

夢＝この戸棚は袋戸棚ででもあろうか。戸棚は思い出の一杯詰っているパンドラの箱のようなものだ。もう黄色くなりかかっている手紙の束に過ぎ去らんとしている若さを空想の世界で、ファスト博士のように取り戻す。恋文、その中の「私」は十九才のままで年をとらない。

色あせた小袖の切れはしは母の遺品である。

紫の色はあせたが色白の母が一番好きだったもの、古ぼけた若菜集、その「初恋」のところにはさんであるもう褐色になっている四つ葉のクローバ、これは崖の下から「私」に初めて母に秘密をつくらせた彼が摘んで来てくれたものだ。バーの女の小型名刺、「私」はこんな物まで大切に置いている。結婚五年目の頃だった。私は泣きながら母のところへ帰っていった。あの時の夫の慌てよう。その時以来、夫は私に頭が上がらない。私の勝利の記念品。戸棚の中には女の過去が生きている。「寒い」日、それは心の寒い日でもある。心にぽっかりと出来た空間。人間が存在の理由を見失った時、その空間を埋めようとして戸棚をあける。頬にひやりと触れる冷たい風、私の過去も私を裏切ってガラス玉のような眼を向ける。そこにはただ死んだ紙屑が雑然とあるだけだ。冷たい風が胸の空洞へ吹き込んでうつろな音を立てる。窓の外も木枯しが吹いている。

灰色の午後の女の心の翳りを詠って余すところがない。戸棚を開けるとひやりとした空気が頬に触れる。この事象をたくみにとらえ、「寒い日よ」の呼びかけと、「あけても」の語で作品の持つ虚しさを基調としたロマンの世界へ私を導き入れてくれる。川柳塔五月号作品の中で一番好きな句だ。

薫＝私もこの句を提出句の第一候補に挙げていた。夢虹君の鑑賞は夢虹君らしく夢があるが甘い。私はこの句は極めて実現的な生活諷詠だと思う。併も、生活の些事の中で感じ取った句でありながら、上すべりせず、稀に見る深い情感をにじませているのは、些細な現象にも心を動かされて、確実に把握出来るこの作者の直感力の鋭さのたまものだと思う。これは生活に直結した、主婦の身近かな台所か居間の戸棚であり、私も寒い日にこういう体験は屢々味わったので、全くうまいと感心させられた。

夢＝戸棚をあけても風が来るという言葉から受ける感じは、戸棚が自分に抵抗をしたか、自分を拒絶したかという印象を受ける。とすると、戸棚は作者にとってその時までは作者の心を慰めるものであった筈だ。私の鑑賞を甘いと云われるが戸棚に過去の思い出が閉ざされてなければならない。

薫＝いや、「戸棚をあけても風が来るという言葉から受ける感じ」ではなくて、寒い日に戸棚をあけると隙間風のように鼻先へスーッと風が来るのだ。戸棚の中から、事実の風がだ。その事実を誰も把握出来なかったのをこの作者が捉えたのだよ。

清＝良い句には違いないがお二人が云われる程の句とは思えない。戸棚に夢虹さんの云われる程に重さを与えるのは鑑賞過剰ではないかと思う。私もこれは台所の戸棚と思う。その戸棚なら主婦にとって最も身近なものであり、一つの拠りどころである。そこからさえも冷たい風が来ると思える感覚の繊細さは立派だ。私は作者を知らないが、日常の些事雑事から離れてフト孤独感、寂寥感を感じた。

句の背後に中年の女のアンニュイを感じる。

晃＝夢虹さんはこの作品を素材にしてロマンチックな散文詩を書かれたので、批評としては余りにも夢虹さんそのものが出過ぎていると思う。私はこの作品はむしろ深い内容を持たない素直な淡々とした作者の実感を詠ったものと受け取る。むしろ余り素直であり過ぎるので、作者の心の漣に石を投げ込んで、もっと大きな波紋を画かせて見たい気もする。

夢＝「寒い日よ」の呼びかけの形も、幻想の世界への導入を意味していると思う。私は作品と鑑賞者の関係について独自な考えを持っているのです。それは、作品は池に投げ込まれた石のようなもので、池は鑑賞者の心です。同じ石を投げ込んでもその池の大きさ、形、深さ等々によって起こる波紋は種々異る又、同じ池に投げ込まれたにしても、石の違いによって波紋はやはり異ってくるのです。

晃＝鑑賞としてはそれで良いかも知れないが、批評の場合はある程度、客観性、普遍性がなければならないのではないか。

夢＝批評というものは往々にして切捨てご免的な傾向がある。批評ということは作品に対する批評者に対する評価であるとすると、批評者はその作品から受けたイメージ、理解等を述べなければなら

ない。私はかく感じ、かく考えたということを明らかにして初めて適正な批評ということが出来るのではなかろうか。

春＝たしかに夢虹君のは彼一流の鑑賞でおもしろいが、又たしかに清生君のいうように鑑賞過剰でもあろう。

これは薫風子説の通り、現実生活の中での一コマを、女性らしく（尤も背後に夢虹のいうようなロマンチックほどではなくても何かをもってはいるが）詠んだものと見た方がよく、清生説のように女の生活へのアンヌイを感じる。

それと共に悪い句ではないが、もう誰かが、そういう句は詠んでいる――つまりこうした想は決して新しいものでなく、その点では、薫風子。夢虹両君が第一級のレッテルを貼るほど僕には感銘がない。

「寒い日よ」も夢虹君が深く「導入」まで考えるほどの深さは感じられない。一応の出来栄えであろう。

（清生提出）

密談へ経理部長がまた呼ばれ　好郎

晃＝小説的な発想の句で句会の作品としては実に旨いと思う。小説的といっても、これは全くの虚構ではなくて作者の体験を句に再現したものであろう。

詩性川柳の作家から観れば恐らく詩のないつまらない作品であろうと想像するが、私は川柳は伝統的に云って抒情詩であるよりも、圧縮された小説である場合の方が遙かに多いと思う。だから、西洋詩学の詩の概念のみを物差しにして川柳の価値を計るのは間違っていると考える。今後のディスカッションにも大いに関係があるので、此際、私の川柳に対する考えについて言わせて欲しい。詩というものは、元来人間の感情の深みをえぐり、それを中心としてテーマを展開するもので、それは人間を生活とか社会とかの関係で捉えて描くというよりも、人間の活動そのもの、人間の心の働きのその内なる力を捉えるものであって、朝起きて飯を食って、電車に乗って勤めに出る。或は商売をする、そして夜は家族と共にテレビを観るというような我々の日常の生活とその生活の中にある人間を表現するのは散文の領域だ。川柳は大体散文的なものだと思う。だから、川柳を批評する場合は小説的であれ、戯曲的であれ、いいものはいいと評価しなければならないのではないかと考える。

夢＝晃さんの意見の詩性川柳作家云々、詩云々というのに対する私の意見は後にして、この句に対する鑑賞を云って見たい。

黄河を治める者が国を治めると支那の賢人が云った。スエズを手中にしたナセルがエジプトの独立をかちとった。エジプトの米倉を司ったヨセフ宰相となった。三井、三菱の財閥は日本の政治を牛耳った。何時の世も変わらないものは人の心である。

今は万事金の世の中だ。ましてや多くの人は数字に弱い。何百万という数字の羅列を見ると食欲がなくなる。経理部長ともなれば会社の重役達の彼の意見を聞かずしては何事も決定し得ないであろう。案外実務上の実権は経理部長ぐらいが握っているのかも知れない。この句、源氏鶏太のサラリーマン小説を見ているようだ。それだけに底の浅い句だとも云える。だがこの句課題吟であることを考えると短時間でまとめられた技巧はうまいものだと思うが、よくある句だとの印象はまぬがれ得ない。

清＝大万川柳大会の席題から選んだ。句意は平明だが川柳本来の形式と内容をもつ仲々気のきいた巧妙な作品で、誰が選者でも上位に入選させる句だと思う。ところが作者が自由な立場のときならあまりこういう句は作らないだろうし、もし出来ても自由吟として投句することは少いと思う。自由詠と題詠に本質的な価値の差はない筈だが、作者に申し訳ないけれども、この句を例にとって題詠についての皆さんの意見が聞きたい。

薫＝会社であろうとわれわれ家庭であろうと「先立つものはお金」ということに変わりがない。経理部長がまた呼ばれとなる所以のものもそこにあるのだ。題詠らしい穿ちの効いた句で、題詠にはこの句のようなものが多い。

清＝題詠の場合ややともすれば機智に富んだ、あっと云わす句が入選し易いわけで、当意即妙な頭の回転が勝を制することが多いため、いつか七面山氏の云っておられたように自由詠と題詠に対する得手、不得手が生じるわけだろう。

薫＝清生さんが句会吟について問題を提出されたので私自身の句会での作句、題詠の取り扱いについて一言云って見たく思う。私は兼題、席題ともに数題提出されるうち、私の作句意欲をそそらぬ題には、それが作句道場としての句会故に作ろうと努めることなく、最初からネグレクトしてしまう。そして、魅力ある題に鋭意作句力を集中させる作句の過程上、一題に数句出来る場合もあるが、結果が自分のこころにそぐわぬ句があれば、自選の上没にしてしまう。題詠にも心を広く浮遊させ、深く凝結させて雑詠吟のときのような心の状態に近づける努力をします。

晃＝句会吟の場合、名句佳句を創ろうなどと云うのはすでに間違っているように思う。句会場では。作品が良くても悪くても、そんなことは第二義的な問題で、皆が作句を楽しめば良いのだ。与えられた題は全部作ると良いと思う。

薫＝作家にはある程度の修練の時期が過ぎると多少なりとも句に個性的な色合いが出てくる。私はそれを大切にしたいと思う。そうする厳さが、句境を深める役割になるのだとも思う。私には私に合った題に対してより外には、作句意欲が湧かないのだ。

夢＝私は薫風子さんの句会に対する意見とほぼ同意見です。又、晃さんの意見にも同感するところがあります。唯、自分の気に入らぬ題に対する態度ですが、表現技巧の修練のつもりで時間の許す限り作ります。句会に出席した限りは出来るだけ沢山天位に抜けて、参会者をあっと云わせ、賞品を沢山貰って帰った方が気持ちが良いからです。まだ若いからでしょうか（笑）

清＝私は句会に作句の練習の場の価値と、川柳人の社交の価値の他は認めません。作句練習にしても、題詠という規制された中でなしに、大げさに云うと芸術的感興の中で作られるべきだと考えます。句会では他人の句をゆっくり鑑賞する余裕が与えられていないことも一つの欠陥だと思います。初心の作家が勉強されるには利用の方法如何では効果はあると思います。句会に出るとするなら、勿論何句抜けたと言う事よりも、何句自分の満足出来る句が出来たかと言う方が問題でしょう。又、天地人という分け方にも私には問題があるように思われます。

夢＝天地人制とかは私には選者の鑑賞眼がうかがわれて興味を覚えております。併し総体に句会吟は良い句は生まれ難いように思います。俳聖芭蕉すらそうで、足で歩いて生まれた句に秀句が多いのです。

薫＝句会のこと、題詠については、前号でも春巣・白柳・春三、三氏が興味ある発言をされたことだし、この辺で打ち切りましょう。

晃＝夢虹さんの言葉の中の良い句、良い川柳、清生さんの句会吟の中で良い句を創るという言葉の良い句とはどのようなものか。それが大きな疑問だと思う。詩として川柳を見るか、又は、散文として川柳を見るかによって価値の決め方が全然違ってくると思う。理想を言えば、選者は詩としてすぐ

金泥集

課題「ハンドバッグ」　麻生葭乃選

高嶺の花と鰐のバッグを見て通り　一栄
荷飾りへハンドバッグ屋程並べ　同
スリの眼が鰐のバッグに凄むなり　同
中古るに次々貰い手あるバッグ　阿茶
ハンドバッグ防犯ベルをしのばせる　同
片身わけ背鰐引張り凧にされ　同
ハイティンバッグを派手にふりまわし　清子
デイトから帰ればバッグほり出され　同
割かんへ皆それ〳〵にバッグ開け　同
ハンドバッグ中あけさせて恋すゝむ　きさ子
ハンドバッグあやめの橋で一つ撮り　同
子を二人育てるバッグしゃんと持ち　同
ハンドバッグ今日は悔みのともに行く　徳子
ハンドバッグ元は娘の贈りもの　同
初任給ハンドバッグが重くなり　みさ子
ラブレターバッグに入れて務めに出　同
着がえしてハンドバッグもえかて持ち　寿美司
母さんのハンドバッグをたよりにし　同
あの娘もうハンドバッグでうなずかず　カネ女
母ァさんのバッグは珠数とハンかチと　同
ハンドバッグビニール鰐に化けている　トメ子
文無しのハンドバッグをひったくり　同
特売のバッグで母は旅に出る　酔夢
借りもののバッグでデイト腕を組み　同
ハンドバッグぶらり〳〵と友を待つ　周甫
来ぬ友の座席へハンドバッグ置き　同
珠数玉をつないだハンドバッグ持ち　有子
読みかけのはがきバッグに入れて出る　同
鰐皮の模造と知らず持つバッグ　勝子
満員車ハンドバッグが口をあけ　同
ハンドバッグもどって来たが中味なく　千夏
バッグにもおもいでつきず母は亡く　同

次回題「修繕」〆切七月末日

れたものも、散文として優れたものも同時に選ばねばならないのではなかろうか。

夢＝晃さんの意見に同感です。私の言う良い句とは、「私の良いと思う句」です。私は小説を読んで感動を覚えることもあるし、詩を読んで感動を覚えることもあります。もともと川柳は詩と散文の両要素を含むものですから、二型態の作品が作られるのは当然です。私は両方の作品を作ります。

薫＝詩的な川柳、散文的な川柳ともに是認します。深さが問題です。俳句的な川柳、川柳的な俳句、ともに結構です。内容や形に捉われ過ぎると、作家が川柳に振り回されることになります。作家が川柳を駆使し、川柳の馭者にならねばならぬと思っています。私が最初に川柳の指導を受けた水谷鮎美さんの「君雲を話すこころになり給え」の句も、「いづも屋で父たり夫たり子たり」の句も同様に魅力を感じるのです。

春＝句会吟との事であるが、これは大してはめるほどの句ではない。前に批評した好郎氏の句が遙かに問題を孕んでいた。課題詠についてはティ談会で触れたから、ここでは晃君が、詩と散文――小説のことに触れているので一寸僕の考えを簡単にいわしてもらう。

詩と散文を晃君はキッパリと彼の考えで割り切って、川柳が小説の圧縮されたものだと規定しているのはどうであろうか。

勿論、小説的発想といっているのはよい。然し小説的発想であっても表現されたものは明らかに短詩形式の川柳であって、ただ小説を圧縮したものではないし、正しく小説とは違うジャンルであり、「小説的内容」は小説的表現と川柳的表現によって異色のものとなっているのである。川柳は短詩型文学である。十七字そこそこの短詩の世界で、内容過剰な小説的構成は、よほどの例外でない限り無理であって、小説という形式はそのためにあるのである。短詩の本質はやはり感動にあり、短詩としての限界においてのたたかいでなければなるまい。

この事は裏返せば、いわゆる抒情だけが詩でないということにもなる。

「詩」というものは案外詩人ぶっている人の「詩」の中になくて、かえって散文の中に小説の中にポエジーがあり、詩のエスプリが見られる事もある。現代詩の散文で書かれたものや、井上靖、太宰治、林芙美子の小説の中にも詩精神は存在する。然しそれは「詩」ではなく、散文であり小説である。

晃君のいう本意は、現代川柳が、あまりに心象作品に傾いたり、主観遍重や抽象に走り過ぎているということへのレジスタンスであるのなら傾聴してよろしいが、詩が「人間とか生活とか社会とかの関係が捉らえられるものでない」というのは問題で、詩は人間と生活と社会との関連に於いて制作されてこそ意義があり、それでなかったら、僕たち今日を生きている人間のあかしがないし、意義もない。先程いったように純粋詩や抒情オンリーの心象作品ばかりが川柳ではないぞという警告なら、それは一つの批評として受け入れられるが、詩のあり方と、特に川柳という短詩形式の特殊形態にしがみついている作家としてはあくまで、小説でない場で小説的発想を詩として（抒情詩に限定せずに）の基盤におかなければならぬのではないか。詳しくは又の機会を待つことにしよう。

（六月一日薫風子居）

塚越迷亭を語る

——交遊五十年の彼とボク——

高須啞三味

塚越迷亭君とボクとの交遊は、実に永い。ボクらの間では「川柳以前のつきあい」という言葉が、よく使われるが、川柳以前であるから、もちろん「妻帯以前」であり、そういう友情について、女房がグズグズ言うと「お前と一緒になる前からのつきあいだぞ」ときめつけるのだが、そのボクの結婚披露宴（日比谷松本楼」に顔を出している川柳家は（当時の写真より）始ン坊、〇丸（ボクの結婚司祭者）茶童（岳父）すずか、陣居、不老（以上故人）万柳、迷亭等であるといえば、ボクらの交遊が如何に古いものであるか、知ることが出来よう。

実は、機会があったら、一度ボクらの交遊について、はっきりした記録を作っておこうと思いながら、未だにそのヒマが得られず、ズルズルになっているが、たしか大正初年と思う。当時随一の読者文芸欄を持っていた文芸雑誌「文芸倶楽部」（博文館発行）の滑稽問答会に、両人とも所属していたのである。二月か三月ボクの方が早かったと思うが、それについてはチャンと文献が残っているのだから、ヒマさえあって、調べれば直ぐ判ることなのである。しかし、どっちにしても、大正初年からのつきあいであるから、ざっと数えて約五十年である。

むかしは「人生五十年」と言った。その五十年、幾人かの人間（現在では万柳、迷亭の二人っきりとなったが）が、綿々とつきあって来た、ということは、なみ大抵のことではない。二人の間で「友情金婚式をやろうか」という話が折々出るのも、あながち冗談とは笑えないのである。

そういう五十年の交遊である。書くことはいくらでもあり、思い出も数えきれないはどあるのだが、あまり身近すぎて、その軽重が判らない。なるべく川柳界の表面に出たことだけを書いて行くことにしよう。

先ず、川柳家戸籍謄本ともいうべき宮尾しげを編の「昭和川柳百人一句」から、その身許を調べてみると、

東京　塚越迷亭（本名正光）明治二十七年一月八日生

出生地　東京市芝区烏森町

柳歴　大正三年、投稿家として川柳を作ったのが、川柳へ手を染めた最初で、大正九年五月「きやり」吟社の同人となり、今日に至る。

一かさねしつけのまんま春を待ち
老教師首を上げると門へ着き
みな上気してお浚いの灯がともり
初婚には限らぬという年になり
金借りに勤め先まで訪ねて来
勤め口ここにも裏の裏があり
押売りをしても正しきおりかがみ
退社する思案つめたき社の机
へつらっておもねってまだ平社員
要領の要る世の中へ背を向け

これが、そのほとんど全文であるが、この明治二十七年生まれというのは、万柳君もボクも同年で、五十年もの交遊ともなれば、お互い七十歳というのも、当然のことながら、ボクも迷亭もまだ実際の年齢に見られたことはなく、大抵は年齢を聞いてから「本当ですか」と驚かれるのであるが、これは二人が案外呑気で、いつまでも気楽なことを言っているからであろう。

ところで、ここでちょっと迷亭の秘密（？）にふれてみると、この「出生地、烏森」というのがそれで、自分でも何かに書いていたことだから、ボクが別に彼の厳秘にしていることをバクロするわけでもないが、ご承知の通り、七十年前の烏森といえば、知る人ぞ知る。東京三大歓楽境（柳橋、新橋、赤坂）の一つとして知られた所で、そこでの出生というのは、言わずと知れた新橋芸妓の子というわけで、南千住で回漕業をしていた彼の父親の、全盛時代の、記念として、彼がこの世に生まれ出たので、彼の血（気質）の中に、そういう遊侠的下町気分が多分にあるのも、決して不思議ではない。

そして、迷亭が一時、「南船二」というペンネームを使ったのでも判る通り、彼はずっと南千住で盛大に回漕業をやっていた父の許にいて、学業を終えたのである。彼とボクとの相似点は、そんな所にもあり、ボクは現今でも、時たま「南作一」のペンネームを使うが、相当の年齢になるまで親の家にいた。そういう点、二人とも仲間から「温室育ち」と甘がられる東京ッ子なのである。

親の家を出て、本当に独立生活をはじめたのは、ボクも迷亭も、関東大震災の大正十二年以後である。ボクは、女房をもらって、そういつまでも親の脛をかじっているわけにも行かないから、サラリーマンになったのであるが、迷亭の方の事情はわからない。毎夕経営の「ラジオ新聞」編輯部へ入ったのは、迷亭の方が少し早かったと思うが、それからの四十年間、ほとんど同じような人生街道を歩み続けたのも、どうも偶然ではない気がする。

毎夕へ入った二人は、それから矢野錦浪伯下の高輪クラブのメンバーとなり、吉川英治、川上三太郎、近藤始ン坊、佐瀬剣珍坊、藤田珍茶坊らと共に、多少の離合集散はあったが、昭和十年頃まで、それは続いた。その間、ボクが興文社に入り、迷亭が大阪へ走ったりの個人的変化はあったが、居が移り、勤めはかわっても、友情には何の変化のなかったのも、川柳という一つの糸につながれた仲で

あったからであろう。大正九年、迷亭は「きやり」同人となっているが、いつ頃からか、彼はその才能を買われて、編集を任せられた。そして「きやり」が菊判（A5判）となり、百頁近い大雑誌を出すようになってから、彼の才能はますます光り輝き、西の「川柳雑誌」「番傘」と並び称される、東の「きやり」となったのも、彼の努力と強気の賜物であるが、彼が「きやり」の編集をやっている間中、ボク（後には陣居も）がその蔭の助力者となり、常に企画や埋草に協力を惜しまなかったのも、あながちボクがヒマだったからばかりではない。

彼の迷亭という号は、漱石の「猫」から取ったと聞くが、どういう心境の変化か、昭和九年四月から、突如彼は本名の正光を使いはじめた。そこで、ボクの企画で、東都柳壇の主要柳人二十七人を発起人として並べ、すずか、陣居、花恋坊、ボクの四人が世話人となって、

塚越正光君の「迷亭」号を送る会

というのを、同年六月八日、時事新報社社交室で、大々的に催した。宿題選者は九人、それに彼の謝選がついて、十題であったが、非常に趣向をこらしたものであったから、それをここに紹介しておくことにしよう。

「変わりこそすれ〳〵」（前句付）　川上三太郎選

「左様なら」　村田　周魚選
「瞼の母」　矢野　錦浪選
「シャボンの玉の門を出て行く」（上の句付）　前田雀郎選
「怒りつつ許す」　吉川英治選
「悟る」　三浦太郎丸選
「初婚には限らぬという年になり」（下の句付）　品川陣居選
「憎まれ口」　竹田花川洞選
「江戸ッ子」　八十島杜若選
「酩酊」（謝選）　塚越　正光選

これ迷亭の全容を物語るもので、この題から迷亭そのものが浮かび上がって来るのを、多少でも彼を知っている者なら、直ぐ感じてくれるのではなかろうか。言うまでもなく、当日は東都柳壇まれにみる大盛会であったが、会場に備えつけた「迷亭箱」と名づけた罰金箱には、当時の金額にして一円余りが入っていて、後の慰労会の資金の一部となった。その罰金制というのが、左の三ヵ条で

一、正光が、自分の名を「迷亭」と呼名した時
二、来会者が、正光を「迷亭」と呼んだ時
三、それに対して、正光が返事した時

一回五銭を徴収される制度だったが、忙がしく会務をやっている連中が、ついこの制度にひっかかって、笑いながら五銭玉を入れる情景は、ほほえましかった。しかし、何といっても、平生から迷亭々々と近くつきあっていたボクが、一番の多額納税者であったのは、後の笑いの種となった。

その後、迷亭は台日に招かれて、昭和十四年台湾へ渡った。五月十五日が渡台記念日だったというが、その点も、非常にボクと似ている。というのは、ボクは昭和十三年五月十五日東京発、十七日大連着で、満鉄へ入ったからである。そして、昭和二十一年に引揚げて、内地へ帰ったが、同じ頃迷亭も台湾から引揚げて来て、東京に帰り、きやり句会へ五、六回出ているうちに、心境を一新する気持ちになったのであろう、十二年目でまたもとの迷亭号にもどり、以来迷亭で東京柳界に活躍しているが、今を時めく川柳人クラブ委員長であり、きやり吟社の顧問であり、川柳長屋連の重鎮として、押しも押されもせぬ存在でありながら筆剣なお衰えず、ここ数年「きやり」誌上に毎月二頁の時評を欠かさず、全柳壇に「迷亭あり」の畏怖感を抱かせているのも、彼の川柳愛の然らしめるところと、ボクは感心している。

さて、彼の作品について語るとなると、この上どのくらいの行数を使うか判らないので、ざっと書くことにするが、前記の「百人一句」の句は、戦前の迷亭の代表句であり、さすがに非の打ちどころのないものである。そして、戦後の句としては、かつて雀郎氏の主宰していた「せんりう」に〃五十句選（自選）〃があり、最近の「きやり」創作句があるが、その前に、彼が渡台して翌年（紀元二千六百年）創刊し終戦まで出していた。彼監輯の柳誌「国姓爺」の句を、少し紹介しておきたい。

人をみな人と思って腹を立て
春餅の中味を分ける箸の先
人の来ぬ夜を夫婦して淋しがり
無駄話明日の時間になってやみ
叱言さえうっかり言えぬ人不足
電話口留守というのに来ると言う
借家難きらいな棚を二つ吊り

ボクら「本格派」人は「伝統派」というが、徒らに伝統にこだわっているのではないので、一応「本格派」といっておく）の作句態度というものは、時と所でそう変わるものではないが、練達の士迷亭といえども、それはどうしようもない。「強気の迷亭」と「弱気の唖三味」と、気性的にはハッキリ対蹠的な二人にしても、作句の上では、そう明瞭に違わないのが、川柳という庶民詩の持つ特性であるのかも知れない。この「人をみな人と思って」という、平談俗語調の中に、迷亭の諷刺があるので、前記の「へつらっておもねって」と異るところのないのも止むを得ない。そこで「せんりう」（十三号）の自選句になるが、これまた第一級のものばかりで、ボク如きの批評する余地はない。五十句みな並べたいが、そうも行かないので、その中から、特にボクの気に入った句だけを十五句拾い出して、この稿の最後を飾らしてもらう。

御会釈に沸く君が代も二度三度
赤いジュウタンを陣情踏んでみる
うとましく聞き耳立てる癖を恥じ
国連に拒否権という天邪鬼
どうにでもとれる言伝てして帰り
飯時に飯の食えない日が続き
一線を画し友情古りに古り
落花生入歯の穴へ身をのがれ
酔っぱらい蹴るんではない靴を脱ぎ
膝のまわりを二度三度さがすもの
ズボンっり上げても闘志沸いて来ず
奥様の素足を火事の晩に見る
長ッ尻まじないの利く奴でなし
佗住居ペンでは食えぬペンを持ち
つつましい夫婦と知れる冷奴

五十句中の十五句だから、蛇足を加えるところは一つもないが、12は高番句として、文句のないもの、特に第1句は、戦後の「天皇旗」句と言っても、過言ではない佳句で、きばることの嫌いな迷亭作品としては、珍しいものと言える。ボクの好きな傾向の句としては、5 6 9 10 14であるが、この「せんりう」の書き抜きに力を貸して下さった大木笛戎君は、第11の「奥様の素足」が、何ともたまらないと言っていた。迷亭の南船二、ボクの南作一、共にある時代は「ペンで食う」ことに賭けたこともある。それを思うと「佗住居」の句が、ほろにがく心を刺すが、それを川柳として、第三者的に見られるところまで成長したのも、最早古稀といわれる、お互いの年齢のせいでもあろうか。

因縁の山河

東野大八

ソ連、中共虜囚生活十八年を送った古海忠之氏が文芸春秋七月号に「満州帝国の最後を見て」という一文を寄稿している。

満州の生活をながく送ってきただけに、私はこの体験記を興味深く読んだ。

古海さんとお会いしたのはあとにも先にも一回こっきりで、中銀クラブのサロンで十分ばかりの間だった。青い協和服のよく似合う、なかなか堂々たる青年長官だった。この人より、むしろ私との因縁は武部六蔵総務長官の方で、この人とは気さくによく会うことができた。古海さんのさきの記録によると脳軟化症にかかられたと知って「あの人が……?」と今更ながら一抹の感慨にとらわれた。協和会の全満大会で山口重次氏の紹介によるもので、この人も颯爽たる好紳士だった。大変私もヒイキにして下さったものだが……。

ところで、古海さんの一文によると、満州国の解体と皇帝の退位を決定したのは、八月十八日のことで場所は、北鮮国境に近い臨江の大栗子鉱業所であった、とある。私は思わず息をのんだことである。

私の満州国時代の写真は、ホンの数えるほどしかない。生家に何気なく送っておいたのや、親しい内地の友人に贈ってたものをもとにもどしたり、失敬したりしたものばかりだが、その一枚に、大栗子鉱業所前で撮したのがまじっている。童話作家の山田健二さん（当時満鉄）と並んで撮っている。大変よく撮れているので、大きく複写していまもそれは私のアルバムにある。

――皇帝以下の満州国要人は、ソ連軍侵攻とともに、関東軍命令により通化より更に朝鮮国境に近い臨江に移っていた。敗戦の時には大栗子に起居していた。八月十七日の深更、満州国の最後をきめる緊急参議府会議が開かれた。会議場は、東辺道開発株式会社大栗子鉱業所の粗末な社宅の食堂であった。（以上、文春の記事）

私と山田さんは、この食堂で昼会をよばれ、そして表へ出てやはり同席していた伊達さん（山田さんの同僚でカメラマン）にパチリとやってもらった。その写真がつまりさきの一枚というわけである。

私たち三人は、東辺道開発会社の招待で、現地ルポを書きにここへ出かけたのである。何年ごろだったか、昭和十三年ごろだと記憶するが、とにかく辺ぴな山また山の、それはそれはひどいところで山の斜面に荒削りの板小屋がへばりついていた。その中の一つが採鉱所だったのである。私はその時のお粗末なその建物のあれこれを瞼に描いて、満州国の最後の閣議がここにもたれたということに、なんともいえない感慨を覚えると同時に、ひしひしとした寂寞感に表われた。建国記念日を中心に、かつて華やかなりしころの満州国の姿と、その中に若い私も独身の花のうてなを謳歌して奔放な毎日を過していた。その感懐からきたものだが……。

大栗子から私は、山田さんらと別れ臨江に出、それから対岸の林子頭にわたった。冬であった。鴨緑江はカンカンに凍りついていて、私はそこを歩いて越えた。二時間ぐらいはかかったろうか、鴨緑江もこの辺はせまい流れで、さしたるものはないが、すべすべする氷の上だけにひどく歩き疲れたことを今でも覚えている。

林子頭では、朝鮮人の市場を歩いた。チョゴリ姿の白衣の鮮人たちが眩しいくらいに市場に溢れていて、どの人もどの顔も朴訥で、誠実で親切なものばかりの顔にみえた。事実その通りであった。日本にいるとげとげしい鮮人たちばかりに接していた私には、大変な驚きであった。どんな人間にとっても、祖国の土の上にいるときほど倖せなものはないと銘記したことであった。だがいまではここも、二分された朝鮮の赤い辺区ととってかわっている。

いずれにしてもつい二むかしほどの歳月で、人も国もこんなに変貌をとげるものかと、私はそれにびっくりしている。因縁の山河はつねに懐しいものだが、その歴史には悲哀がつきものだ。

壁にかく

不死鳥

★最近、川雑玉造支部と川雑阿倍野支部の柳人たちが、合同で、守口の来迎寺へ吟行を試みた。その寺は幽霊の足跡があるというのが呼び声だった。科学万能の現代で幽霊の足跡を見に行くというのも面白いと思った。撮って来た写真を見ると、なるほど布ぎれの上に人の足跡らしいものが写っている。その布ぎれは長方型の額に入れられてあるが、それを金アミで覆うているらしい。一行の中に金アミを専業とする柳人、小松園の説によると、金アミの編み方から考えると徳川時代のものであることは確だ。その理由は、明治以後にはこの編み方は姿を消しているというのである。しかし、かんじんの幽霊の足跡の真贋については誰れも解説するものがいなかったそうだ。

あり方批判の柳誌（月評）

長野笛朗

一

やあ御無沙汰。この前はコタツの中でお話をしたのにもうすっかり夏景色になりましたねえ。多忙で、申しわけないがあんまり柳誌も読んでいないのだが、まあ君の持って来てくれものをひろげ乍らお話をしよう。

最初が「えんぴつ」から見せてもらおう。えんぴつとは新しい軽いタッチの名前で結構だが、宮尾しげをの漫画の表紙では一寸もうズレを感じるねえ。一寸地方誌についていいたいが、地方誌としてのあり方がありそうに僕は思うんだが、「えんぴつ」は番傘の傘下らしいが、それはそれとして、番傘と同じような事をするなら何も雑誌を出さなくとも、その費用を番傘に投じた方が賢明で、柳誌を出すからにはそれだけの存在価値が必要じゃろうな。

もっとローカルカラーも出して欲しいし、番傘本誌で自由にスペースをとれないのだから、えんぴつの同人が、この誌上で、もっと自分たちの考えを発表することなんだよ。近詠があり、輪講があり課題吟があり、会報がありで頁が終ってしまったのでは曲がなさすぎるというもの。ここの同人が句評会を開いたり闘論したり、時には番傘のあり方や句を批判するということがあってもよかりそうなもの。六月号を見て思うのだが、第一頁というのは雑誌にとっては生命のトビラだが、ここの編集はその点始めから三段組の句評は雑誌の体裁のぶちこわしだねえ。「川柳年鑑礎稿」というのは資料として価値があり、これはよい企画だ。一党一派に偏しない方針のようで頂ける。ほめておこう。

次は「せんば」を拝見しよう。この雑誌は「せんば」という名前がプラスかマイナスかよく考えて見ることだねえ。「せんば」なることばの「大阪性」と、この雑誌の内容との不一致のようなものに「せんば」のあり方のすべての半端さが表われているようだねえ。

本当に「せんば」なり主宰の岡橋宣介の川柳への考え方はハッキリしない。いつか「番傘」へ入ってしまって、柳界をアットいわせた事があったが、又々脱退して「せんば」に戻ったのだが、一体何を考えているのか、宣介主宰の作品を見ても（五月号）

愛憎の想念天を考えず

とあるかと思えばその次には

じいちゃんと言われじいちゃんになってしまい

と来る。「リアリティを失わないロマンチシズム」を書いている宣介の本心がよく呑み込めんなア。こんなところに「せんば」が十何年もやっているのに案外新しい人も、古い人もあんまりついて行かず、投句もふえない原因があるのではないかねえ。中途半端は駄目ということなのサ。伝統なら伝統革新なら革新と割り切ることだよ。

ここにはサムライが一人居る。具里院という畀も毒気もない男。盛んにあちらこちらへハっ当りに冗漫に、蒸しかえしの理論をくどくど述べて居るが、案外好人物だという評判もある。どこへでも鉄砲を向けて頑固に打ちまくっている勇気（？）はおもしろいが、考え方が古くて、あんまり対手にされていないようだねえ。例の抽象論も「抽象」そのものの本体と「概念」「観念」など一緒くたに論じていたのでさっぱり本人がムキになったほどのことはなかったようである。雑誌そのものは表紙も美しいし、企画もいろいろ立てていて色んな人物に依頼原稿を書かせているのも結構、だが御大の宣介が、もう少し何か書いてほしいねえ。さっぱり何を考えてるのやら僕らには分らん。

二

「蟹の目」というのを見よう（九十五号）

九十五号というのだから相当古いのだが、その割に人が知らない雑誌。「奥しなの」と共に地方誌としては真面目で好感がもてる。「蟹の目」は金沢の柳誌、主宰格が森下冬青さん。昔はがり版だそうだが、今は騰写印刷で表紙もセンスがある。

一寸作品をのぞいて見よう。

進め、止れ、霊柩車もそこにいる　森下　冬青

ヂグザグの中の一人はけつまずき

鏡面の中の私ハッシ紙の鉄砲に撃たれ　高井　栄成

松の内埴輪の馬を歩かせる

捨てに来た海へふるさとよみがえり　金子　青泡

天睨み廃煉炭が型保つ　古畑丁津男

中々新しい作品もあるし、地味な活動も好感がもてるというもの。折角勉強してほしい。

「奥しなの」（八十五号）

素朴な表紙に一句あり

なまぬるき風の日表医者走る　紫痴郎

紫痴郎翁を顧問の形で長野県中野市から出ている。金井有為郎が永らく編集をやっていたのを西貝篤に譲ったらしい。有為郎は古い川柳家だが、昔から新しい傾向の句を作っていたそうだし、今でも作句はこの中では一番しっかりしてる。紫痴郎翁はカクシャク「行く水」以来大いに若返ったようでめでたい。

この人が「えんぴつ」で芭蕉の「一つ家に遊女も寝たり萩と月」で執拗に「一つ家」は「ひえついえ」で「山家の孤屋」ではないと喰い下った勇気はアッパレ。勿論まだ論争のケリはついていないらしい。

永田きみおという人が美学を論じているが、常識論の受けうりのようである。論文の中でしきりに「柄井君」といっているのなど、一寸鼻持ちならないね。

今日はこれ位いで御免蒙ろう。何、春三君が「馬」を創刊したって。死ぬまでこの男の病気も治らんねェ。オッとこれは内緒だよ。左様ナラ。

福寿司
心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

いたわしや十人家族へ来た嫁御　広島県　杉原　愛鳩
くつ音の非情は闇へ遠ざかり　同
改装が美事に出来たベニヤ板　同
父子二代失恋させた母娘にて　同
船乗りの給料だけをうらやまれ　同
BG二年理想の人が見つからず　同
ふら〳〵としていて蔓はからみつき　同
栄転のパパ親友の中を裂き　同
男性の甘さパパから学びとり　同
PTA貧は黙視のまま帰り　青森県　岩淵　一星
蟻ほどに動く母あり草もなし　同
親も子も出稼ぎデラックスを建て　同
満開へタクシー肌拭くひまも無し　同
金の面見せぬ子の税払わされ　同
涙見せまいぞ発つ子に眼鏡かけ　同
食欲に妻があわてるトロロ飯　同
アイロンがきけばかけたい顔となり　同
暮しぶり見せる来賓はべらせる　枚方市　宮川　珠笑
馬の喰う場面映らぬ西部劇　同
タイピスト恋と云う字を打ってみる　同
健啖の子に囲まれて酌む手酌　同
煮えたぎる油異分子容れぬ音　同
電話では困る話が借りに来る　同
献盃を貯めて上座が姿消し　同
酒の良さ判ってくれるので飲まし　同
自己愛の強さ恋にも酔きれず　西宮市　末沢　花美
アマリリス活けて叶わぬ恋を恋い　同
生来の無口者でとふてくされ　同
とことん迄落ち底辺の持つ安堵　同
肺活量千に満たすも人を恋い　同
啄木忌私も胸を病んでいる　同
他人ではなくなってから憎み合い　同
征服をされても山は静かなり　高知市　須藤　俊江
全身にサロンパス貼るも旅たのし　同
平和なるかな石に値がつき　同
数の子にたらい廻しにされて老い　同
怪我よりもハゲを気にしているベッド　同
死とは安外楽なものらしい　同

一鶴を悼む

河楊　梵鐘

その朝八時すぎ、預かった郵送料の剰銭をもって彼の室を訪ね、戸をあけた途端、私はハットした。

彼はベッドに仰向いたまま、半眼を一点にとどめて意識不明になっていた。いつ呼ばれたのか、彼の母、長男、妹たちの肉身が枕辺を取囲んで、不安げに彼の顔をみつめていた。

前々夜、私は彼の室で手紙の代筆をしたばかりであった。酸素吸入をつづけながらではあったが、彼のことばは平静で、急変するなどとは思いもよらなかった。

「ここ二三日は危険だと思うが、それを無事に過ごせば、また落付くと思える」

また、

「そんなことはめったにないと思うが、万一のことがあったら……云々」

と話していたほどだから、大事は自覚しながらも、慎重にこの時期を乗切ろうとしているように私には感じられた。

「とりあえず聞いておこう。いま、そんなことを考える必要はないだろうが」

と、私もサラリとした調子でこたえた。

それから、これを明日別の人のところへ郵送してほしい、といっ

悠悠自適辞典の隅で見は見たり　東京都　山本　木象
青葉かな老妻　金魚鉢買うて　同　同
バナナなら叩いて売りたい遅れ　同　同
善人と云われさげすむ目にも会い　同　同
宿の傘袂ゼニまで宿の音　同　同
ジョッキーの手が染りモミゴムの葉影　同　同
月の裏に住むごと僻地にあけくれる　仙台市　平野　光道
豆腐あり酒あり僻地に蛙きく　同　同
金もためず転びも起きもせず停年　同　同
バイク疾走女をしかとすがらせて　同　同
焦らずになどと無能をあざけられ　同　同
藤もっじも咲かせお寺は誰を待つ　同　同
歯ブラシにきょうの心をささのえる　京都市　大久保　和三郎
スイッチに頼る畳のないくらし　同　同
寝たばこで雨を見ている日曜日　同　同
僕だけをよけて天下を回る金　同　同
引力に任し貨車から荷を却し　同　同
例えばの例に人の疵を借る　同　同
産んどいてお婆さんにゆけお婆さんにゆけ　鳥取県　鈴木村諷子
おもちゃ屋の前で子供にいじめられ　同　同
神官も僧侶も生きる背広着て　同　同
ポケットの裏っ側では舌を出し　同　同
金になりゃ外人だろが禿げとろが　同　同

薬屋のテーマソングで来る八百屋　奈良市　村上　春巳
停年へ間近と云うがいるメーデー　同　同
尼さんになるわさ義理の娘がおどし　同　同
労働者とは見えず執行委員長　同　同
スモッグのおこぼれ奈良も都会並　同　同
子宝に恵まれず見る鯉のぼり　羽曳野市　戎　川太郎
いろはより信号を先ず覚えさせ　同　同
ファンとファン見知らぬ仲の祝い酒　同　同
道草のつもりが道を踏みはずし　同　同
適齢期栄養過剰もて余し　同　同
いけるのが世話の万端する花見　新居浜市　安藤　桂仙
ゆらゆらと老の心猿まだつづき　同　同
ミイラでは無いと証拠に歩き出し　同　同
固執してアブ蜂取らずの道がつき　同　同
小姑は恋で精一っぱいらしく　倉敷市　水谷　谷水
ご令妹は魚河岸向きて目をあつめ　同　同
散歩の道もなくしてなにが町づくり　同　同
うちの娘も二十才ですのと匂わせる　同　同
夫婦善哉古い浮気も笑い草　香川県　三井　酔夢
乗る降りるバスガイド付遍路旅　同　同
鍵っ子の淋しさチャンバラ斬りまくり　同　同
幾久し神テープにて繰返し　同　同
長話お供の犬が下駄の番　高知県　山川　勝子

て、彼は知人におくる新約聖書と人形を私に托した。

翌日、言われた通りにそれらを小包にし、手紙を書添えて発送したのであったが、それは、はからずも、彼からの最後のものとなってしまった。

柳友一鶴は、四月二十一日午前十時十五分、遂に帰らぬ人となってしまった。あと一カ月で満三十九才になろうとしていた。

杉本一鶴（本名鶴吉）君は、大正十四年五月七日、岸和田市に生れた。（この稿をしたためている今日は、奇しくも彼の誕生日にあたる。）

戦時中は見違えるような太った大きな体格で、徴用にもゆき、軍隊にも召集されていったらしいが、後年、胸を病んで、昭和二十四年十一月七日、千石荘へ入院した。以来十五年間の入院生活であった。

彼は喀血しやすいたちであったが、病克服の信念からか、近くの

お見それは半年逢わぬ隣の娘　同
汚れ物土産と共に先に去に　同
雨洩りも直さず車買うという　同
太いのを横目で細う永う生き　玉島市　水粉　千翁
茶をくれる妻はわたしのものですよ　同
帳尻を締めて汚職をやりはじめ　同
抵抗をする鉛筆をただけずり　同
オールドミスの頭回転早すぎる　大阪市　西本　保夫
求人欄丹念に読んで平社員　同
勤続二十五年学校出には追こされ　同
お茶室でオールドミスが振る采配　同
信仰と別に浮気を持ち合わせ　兵庫県　常岡　孝風
愛のきずな断つ日貧しき詩に向う　同
女のエゴ虚飾の如く亡びゆく　同
死に近い重患畳へ持ち帰り　同
変りばえせぬ湯どうふで酒楽し　堺市　青山慶之助
無責任なりに出世の道もあり　同
戦後派へニラミがきかぬ仁王様　同
ボクボクと五十すぎても若いパパ　同
創業二百年三児みな継がず　松江市　内藤　喜夫

八雲村岩坂の出雲民芸紙を訪ねて

日本の場末で生きる文化財　同

宮崎を訪ねて　一句

埴輪にも人相があり美男と美女　同

生活の演技の中の誕生日　同
物干からハシカ同志が話し合い　大阪市　川口　弘村
蠅の翅音ふとふるさとを思い出し　同
商魂がキモノまとってミス誕生　同
ニキビ隠すパンソウコウも花型に　同
農繁期爪にも春の泥が入り　宝塚市　山本　定夫
矢印に三度曲げられ質に着き　同
古本の恋も明治へ遠くなり　同
排気ガス吸っても春はやはり春　同
独り身というホステスの肌の荒れ　羽曳野市　井上　圭太
さいならと真っすぐこいきん振り向かず　同
手術決まる青葉の青を灼きつけん　同
勇退を早くもさとるアユやふな　笠岡市　谷本鈍愚坊
テレビないわら家目印すぐ判る　同
方便で忘れる事のうまくなり　同
新課長印を捺すにもひまが要り　松原市　守屋　万竿
教育の権化オールドミスに化け　同
男見る眼が肥えてBG二年生　同
派出所へ左遷をされて待つ停年　児島市　伊丹柳瓢子
恥かいた票で町議を落選し　同
口答え出来ぬ不満は箸取らず　同
アンテナの林の中の鯉のぼり　笠岡市　出原　真奇
娘へ手紙時下春暖の候と書き　同

墓地の無縁地蔵へよく詣でてることがあった。

昭和三十三年の五月十三日に右上下葉切除の手術を受け、翌三十四年六月十二日には右第一成形術、つづいて十一月十七日に左骨膜外充填術を受けたが、いつの頃からかぜんそくにも悩まされていて、恢復も好調とはいえないようであった。先ごろ彼は数回にわたり、喀血をした。それに、ぜんそくの発作も加わったのか、一時失神状態におちいった。その時の主治医の手当で意識をとりもどしたが、それまで起居にあまり不自由をしていなかった彼も、以来臥したままであった。そしてこの急変となった。昭和三十年ごろ、彼は「体温川柳会」にはいって、コツコツたゆまず作句するようになった。一本気というか、すこしカドのとれない感じはあったが、どうしたものか私を非常に信頼してくれた。私にはなんでも話し、また私のことばの中から、何かを汲みとろうとしている様子が、彼の純真さに触れるように、ビンビンと感じられた。少々かたくなともみえる感をひとに与えていた彼ではあったが、調子のよい人間よりも彼の方がはるかに好ましく私には思えた。

数年前、私が身辺のことに煩わされて、川柳会の世話が、出来なくなったとき、ある野心家のために、川柳会があやしげな方向をたどったことがあったが、彼はそれに同調せず、頑として「体温川柳会」の面目を捨てなかった。また、私からいろいろ聞くにつけ、路郎先生を敬慕することひとしお

社の野球彼女の前でハンブルし　同

農地報償ぼんやり肥桶眺めて居　兵庫県　斎藤たけお

新築はこれ見よがしに派手にぬり　同

お年ですと医者も相手にしてくれず　同

他人の子をあやす妻まだ共稼ぎ　羽曳野市　杉本　胡人

プラトニックラブは道草ばかりなり　同

ヨロメキのドラマ終ってさあ掃除　同

駅弁を買う駅があり旅剛れる　大阪市　米浪進之助

ビニールハウス歳時記と別の花が咲き　同

新緑の樹下へ野立ての幕をはり　同

カロリーも知らず育てて優良児　羽曳野市　谷　一征

久しぶり叱られ母はまだ達者　同

明日デイト当らぬ予報も気にかかり　同

悲しみを半分にする保険金　今治市　八塚三五島

掛金をかけたらすぐに死ぬ話　同

平服になった花嫁よくしゃべり　同

庖丁の音まな板の音故郷の朝　玉島市　井上　旭峯

三人の知恵が結局むだ話　同

貪欲に似合わず葬式派手に出し　同

抗議文にぎりつぶして多数決　パロアルト　斎藤　流路

金持の子孫外貨をまきに来る　同

通訳をつれて議員の酔ており　同

逝く春を惜しむ余裕のない暮し　鳥取市　近藤　秋星

小才があたら旧家を売りに出し　同

男嫌いあんたも本気にしていたの　同

病人の母が料理の審査員　大阪市　福富　隆子

度胸ではないが文無し強く出る　同

よそ目にも同情される程飲まれ　同

習性の悲しさ値切りぐせがつき　大阪市　銭谷かをり

母になった自信乳房をぷいと出し　同

宴なかば会費を叱る酒のきれ　神戸市　吉田　隆史

哀愁弔辞されど仏に貧しがあり　同

夕勤行すませて粥の甘いこと　京都府　西村句楽坊

ふりこうに死後語る僧死を怖れ　同

舞扇年齢を見せない振りになり　河内長野市　森本黒天子

習いたての見振も入れて待ち合せ　同

安心をさせて結婚強いられる　八戸市　川村　映輝

父親を貶すテレビ座談会　同

行列に活力メタル切手にショウ切符　大阪市　和田　旋鳳

銀行の中にも忍者いるらしく　同

春闘　一句

我儘に育てヤンチャをもてあまし　山梨県　赤池　五朗

オッチャンと呼ばれ鶯鳴く里に　同

アカシヤが散ったに返事まだ着かず　羽曳野市　古川　静波

傘閉じてより夕虹の美しい　同

殊勲甲父のみやげの岩つつじ　大阪市　藤冨　淀月

であったが、御来荘の折にも、先生に接する機会にめぐまれなかっただけに、先年意を決して本社句会へ出向いていったこともあった。

一昨年（三十七年）四月に彼は不朽洞会員となったが、その意中には、さらに深く先生の謦咳に接したいという念願があったものと思われる。

また、その頃だったと思うが、クリスチャンである知人I氏のことを彼に話したことがあった。I氏の人柄だとか、私と話合ったことなどであったが、それが影響を与えたかどうかは知らないが、彼は間もなく信仰の道へ心を向けるようになった。I氏がそうであったように、プロテスタントの無教会主義ということで。

自分は生涯川柳を捨てない、と言っていた彼は、信仰についてもまたひたむきにぶっかっていっ

コーヒの味

モダン川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL (271) 6684

御集会には階上を御利用下さい

アルバイト符牒おぼえたおもしろさ　同
空巣にはあつらえむきの農繁期　羽咋市　三宅ろ亭
星の数随分あるな夜水引き　同
小マッチに千円ぐいと出すも客　大阪市　中川滋雀
凹んだまな板電化の窓に干し　同
意見だけ出してまとめはまかし切り　七尾市　松高秀峰
愛情がほしい子供の背を流し　同
いい歯まで抜いて頭痛はまだやまず　マカベリ　上田紅溪
鬼は外女中部屋から笑い声　同
シガレットくわえ小言を考える　松江市　岡崎祥月
盆栽に老後は生きる趣味があり　同

精神病院雑感　一句

心病む人とも見えぬ踊りよう　高槻市　撫本枝蝶

仕合せはふたりで囲む青い酒　同
初節句二日早めた日曜日　大阪市　宮尾あいき
忘れられて夜空に尾っぽ垂れた鯉　同
なだめ方試すつもりか泣いて見せ　金沢市　根上杏花
横綱を投げまぐれですまぐれです　同
さらさらと書いてゆくり読みなおし　岡山県　永宗宗義
出稼ぎの父が帰って夜を更かし　同
心配の母に鼠が居なくなり　大阪市　山田李鳥
恋すればわが人生も春を呼び　奈良県　木村よしを
参観日ファッションショーのママが来る　岡山県　久戸瀬春光
さすがに移民花嫁候補だけ笑顔　茨木市　高木繁太郎
子供の日親にねだるをはばからず　出雲市　和泉松風
憎らしい事云うてきた日の余情　大阪市　稲本凡子

た。そのためだろうか、最近、彼の心の持ち方にすこしずつ巾が出てきたことが、明らかに感じられるようになった。いよいよこれからさきの彼が、たのしみに思えた。

だが、一鶴は、信仰と川柳をかたく心に抱いたまま、昇天してしまった。ほんとうに生きていてほしい一鶴であったのだが。

いま私の目の前に、一枚の彼の原稿用紙がある。第一行目に書きかけのままの句が一句

来世などどうなろうとも治りた

までで終っている。いつ書かれたものか知らないが、彼の急逝をおもうにつけ、この句がいたいほどかなしく胸をうつ。

（5・7記）

詠　近　舟　同

大阪市　橋本緑雨

庭石に腰をかけると春らしく
空けっぱなしの玄関にピアノが見え
教訓になる句碑が又一つふえ
団体の一人を探の旅の空

和歌山市　秋月宏方

黒田節ほどに飲みたいとも思い
心平和僕に句帖のあるかぎり
ビタミンも飲まずアルコールに頼り
消火器は待機のままでいててよし

今治市　長野文庫

わが金で飲み下積みに悉なし
歌一つ歌えぬとこを信じられ
縁遠い数字で首相煙にまき
コレクションしている訳でないマッチ

今治市　月原宵明

墓守りのまだ人生を捨て切らず
夏みかん転んで村のバスとめる
花よけて汲む神苑の洗い水
入院はバケツにいれた目高なり
ゴルフ場から融手割る指図する
とろゝ擦る腕を書斉へ借りにくる
合理化と云うが大将気にくわず
社長室の電話社用をかけてこず
妥結してこんな奴らと握手する

長野県　高峰柳児

ふきのとう貧しき庭をうるおわせ
つんといる女帽子がよく似合い
羽田発のきものに大臣引立たず
発車ベル堅い握手をあわてさせ
陳情の訛り大臣なごませる
清貧を凝る宗教に支えられ

名古屋市　長谷川鮮山

生活の奥の奥まで聞きたがり
小切手帖相手の来る手考える
返事せぬ覗けば奥で見るテレビ
茶代りと云うて如才のないビール
貫録がだんだん磨きかけた芸

山口県　吉川亜人

松山に遊びて

筆跡の丸み懐かし伍健の碑

第百六十回

大萬川柳

兼題「勳章」入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数　五百十二句
入選　二十九句

勲章に春宵十話素っ気なし　羽曳野　圭太
勲章に言いたい口を封じられ　倉敷　方大
ワッペンーム吉田茂に大勲位　豊中　夢虹
勲章は長生きしてただけのこと　布施　清人
勲章がわたしを後家にしてしもうた　門真　鉄児
勲章があって再婚ふみきれず　同
少年に夢なく勲章馬鹿にする　富田林　美房
帯止めになるとは勲章知らなんだ　大阪　小松園
第九条へ金鵄勲章苦笑する　玉島　千扇
勲章を子供のような顔でうけ　同
陣笠も勲章つける日を数え　呉　甦光
善政は勲章よりも光るはず　大阪　阿茶
国敗れ勲章誇る人もなし　笠岡　白梅子
勲章で政治献金釣るつもり　同
古物屋の棚に寒む寒む旭日章　西宮　多久志
勲章で意見するとは古うおます　大阪　梅里
人間が嫌やになるころ叙勲され　枚方　珠笑
臨終へ勲一等を贈られる　同
ヤミ市に出た勲章を忘れかね　大阪　章雅
勲章を貰い爵位も欲しくなり　笠岡　遠二
戦死には洩れず勲章には洩れて　泉北　好郎
旭七の父旭八の子と眠る　羽曳野　圭太
気の抜けたからしのように来た勲章　京都　句楽坊
勲章が人に甲乙つけたがり　大阪　良
勲章さげて剣さげて父狂い　大阪　晃
勲章にまだしみついている悪夢　笠岡　忠三
（人）
功七級養老院でぼけており　羽曳野　静波
（地）
勲章のその小さきに夫眠る　松江　鶴丸
（天）
勲八等父の義足のきしむ音

大萬川柳ベストテン（六月現在）

一　梅里　九、〇　大阪
二　章雅　七、五　大阪
三　方大　七、〇　倉敷
四　きさ子　七、〇　岸和田
五　夢虹　七、〇　豊中
六　桃里　六、五　笠岡
七　晃　五、五　大阪
八　遠二　五、五　笠岡
九　静馬　五、〇　高槻
一〇　静波　五、〇　羽曳野
一一　美房　五、〇　富田林
一二　柳志　四、五　大阪
一三　阿茶　四、〇　大阪
一四　好郎　四、〇　泉北
一五　宗太郎　四、〇　石川
一六　文秋　四、〇　大阪
一七　弘朗　四、〇　倉吉
一八　千扇　四、〇　玉島
一九　光道　四、〇　仙台
二〇　鶴丸　四、〇　松江
以下略

……

次ぎの兼題「仏像」五句以内
〆切　七月十日
発表　七月二十日

八月の予告「けちんぼ」
〆切　八月十日
発表　八月二十日

投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ十　大萬川柳会

★

大萬川柳会々則

一、本会は川柳に趣味を持たれる全国の同好者に広く呼びかけ名実共に唯一の川柳道場としてその技その覇を競い斯道の向上発展と柳人相互の親睦を図るを以って目的とします。
二、毎月の出題並びに選句は川柳雑誌社主幹麻生路郎先生にお願して居ります。
三、投句はすべて一句毎に句箋に清記し無記名のまま一連番号を附して選句をして頂きますから絶対公平であります。
▽毎月十日締切二十日に発表。出題及び入選の発表は毎号の川柳雑誌に掲載されます。
四、左記の採点法により月々の得点を加算して順位を定め毎月ベストテンを発表します。
▽天の句四点　地ノ句三点　人ノ句二点　佳吟一、五点　平抜き一点。
五、毎年三月より翌年二月までを一年度として年度間の総合得点の成績により順位を定め年度ベストテン把持者に賞状並に賞品を贈り大会の選者に推薦し祝賀宴に招待します。同点の場合は前年度優位によって定めます。
六、大会は毎年三月に行います。
七、会費は不要　但し大会の会費は百円投句料五〇円。
八、投句その他の連絡先は大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇大萬川柳会宛に願います。

昭和三十九年七月
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇
大萬川柳会

コクヨ
コクヨ便箋

姫路市　時　実　新　子

憤り　金魚いっぴき逆のぼる
川底光り　ここも逃避の地にあらず
月は黄金そのにせものが墮ちゆくよ
花いっぱいの風船とぶ日　人を喪う
うつ伏せの裸体後悔などしない
パラシュート　ひらかなかった歓喜の天
噴水は水でしかない日のうつろ

津山市　定　金　冬　二

労働者指の曲ったまま死ぬか
あきらかに自虐の靴のひもをしめ
さてボロボロの汽関車の釜を焚かねば
ノックするドアーは見えて裏切られ
ぼくの支持者はぼくよりはなし旗を持つ
神さまの国の蛙のへそを見たか見たか
それでもぼくは重いトランクの方を持つ

大阪府　早　川　清　生

河野春三選

愛だなんてかさなる蛙泡を生む
父なき子生みつぎネグロ神信ず
人にひれ伏して都会の空得し鳩
動物園生まれの虎で夜は眠る
漁夫の墓矮く　県費の観光路
スポーツ欄読んでまっ白な一面

岐阜市　青　木　満

にんげんの　矢は激しさにむかう風
にんげんの　矢を拾う手に虹の線
にんげんの　矢が音を立て父の指
にんげんの　矢を慕うとき骨がある
にんげんの　矢を成すここに男の血
にんげんの　矢が開放の愛に浮く

大阪市　橘　高　薫　風　子

生れし時灯ありき死にゆく時灯あらん
蝶翅を閉ざし　わたしは妊りぬ
妊りしならん満目菜種の黄
母の爪　赤きを見たり生れ来て
緑から生れ毛虫は緑の血

玉島市　水　粉　千　翁

制帽をかぶりわたしを捨てて来た
筆持てばやっぱり太く書いて見る
また死んでいるね　交通事故と言う
暗転のあゝ葉桜が目に泌みる
春雷が花の呼吸をととのえる

豊中市　林　夢　虹

受胎告知　汗して女生きはじめ
胎動を二人して聴く　月は太古の蒼さ
私生児と笞打つ笞の手よ腐れ
妻泣くやよし児の手も足も指五本
燕飛ぶ耶蘇名マグダラ生れ出ず

大阪市　麻　生　田　律　子

皿小鉢　微塵に割って女生く
花火炸裂　福音のない屋根つづく
泣虫でない　すがりつく柱欲し
今日もまた敗けた白い封筒白い便笺
クレーンの空青ければあたしを吊る

守口市　網　野　花　泉

秘密もつ人間に売る色ガラス

横顔の線エプロンの白となる
日の丸の風になびけどもう燃えず
警棒の遂にこゝろも黒ずめる
終戦のあとは仲間をうちころす

尼崎市　高田千穂

枝に懸けおきし恋　緑の炎が包む
愛　誕生　囁きやまぬ森の樹々
闇はかすかに動き　星の子が生まる
問わるれば　ひときは高き杉を指さん

兵庫県　常岡孝風

思想なき顔胃にめしをつめるなり
弱き者死ねこれが政治か資本家よ
いくじない身に日の丸を赤く塗る
空重い失職　首相の顔ばかり

大阪市　今西章雅

メーデーに緑の旗のない不思議
血を売ってスラムの雨を詩で癒やす
保守も良し針のみみぞの天も碧(あお)

羽曳野市　古川静波

螺旋階段のぼりきって蝶に届かぬ掌
雨季の傘は健康者の喜びを持つ
炎天の傘よ　俺も失業している

羽曳野市　戎川太郎

青春を羽搏かん　翼もがれても
歯車の狂いギシギシ鳴る苦悩
手さぐりの人生に待つ　病あり

竹原市　松井可笑

バラバラに解体をして愛そうか
幸福は時間のながさではない
この人をケダモノにする夜を愛す

大阪市　西本保夫

軍歌集には無い軍歌知っている
ローカル線めぐく機関車に似た出世

鳥取県　鈴木村諷子

美しき蝶に　毛虫の心あり
恩しゅうの　空をゆっくり流れ雲

京都市　室井八九寸

かしわ餅の葉にも失業の波及ぶ
点と画ネオンのビール噴き消える

松江市　柳楽鶴丸

故郷の清流下流ではよごれ
マスコミに二人の恋を売ってみる

玉島市　井上旭峯

精いっぱいの抵抗指が鳴っただけ
不本意の賛成左の手をあげる

仙台市　平野光道

人混みで人のよいのがはみ出され
後ずさりして門標の出来を賞め

新居浜市　安藤桂仙

深刻にみつめることの少なすぎ
暗がりでねずみ泣かして　居る二人

岐阜市　日東里

苗代の底青む　農夫の顔に応うべく
素直さのある一筋がほほえまし

羽咋市　三宅ろ亭

ライバルと眼が合ったので微笑する
病状は毛布一枚さえ重し

金沢市　根上杏花

ナイターのマイク見知らぬ名が流れ

岡山県　永宗宗義

小松市　関戸宗太郎

大阪市　藤富淀月

新居浜市　賀本升

古俳句と古川柳

冨士野鞍馬

○）の生まれで、寛永二年（一六二五）十五才で松永貞徳の塾へ入り、十八才から俳諧を始めた。慶安四年（一六五一）四十二才で点者になった。芭蕉の友で、寛文十三年（一六七三）二月七日、六十四才で没した。

○

目には青葉山時鳥初鰹　素堂

これも十八音で、今日も人口に膾炙されている。それで川柳もこの句に因んでいろいろに作られている。

目と山と耳と口との名句なり
（タル三六18）

とほめ、その時鳥と初鰹を、

目と耳は只だが口は銭が入り
（タル三九19）

天に耳地に口のある江戸の夏
（玉柳10）

耳と口どっちか早い四月なり
（コリ三25）

時候たがはず鳥も出る魚も出る
（傍四18）

ほととぎす愚案の所へ珍魚来る
（タル二六10）

聞いたかと問はれ喰ったかと答へ
（〃二二21・拾初）

海からは烏帽子山から杏が出る
（〃八四11）

などと詠み、時鳥はまた杏手鳥といい、鰹は烏帽子魚の異名があった。いずれも四月に出るのであるが、

初かつほ山ほととぎす嫁の礼
（拾初）

と嫁の年礼は、おくれてこの頃になるのもあったようである。なお戯作に、

僧正は山時鳥青葉也
（タル一五4）

時鳥僧正茄子はまだかなり
（傍二33）

初鰹は僧侶に用はない。

座頭の坊山時鳥初鰹
（タル一四1）

座頭は盲人だから青葉を見ない。

伊勢屋に鰹つんぼうに時鳥
（タル二二4）

下戸に剣菱つんぼうに時鳥
（〃九一32）

伊勢屋は初鰹を買わないし、つんぼには時鳥の鳴声は聞えない。剣菱は酒である。

山口素堂は、名は信章、寛永十九壬午年（一六四二）甲州に生まれ、二十才の頃江戸に出て漢学を修め、寛文中期頃京都に居て、和歌、書道を学び、また江戸に戻り、儒学、算用で官に仕えたが、延宝七年（一六七九）三十八才の時致仕して、上野不忍池畔に居た。貞享二年（一六八五）からは葛飾に住み、「葛飾風」の祖といわれている。芭蕉とも友人で、享保元年（一七一六）七十五才で没し、谷中感応寺中瑞音院に墓がある

○

これはこれはとばかり花の吉野山　貞室

は、人口に膾炙され、現今もなを一般に覚えられている。勿論江戸時代にも有名で、古川柳も、これに関心をもち、いろいろにおもしろく詠まれている。この句が十八音になっているので、

よしの山十八文字でとどめたり
（タル一八39）

よしの山一字多いが名句なり
（安九信2）

吉野山横手をうって十八字
（タル五六30）

吉野山十七文字でほめたらず
（〃七16）

知たぶり談林風は十八字
（〃九二14）

五七五の手爾葉で足らぬよしの山
（〃三七3）

字あまりの己後は一句もいひてなし
（〃二一ス5）

などと詠まれてある。芭蕉が、後に吉野山へ行ったとき、この名句が頭にあって、一句も詠めなかったという話である。それでまた、

よしの山これより上の句はきかず
（タル二六27）

という川柳もある。「これはこれは」というのに対し、

吉野山お久しぶりのようにほめ
（タル五二19、一三二4）

よしの山引ッきりもなくほめて置き
（〃三〇29）

礼をいふやうに貞室句を吟じ
（〃一六三14）

これはとばかり吉野迄人の山
（〃一一24）

と詠まれ、またこれをもじって、

仏前へこれはこれはと吉野葛
（タル一〇六15）

これはこれはとばかり花は小菊也
（〃三二19）

栗は栗はとばかり秋の木曽の山
（〃一五八5）

という戯作もある。

其角が三囲で雨乞の句「夕立や田をみめぐりの神ならば」とならべて、

十七はみめぐり十八は吉野
（タル二一ス8）

十七八で名高いは雨と花
（〃二九17・六六23）

とも詠まれている。

また喜六の歌「吉野山花まつ頃は朝な朝な、心にかかる峰の白雲」ほ、同じ吉野山を詠み、三十二音になっているので、

貞室も喜六も一字たしてよみ
（タル七四15）

と、いずれも一音多いのに興味をもっている。

貞室は、安原正章といい、通称鑑屋彦左衛門という京都の紙商であった。慶長十五庚戌年（一六一

言水

木からしの果はありけり海の音

この句の人口に膾炙され、「凩の言水」と呼ばれた程であるから、川柳好士も興味をもち、この句の文句を取っていろいろに作っている。

けだものの果はありけり糀町　（ケイ二八）

と平河町のももんじ屋を詠み、

木枯の果は有けり庵の薪　（タル八七16）

凩の果は有けり夜泣石　（ケイ二三）

と遠州小夜中山の夜泣石も詠まれ、

五十嵐の果はありけり黒油　（ケイ二一）

五十嵐の枸杞は売れけり銭の音　（タル八四34）

いからしの果は有けり紙屑屋　（〃一六三22）

両国広小路に、五十嵐兵庫という油見世があって、黒油や枸杞油を売っていた。

華の花の果もありけり油皿　（ケイ二六）

白萩の果はありけり筆の鞘　（〃二三）

大仏の果　は有りけり銭の音　（〃二四）

京都方広寺の大仏を潰して文銭を鋳造した。

懸想文の果もありけり反古団扇　（ケイ二六）

黒髪のはてはありけり渡返し　（〃初）

白浪のはてもありけり鈴ヶ森　（タル七五19）

しからしの果は有りけり吉田町　（〃一五七8）

こかなしのはてはうみけり棚の角ミ　（〃九一19）

粉からしの果はあれども利かぬなり　（〃九〇26）

と盗賊の果て、夜鷹、梨、芥子なども、その文句取りで詠まれ、

川竹の果は真水に戻りけり　（ケイ二四）

しからしの果はありけり嵯峨の奥　（タル一二〇3）

と遊女の年明、祇王、祇女、仏の嵯峨隠棲も詠まれている。

池西言水（ごんすい）は、慶安三庚寅年（一六五〇）奈良に生まれ、十六才で法体となり、松江維舟に俳諧を学び、延宝四年（一六七六）頃江戸に下り、芭蕉、才麿、幽山等と交わり。俳壇に重きを成すに至った。天和二年（一六八二）から三年程諸国を遍歴して、貞享元年（一六八四）の末から京都に定住した。はじめ新町通六角下に居たが、元禄七年（一六九四）に室町椹木町に移った。享保五年（一七二〇）奈良へ移ったが翌年秋京都へ戻り、その冬から中風になって、遂に享保七年（一七二二）九月二十四日、七十三才で没した。墓は京極誠心院内の和泉式部の墓の側に在る。

言水は、元禄俳人中卓越する一人で、芭蕉等と共に俳壇の革新に貢献し、近畿、北陸、中国、九州まで、広くその勢は及んだという。

増田耕民氏の死を悼む

大西八歩

去る五月一日、鳥取川柳界の長老増田耕民さんが亡くなられた。行年七十四才。先年中島鉄次さんを失い、今又耕民さんとも永のお別れとなった。淋しきかぎりである。今年一月に生協会館で開いた、新春句会に出席されたのが、句会で作句を共にした最後になった其の後手術を決意されて、鳥取日赤に入院され三月末退院して、自宅療養を続けておられた亡くなられる三日程前、柳友杉谷湖山氏が見舞に行かれた由であるが、其の時は非常に元気で、この分では夏の句会には顔が見られると思ったと後で湖山さんが私に話していたのに、それが柳人との最後の面談になろうとは耕民自信も分からなかった事であろう。柳友間にもめ事が起こった折には、年役とは言え、大変に心配して、和解に奔走して下さった。

耕民さんは長年国鉄鳥取検車区に勤務、円満退職後は川端町一丁目の現在宅で古本屋を開業され、その間養子を迎えられ、老後は、店を若主人にまかせて、川柳を唯一の趣味として、毎月の句会にはかかさず出席されていた。柳歴はずいぶん古く、鳥取川柳——川端柳時代から作句をつづけておられた。

長い太い、そして黒い眉毛は精悍の気が身体中にみなぎっている様に思わせた。後三年で喜寿句会を迎えられると、日満、湖山、若人、たかし、三歩、星影、その他の柳友と共に楽しみにしていたのに実に残念な事である。

安らかに永眠された耕民さんの冥福を心からお祈りするのみである。

（三九、五、十五）

遺句

飲みあきて次はビールに座り込み

洋食を娘がすれば高くつき

妻の死（一句）

身の回りみな亡き妻の香がにじみ

風船が眼かくしになる肩車

一線を引いて友情持ちつゞけ

帰宅して妻と茶漬けの座にすわり

悪友にされたが一番泣いて呉れ

知事賞の札いゝ菊かと思って見

御高説承って逃げてくる

風紋の説明砂をさすって見

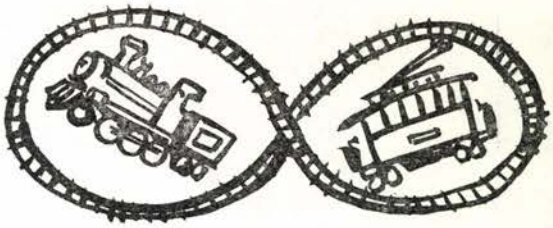
○

追悼吟

しばらくは淋しき句会つゞくらむ

八歩

風流
東野大八著
人間横丁
B6型　二五八頁
価250円
送料70円
★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）
大阪市住吉局区内万代西5丁目25
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(代)6081振替口座大75050



・アンケート・ 旅情は駅弁から

旅は誰の胸にもいろいろの思い出を残します。駅弁もまた旅情をなぐさめられるものの一つ。柳人に駅弁の思い出を伺つて見ました。

（編集局）

・黒磯の鰻めし・

八尾市　西尾　栞

東京上野発九時二〇分の急行青葉号に乗ると、西那須野から二ツ目の駅に黒磯という鉄道地図では白丸一つの駅に十一時五十九分に着く。初めて乗った自分にはこんな駅に急行が停まるのに不思議に思ったが列車が着くと、弁当を買う人が右往左往するのに一驚した。ナントこの駅の弁当の種類の多いのには再び驚いた。鰻弁当となめこ汁を買うて車中に戻る。列車が出てから、やおら、うなぎ弁当にありつこうと思ったが仲々列車が出ない。やっと動き出した列車の窓には那須高原が開けて食べる鰻飯と、すするなめこ汁の味は大阪を遙かに来つるものかなという旅情をしみじみと味わったものだ。それから後、知人友人が東北へ出かけるときくと、この駅で必ず時刻にかかわらず弁当を買うことをすすめている。因みにこの駅の弁当の種類を列挙してみると、九尾ずし、那須野ずし、栗釜めし、釜雑すい、肉釜めし、うなぎ弁当、なめこ汁等々、バラエティーにとんだローカルカラー豊富なもので確かに旅人の旅愁を慰めるものである。

見送りは旨い駅弁の駅を教へとき

・横川の釜めし・

下関市　国弘半休

三年前に上州草津へ社用で行き、軽井沢から高崎に回って東京へ出たことがあるが、その途中横川駅萩野屋さんが造って売ってる「峠の釜めし」という陶器の釜に詰めた駅弁を買って食ったことがある。中味は五目飯程度のものと記憶しているが汁気もたっぷりとあって折弁の短所を十分補っていてちょっと美味しく食べた。ここではこの外に「おたのしみ弁当」という折弁も売っていて私は何れにしようかと迷った程だった。

北国を旅行するとホームで「そば」や「うどん」の立ち食いをする人を見受けるが、ローカル線のこうした食事もちょっと「乙」なものである。駅弁の味は全国何れを訪ねても五十歩百歩であるが中味はともかくとして容器の形状、商標、名称等に出ている地方色ではあるまいか？

駅弁は名所古蹟を着せて売り

・新潟の弁当・

鳥取市　河村日満

鳥取のカニずしに似て、長万部の毛ガニずしもいい想い出の駅弁でしたし、浜松のうなぎ弁当も忘れられない味ですが、私はどちらかというと、駅弁で一杯というのが大好きだから、ついすし類よりも普通の駅弁を買う機会が多い。しかし今の駅弁はいつとはなしに五割値上げという大事業を成し遂げた割に、味の方は逆に落ちた、と私の舌は感じとっています。

だが最近新潟で買った駅弁は、東海道線では味わえぬものがあって、久しぶりに車中で飲み過ごしました。

駅弁へ清酒うれしく買い足され

・素焼の丼・

愛媛県　渡辺暁童

阿蘇から戻って一ヵ月、変った顔ぶれとならとまた阿蘇へ三度目を明日にひかえて、いよいよ出発の旅ごしらえの最中へ駅弁のアンケート。「週遊券ここは見るより食うところ」の句主だけに食にかけては至極けんたん。行く先き先きの駅弁には大ていは敬意を表しています。でもそれより駅売りのうどん、そばに味覚といいますか、魅力といいますか、たまらないのです。まったく手当り次第北陸、山陰、九州、四国、山陽線は糸崎駅のまで頂戴、その上その素焼のどんぶり鉢が何よりのみやげです。ずっしり重い素焼の鉢はいつまでも残る旅の記念。ふたつきの鉢などもらい手が多くて困ります。

駅弁のふたをあけると海が見え

・方言を聞きながら・

岡山県　大森娯句樂

袖振り会うも他生の縁とは、古くから聞き慣らされた言葉ですが、汽車の中で、むっつりぎんこう張ったのでは興が無い。隣り座席の人に、何時となく窓外の風景にも見飽きた頃を見計って、「失礼ですが何方までですか」位いから話しかけると、窓外面白い人に出会う「方言」を丸出しにお互いに徒然の心を許し合い話し合うと生れ在所から家庭のことまで、さては職業の好不調のことまで、何時か組立駅ホームのラッシューの窓外に立売りの売り声「**旅は道連れ駅弁の世話もやき**」と、なるのが私の汽車旅行の時の常です。

・佐賀のムツゴロ・

諫早市　川岡霊眼子

背中楯にして駅弁秘と食い

私は諫早市に住んでいるが故郷は米どころ佐賀である。旅をすると慕情も手伝って大抵佐賀駅弁を買う。佐賀有明湾特産のムツゴロという天皇、皇后がその美味にお喜びになったという魚がかば焼煮付されて、はいっているし第一、米がうまい。

料理上手な妻も駅弁ほめて食う

である。鳥栖という駅では土の素焼のドンブリ、ウドンも冬は温かく夏は冷たいのを、もう長く売っているし、この鳥栖駅と私の居る諫早駅では鰻ドンブリも売っていて好評である。近く柳川ウナギの産地のある所故でもある。

急行の着く駅には殆ど駅弁のホームの立ち売りがある。一度東京に行く時静岡駅の弁当はうまいと聞いていたので買って食ったが、お腹が空いていなかったのか美味しくなかった。同じ駅で買えば手馴れたもの量と品種がよく手際たくみに等分に仕分けされて入れてあるのが感心な程である。

・宮崎の椎茸めしなど・

大阪市　水谷竹荘

九州では宮崎駅の椎茸めし、中国では広島駅のかきめし、東海道では沼津の鯛めし、北陸で富山の鱒のすし、山陰では鳥取のかに寿し、紀州では東和歌山駅の小鯛雀すしがうまかった。名物を使用してないが信州松本駅の弁当はうまい。近頃では鳥取のかに寿しなどデパートで売っているが、やはり駅弁のうまさというものは、その土地へ行って味はわなければうまくはない。駅弁程ふるさとの味を思い出させてくれるたべものはあるまいと思う。

新婚の旅駅弁がひざにゆれ

●スリル？のそば●

高槻市　**福田丁路**

結婚して数年後、妻と雪深い金沢兼六公園、栗津温泉、妙高温泉善光寺、諏訪湖を回って東京に出た旅の事である。

それは何処の駅であったか忘れたが、山峡の雪に埋れたプラットホームに立ち昇る湯気を目ざして停車を待たずに飛び出し、発車時刻を気にしながら、熱い名物の「そば」をかき込んだ、そのスリル？　の味が、いまだに忘れられない。

丁度その日、かの二・二六事件が発生して、東京行も中止した事もあり、特に印象に残っている。

駅弁といえば折詰のものが常識であるが、こうしたものも駅弁と見て良いのではなかろうか。

駅弁の味まで車掌尋ねられ

●大館の鶏めし●

青森県　**木村涼人**

普段昼飯抜きなので朝晩は宿で、昼は四合壜の一本も買って旅を楽しむのがつね。たまに早い夜行で発つたとしても停車五分間にすする「そば」の立ち食がなんとも言えない。ただ昨年奥羽線大館駅で買った「鶏めし」は美味かったが自宅から近いせいか旅情は余り沸かなかった。

旅愁ひしひし弁当売りの声の癖

●出雲のそば●

出雲市　**尼綠之助**

駅弁と言えばおそばがピンと来た

三十数年前の事、出雲市駅で僅かな停車時間、水谷八重子一行が名物出雲そばの立ち食い、という光景を目にした。相当離れていたのでハッキリわからなかったが、随分お気に召した容子だった。

これも二十年も以前の話、路郎先生が大阪の某紙に「名物にうまいものあり」で出雲の献上そばを取り上げられた。何れも我が意を得たりの快心事である。僕は大のそば好き、子供達に遺言めいた日常言、僕が来たら「そば」さえあればこれ以上のご馳走はないと。それほどの好物である。

今でもそばさえあれば時間を問わず飛びつく。ただし出雲そばに限るのである。

●鳥取の蟹ずし●

松江市　**小林孤呂二**

あまり出かけることのない私へ「旅行でおいしかった駅弁の思い出」とは、殊更むつかしいご注文でありますけれど、それでも一年のうち公務で国鉄を利用する機会もあり駅弁のお世話になりますが不慣れな出張でありますから、駅弁を求めるにもいろいろと心をつかいます。ましてや味のよしあしで駅弁を求めるだけの通でもありませんが、たまたま鳥取駅でたくさんのお客が買うのにつられて買い求めた「蟹寿し」を持ち帰ってありきたりの土産物よりこれが旨いと妻や子に大変喜ばれ得意万面それからつとめて駅弁の味についても懸命な私です。

約束の駅弁わすれずホームに出

●駅弁の話●

兵庫県　**戸倉普天**

駅弁は明治十八年（一八八五）、東北本線宇都宮駅で、竹の皮に包んだ握り飯（菰物付）を金五銭で売り出したに始まり、明治二十二年（一八八九）山陽鉄道姫路駅で、折箱に鯛・蒲鉾・だて巻・きんとん・うど・ゆり・奈良漬・鶏肉等を詰合せて売り出したのが、折詰駅弁の初めと伝へられる。

現在全国五、〇〇六駅の内参百九駅で駅弁が売り出されており、幕の内弁当・ジンギスカン弁当・鯉弁当・鳥飯・笹寿司・鯛飯・鰻丼等の特種弁当だけでも八拾六種類からあると言われている。

筆者は大正十一年（一九二二）以来駅弁のレッテルを蒐集しており、今日その数参百枚以上に達しているのである。

当初、並弁当弐拾銭（折箱一ツ）、上等弁当（折箱二ツ重ね）四拾銭であったのが大正十一年秋（一九二二秋）全国一斉に上等参拾五銭に値下げさせられたので、駅弁業者は、各その所属鉄道局管下で組合を設け、駅弁レッテルの図案意匠を統一して共同印刷に附した事もある。以来暫く駅弁レッテルが同一鉄道局管内一様の図案となって蒐集家を失望させたのであったが、間もなくこの統制は廃止されたのであった。

大正十一年（一九二二）四月、英国皇太子殿下（プリンスオブクエールス）来朝を記念して、東海道線各駅では同じ図案の駅弁レッテルを作って、和英両文の奉迎文を印刷してある等興味深いものもあるが、昭和十六年（一九四一）の（停）並弁参拾銭、同十八年（一九四三）の（公）並弁四拾銭の頃には、そのレッテルも名刺型の一色刷りとなり、甚だしいのは、お祖末な名刺型のザラ紙に、ゴム印で「御弁当（公）四拾銭」の文字だけを押捺したものもあって、戦時の物資不足が思い出されるものもある。

昭和二十六年（一九五一）特許米特製弁当五拾円、同二十七年（一九五二）人造米鯛めし七拾円、同二十八年（一九五三）富山県産業外米おにぎり弁当百円（静岡駅）、外食券引換駅弁百円等があって、この頃にはそのレッテルも四色刷り、五色刷り等新しく優雅な意匠になって来るのであった。

昭和三十二年（一九五七）名古屋駅で、初めて上弁百五拾円が売り出されたが、今は普通駅弁百五拾円、鰻飯（丼鉢付）弐百円が通り相場となっておるのである。

駅弁の値上りもさる事ながら、今はそのレッテルの意匠、図案が著しく進歩向上しておるのみならず、その印刷に於ても七色刷り、八色刷り等の豪華版もあって一入旅客の味覚をそそらせるものがあるのは楽しい事である。

駅弁の最もうまかったのは、大正末期頃の静岡駅、東海軒の鯛飯（参拾銭）と、東北線小山駅本沢屋の鰻丼（六拾銭）であったと思う。前者は静岡県産の精選米に興津真鯛（ダイ）の上等鯛デンブを用い、その蒸し加減に、伝統の技巧が加へられておったのであり、後者は栃木県思川（オモイガワ）産の天然鰻の堅焼（カタヤキ）であってその醤油加減が特に上手に出来ておったのみならず、その大きな丼鉢が風雅で茶人好みであったから家づとに持ち帰ったものであった。筆者も今以てこの丼鉢を愛用しているのである。

現在の駅弁も、それぞれローカルカラーが偲ばれて、その味も余程良くなっておるのであるが、何分にも業務用の配給米を使っておるのであるから、往時の様な精選米の味には及ばないであろう。加之一斉に電気釜などで短時間に、大量を煮るのであるから、独特の米の味なぞ到底出し得ないであろう又、その売物にしても、米国産の冷凍鶏肉（ブロイラー）や、安物の蒲鉾にも及ばない様なプレスハム等を使った料理では到底うまいものが出来ないのであろうと思うのである。

入門講座

研究題「素足」

清水白柳

今回の研究題素足は少し難かしかったようである。素足というのは何も穿かない足のことなのだがはだしとは違うのであって、はだしは何も穿かないで地面に接する足のことで素足とは足袋も靴下もはかないが外へ出る時は下駄か草履をはいている場合のことだと思っているのだが、集句の大半は、はだしの句であった、例えば

ふるさとは素足ひたした川があり　B

岩清水になりたや女の足洗う　M

というのがあったが、どちらも素足とは言えないと思う、

ふき込んだ廊下へ素足の跡をつけ　S

雨の日の猫は素足を叱られる　S

雑巾をつきつけ泥鰌取りママ叱る　R

これも素足とは言えない。こんなところに課題吟のむつかしさがあるようである。まだある。

素足でもマラソン世界一となり　M

飛入りの素足も走る運動会　S

トレパンの素足あふれる健康美　K

初めの二句はハッキリとはだしだが三句目は素足といえるかも知れないが句意が平淡である。

浜の砂素足にあつい浜の家　S

童心に還る素足が波を踏む　Y

夏の海あれは恋している素足　酔夢

くつろぎの素足白良の砂を踏む　Y

下駄のまま白浜の砂洗う足　八九寸

最初の二句ははだしの句である三句目の夏の海の句は素足といえるが少し苦しい、併しいいものを持っていると思う。くつろぎの句は砂を踏むというだけで情緒がない、その点下駄のままの句にはその浜辺の雰囲気が出ていると思う。

半狂乱素足の女蝶を追う　S

お夏狂乱を詠んだのではないかと思ったが苦しそうだったら、半狂乱をお夏狂乱とした方がいいように思う。併しその時のお夏が素足で草履をはいているのか、足袋はだしなのか私は知らない。そんなことはどうでもいい雰囲気が出て居ればそれでいいと言われればそれまでのことだが、どうであろうか。シームレスの句が沢山あったが、

筋もなく素足と見たら穿いていた　弘朗

がよかった、これに代表されていると思う。

靴下を脱いでやれやれ旅帰り　K

は素足を読みこまないで素足になるところを詠んだのだが着想が弱いようである。

桐下駄を素足で履いた脂足　勝子

正桐に素足が一寸遠慮をし　寿美司

石畳素足杉下駄花さげた　八九寸

桐下駄の句はいい処を見つけたのだが描写が平淡になってしまったのが惜しい、油足は脂足ではないかと思う。正桐も柾桐とするのが正しいのではないかと思う、句意は面白いが推こうする余地があるようである。石畳の句は道具が揃いすぎたように感じられる程である。

夕暮れの素足が匂う宿の下駄　真奇

ひんやりと素足で走る宿の下駄　寿美司

温泉の灯り素足へ猟奇の下駄をかり　章雅

丹仙を着れば冷たくない素足　静水

風呂場まで庭の素足を運ぶ膝　和三郎

猟奇の下駄の句はもっとなだらかな句調にしてほしかった。丹仙は普通丹前と書いているのだがどちらが本当なのか知らない。

瓜核の和服素足のままパチリ　繁太郎

深水画素足女があるきそう　みさ子

歌麿の描く素足に似て名妓　酔夢

三句共平淡な描写に終っている目にふれたことそのままなのがいけなのである。

サンダルに一寸そこまで出る素足　弘朗

庭のかげうなずき合うて素足なり　隆史

サンダルは軽いスケッチの句だが庭のかげの句にはほのかなロマンを感じさせられて佳いと思った

濃化粧足のよごれがいやしくし　千夏

或る種の女に対しての風刺なの

だが作者の思っている程感じが現われていないのは「いやしくし」と作者が思っていることをそのまま現わしたからである。これを〃足のよごれに気がつかず〃としたらどうかと思う。

心から仏の御足頂礼す　句楽坊

老大師佗鉢だけは素足にて　句楽坊

前の句は説明になってしまったそれは心からという上五文字が失敗だからである。心から頂礼するに違いないのだがその心からを別の句語によって現わさねばいけないと思う。老大師の句は佳句として推せん出来る句である。

退院の日には素足の娘がまぶし　滋雀

立派な句であると思う。娘がまぶしとはいい表現である。

入道雲にも素足を見せず君病みぬ　正直

この作品には敬服してしまった深い句意と、課題の素足を生かしこの手腕には驚かされたのである、同じ作者の

火を歩く執念ただおのれのみの生命　正直

この句は行者の火渡りの術をかりて何かを訴えようとしていると考えたのだが共感を持てなかった。それは〃ただおのれのみの生命〃という句語にあるのではないかと思った。そこにこの句語に対して作者と私との句に対する感度の違いを知らされたのである。

青だたみ味は素足が知っており　万竿

旅帰り素足に畳の目を感じ　弘村

どちらも苦しい句である。素足の題にこだわりすぎた感じである。

はちきれるような素足であぐらの娘　杏花

爛熟の女素足にある自信　静水

あぐらの娘の句には清潔な目を感じさせられてたのしい句柄である。自信のある女の句は達者な表現ではあるが常套的になり易い危険があると思う。

あかぎれの素足を妻はいたわりて　松風

真実味のあるのがいい。この気持ちを押し進めて深いものを詠むようにしてほしいと思う。

お人柄素足を見せぬ老婦人　H

句意はわかるのだがお人柄を説明しなくとも素足を見せぬでよくわかるのだからもっと考えるべきだったと思う。

娘もう素足で歩かぬ年となり　宗義

この境地にいつまでも止まっていてはいけない、一歩も二歩も進んでもっと大胆な句を見せてほしいと願うものである。

たしなみを素足に見せてくるわそだち　千夏

くるわそだちという言葉は生きていないと思う、くるわそだちを表面に出さなくても〃いい女〃でもよいし〃いい年増〃でもよいのではないかと思った。

嫌な人と素足をほめて叱られる　章雅

軽い句柄なのだが、ほのかなユーモアがあっていい。

火事終り素足へ寒さじんとしみ　S

〃火事消えて素足であったのに気付き〃としてみたが作意は変らないと思う。

東京で素足の記録破る汗　T

マラソンの記録のことなのかと思うが作者だけが分っているのでは句としては失敗だといえる。

夜の素足細い革緒が締まりすぎ　白柳

○

次回研究題「泡」五句以内

〆切　七月三十日

発表　九月号の予定

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四　清水白柳

路郎先生の喜壽・金婚の祝賀について

——お知らせとお願い——

日本柳壇の巨匠であり、我等の恩師である麻生路郎先生の喜寿・金婚祝賀行事については本会が主体となって昨秋以来慎重な企をととのえ、全川柳人ご賛同の下に一大盛典を挙行する運びになっておりましたところ本春に至り路郎師から

諸君のご厚意は衷心から感謝するが、目下自分の健康状態では到底そのご厚意にお応えすることがむずかしいと思うからお断りしたい。

と固辞されましたので、本会ではその前後策につき数回役員会を開催いたしまして、先生のお身体に障りのない範囲で、同時に先生のお気持ちに添うた我々の祝意をうけて頂く行事として左記企画のご揮毫についてご諒承を頂きました次第でございます。

ご承知の通り先生はご高齢のことでもあり、願わないことではありますが、これが最後のご揮毫となるやを思う時、我等川柳人として愛蔵すべき家宝を得る、得難きチャンスではないかと存じますので、何卒この機を遁さずご参加お申し込みの程お願い申しあげます。

昭和三十九年六月吉日

川柳不朽洞会 常任理事

北川　春巣
松江　梅里
川村　好郎
土井　文蝶
西尾　栞
若本多久志

麻生路郎先生の作品頒布

作品——一、軸・横額二、色紙三、短冊

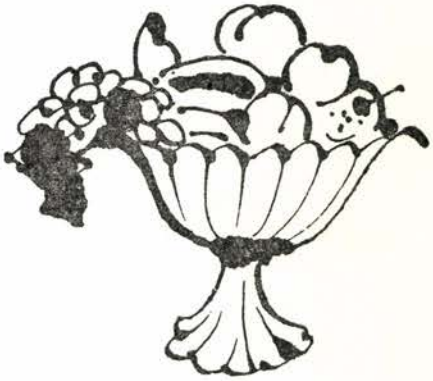
揮毫料——不要とし、お申し込み参加者より、喜寿・金婚お祝金を右相当額拠出して頂きます。この額につきましては常任委員会に於て各標準を定めてありますので、お申し込み受付と同時に詳細な規定をお知らせいたします。

頒布期間——先生のご健康状態も考えまして、お申込順に六カ月以内とし、昭和四十年三月迄とします。

申込所　大阪市住吉区万代西五丁目二五　**川柳不朽洞会**　電話大阪六七一局六〇八一

一路集

選者
浜田久米雄
真鍋一瓢
山川阿茶



燈明

浜田久米雄選

燈明が答えるようにゆらいでる　辰始
燈明の豆電球が気に入らず　鶴丸
消えようとする燈明に願をかけ　判志
燈明へ故人の写真笑いかけ　勝子
燈明へ貧しきうちの仏様　宗太郎
合格のあと先きだけのお燈明　滋雀
喜んでくれるか燈明太くゆれ　真奇
燈明へ真心こめる歳となりろ亭
燈明が尊師の喝にぐっと揺れ　代仕男
燈明の役は高血圧の父　淀月
燈明をあげてと妻に座らされ　静水
燈明がつけば神様いるみたい　可住
合格を祈る燈明派手にあげ　たけお
神の灯ぞ心して吹け樹の騒ぐ　和三郎
燈明は消しとと故人はケチだった　春己
ご先祖へ感謝する日の灯をともし　進之助

燈明のゆらぎ決心またにぶり　晃男
お燈明ろうそくだけの有難さ　保夫
燈明のゆらめきに似た人生か　川太郎
燈明ゆらゆら願いが叶う心地する　有三
燈明に親分仁義に生きる腹　胡人
弓なりの腰燈明に向いて伸び　千翁
お燈明派手に出漁の茶碗酒　八九寸
おやすみなさいと燈明そっと消し　恵二朗
みあかしのゆらぎにも似てわが心　野迷路
二度三度当たらぬくじへお燈明　光郎
お燈明忘れて派手に未亡人　李鳥
お唱えは知らず燈明だけをあげ　木魚
水晶の珠数燈明がきらきらと　隆史
一燈を無理して貧者名を残し　万竿
燈明がゆらゆら神示ありそうな　愛鳩
勲章賞供えても燈明動かない　映輝
燈明へきょうは嬉しい灯をともす　花美
ともし火のもと四海波静かなり　半月
なりわいはお燈明まで事を欠き　桂仙
初七日を過ぎて燈明まだ消えず　一征

燈明のゆらめき不倫なじるよう　圭大
手うちわで燈明二度の勧めさせ　新雪
燈明も絶え石垣も落ちたまま　不二
燈明を上げて試験の子を頼み　隆子
子の叙勲告げる仏間の灯が揺れる　旭峯
燈明の四十九日ももう昨日　章雅
婆さんの燈明後から消してゆき　古心
燈明を見つめて無我の境になり　雄声
燈明を数えて弥宜の心足る　十九平
燈明を離れて欲がもう動き　圭水
燈明を尼僧はゆらりゆらりつけ　春子
事故現場あわれ燈明ゆれやまず　恵二朗

佳作

一言言うてと燈明へよよと泣き　雄声
燈明が壁に写した欲の影　どんたく
燈明へ寡婦はばからず独り言　千翁
御神燈寄付者の名前照し出し　藤波
燈明を消せばさみしさまたつのり　雄々

人

燈明を消して叱言へ向き直り　宗義

地

燈明は凡聖一つに照らすなり　松風

天

一燈の中の大師を拝むなり　初甫

癖

真鍋一瓢選

梯子酒此処が止めやと縄のれん　辰始
悪い癖みんななおってご臨終　鶴丸
酒癖が寝た子を起こしては泣かせ　勝子
癖のない文字で友から無心状　有三
癖がついて不運な勇み足　宗太郎

酒癖の悪い夫とくされ縁　歌子
亡くなってからが愛しい妻の癖　代仕男
変な癖出しなさんなとひねられる　静水
悪い癖ばかりが目立つ倦怠期　雄々
呑めば又いつもの癖が出る梯子　繁太郎
出しゃ張りは音痴の癖によく歌い　松風
よろしいと初手にはいえぬ左派の癖　可住
何事も安受け合いの癖がありたけお
見れば欲しくなる癖骨董屋の如く住み　光道
退職金貰ったらという癖がつき　春己
善人の自認食べたら眼る癖　進之助
両方の癖を備えて可愛いい子　千翁
また一つあの娘の癖を知った宵　太郎
浪費癖たしなめた上母はくれ　胡人
安全帽脱ぐと鏡と櫛の癖　保夫
悪友にある癖みんな知りつくし　木魚
すぐに泣く女房の癖に負けている　李鳥
職更える癖あり妻も三人目　光郎
癖のある面魂で出世せず　旋風
酔えば出す癖を知ってて子はねだり　桂仙
気にしてた癖毛が今は淡やまれ　同
忘れ癖愛嬌にしてスターなり　花美
癖になると渋って見ても矢張り負け　万竿

柳箋

本誌への投句はなるべく柳箋をお用いください。選者が選句されるのに整理上助かると云っておられます。

一冊（五〇枚綴）三〇円

川柳雑誌社サービス部

七癖の中の一つに女癖（どんたく）　愛鳩
不眠症からの寝酒が癖になり　秀峰
癖でしてね癖でしてねと気にかけず　不二
くせにまで惚れ込んでいた恋だった　杏花
父親のくせそのままへそ曲がり　隆子
母の癖姉に見出す帰省の夜　宗義
新妻の癖を話して座がなごみ　章雅
やりくりに質屋へ曲げる癖がつき　旭峯
味方さえ憎く落ち目のひがみ癖　古心
爺婆がつけたり孫の甘え癖　十九平
師の癖をそのままついだ代稽古　恵二朗
仏前へせめてその癖真似て見る　雄声

佳

五十肩無意識にもむ癖がつき　新雪
ずけずけという癖涙もろい癖　滋雀
早起きの癖新婚に嫌がられ　亭
くせも又魅力に見えている弱味　弥生
その癖が出てなごやかな灯に笑い　晃男
墓場まで続いた酒の悪い癖　藤波
靴までがパパそっくりの癖にちび　恵二朗
ためる癖もってあの世へ行きました　雄声

佳作

気にせんという口癖のやせぽっち　圭太
立呑の癖がまだあるいい課長　淀月
抱き癖をつけて里から児と帰り　和三郎
癖つけてそのまま返しに来た砥石　隆史
さまざまな癖で煙草の封を切り　涼人

人

たまに履く庭下駄にまで足の癖　八九寸

地

ランドセル辻まで送る癖がつき　初甫

天

悪い癖ですわと女つと離れ　春子

座布団

山川阿茶選

色々の座布団がある法事の日　有三
猫ちゃんのお座布は奥様お手づくり　花美
さん俵座布団にして草相撲　杏花
袖切って作った座布団まだ使い　旋鳳
座布団へあぐらもかけず三部経　滋雀
濡れ座布団頭に火事場やっと逃げ　半月
座布団の温み刑事の勘どころ　春己
座布団の光栄すばらしいお尻可住　
座布団と火鉢寒席出来上がり　古心
定年の前の日座布団持ち帰り　雄声
座布団になるも承知と惚れている　太郎
座布団を即席枕にして鼾き　繁太郎
八端の座布団そろえ喜寿祝い　淀月
すでに敷く予約の座布団いい桟敷　光道
進学へ電気座布団貸してやり　宗太郎
座布団の刺繍へ主婦の好み見せ　凡子
居心地のよい座布団の里帰えり　弥生
たのみ事座布団に迄遠慮して　判志
冷え性は小さな座布団持ちあるき　たけを
座布団へ娘坐って膝を出し　松風
座布団も干して嬉しい日が近い　真奇
座布団も女世帯とわかる柄　雄々
座布団も派手お師匠さんは三味を弾き　李鳥
座布団も案外うすい旧家なり　木魚
座布団へ尻餅ついたお茶の席　野迷路
座布団とお茶とお菓子で放っとかれ　初甫
座布団に坐って待つは叱る方　保夫
料亭の座布団汚職も知っている　愛鳩（どんたく）
ハイティーン座布団サット先に敷き　新雪
座布団も運びこせこせ敷れとり　恵二朗
座布団も二つ楽しい旅の宿　不二
ついていぬので座布団を裏返えし　旭峯
招き猫重ね座布団夏も敷き　隆史
座布団にマンボズボンはすぐしびれ　涼人
座布団も敷かずにお世辞いうていに　晃男
座布団に可愛いバンビママの趣味　万竿
座布団のない会場に長時間　歌子
座布団へ正座の僧は威儀正しろ　亭
酔っぱらい客座布団で寝てしまい　勝子
快諾に座布団降りて礼を迷べ　代仕男
定刻に来れば座布団だけが待ち　同
座布団をあやしてお母性もう芽生え　圭太
座布団のかわりを万年床がする　同
末席の方は座布団まで違い　酔夢
座布団の破れに金策切り出さず　同
座布団が喜ぶ程の美人です　圭水
座布団を小脇に誘う選挙好き　章雅
座布団にポマードうたた寝が曝れる　同
座布団をきらう世代の背の高さ　胡人
座布団を投げた試合も無事にすみ　同
座布団をはみ出す見事なヒップなり　句楽坊
花嫁の座布団年忌の僧に出し　句楽坊
招かざる客座布団をさっと占め　春子
座布団が小道具になる隠し芸　同
客に来た子が座布団の上で跳ね　同
座布団がここから違う客の数　和三郎
片言で座布団を負う子守唄　同
村芝居座布団もたせた孫を連れ　十九平
座布団を返えして課長に席をあけ　同
座布団を遠慮ずらせば焦げ畳　光郎
座布団の焦げ穴はぎれの蝶が飛び　同
座布団を積もる話が敷き忘れ　千翁
座布団をすべり碁盤は関ケ原　同
ちょこなんと米寿をのせた絹座布団　恵二朗
借りて来た座布団煙草の火でやかれ　静水
座布団の白板の間のよく光り　同
座布団の上で稼いだあぶく銭　藤波
座布団を素直に敷いたエチケット　同

佳作

座布団を頭に九回俄か雨　八九寸
座布団の紅が燃えてる新世帯　春子
座布団で追われて坐る床柱　初甫
座布団をけって立とうとも親子　春己
座布団になるとはネクタイ知らなんだ　宗義
手枕へ座布団かませてくれる老母　恵二朗
座布団のような亭主になりさがり　同

人

座布団を枕に連休恋もなく　春己

地

座布団の繋ぎ目で飲む鵜飼舟　八九寸

天

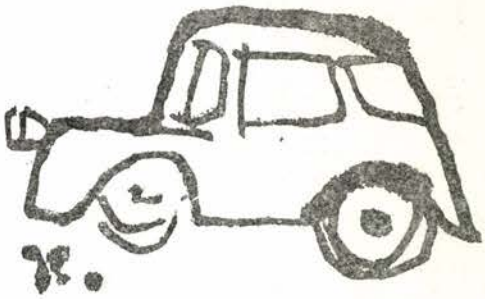
座布団の下から祖母が借してくれ　宗太郎

軸

座布団にきかす小唄の露払い

色紙短冊
書画用品
大阪市北区
丹青堂
電話 ㊐二〇七三

柳界展望



句会

▼本社七月句会は六日（月）午後六時から、千日前電停前自安寺で開催。都心の涼しい会場で作句三味の一刻を持つので柳友お誘い合わせの上多数のご出席をお願いする。▼七面短詩クラブ川柳部句会（和歌山市）は六月三日（水）午後六時から、奥新和歌の浦、魚又楼で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は六月十八日（木）午後六時から難波親和クラブで開催▼コクヨ川柳会（大阪市）六月句会は十九日（金）午後六時からコクヨ株式会社会議室で開催。▼大阪逓信病院川柳会六月句会は二十七日（土）午後二時から同病院北館五階会議室で開催。▼川雑阿倍野・玉造支部合同吟行は六月十四日（日）午前十一時から佐太町来迎寺で開催。▼故食満南北翁を偲ぶ会が六月十四日（日）午後一時から堺市南宗寺で開催された。▼川雑岡山支部五月句会は二十三日岡鉄クラブで開催。▼四国川柳大会（六月七日高知市で開催）は出席者百二十名、投句者五十七名の高知としては最大の盛会であった。▼第十回愛媛川柳研究大会（五月十七日今治市で開催）は出席者七十三名、投句者三十二名の盛会であった。▼高須唖三味を励ます会は六月六日（土）午後五時から東京都新江戸川公園松声閣で開催、六十数名出席の賑やかな句会であった。▼第十回阪神六市連合文芸祭は六月十四日（日）午後一時から芦屋市民館で開催。▼明和研究会（西宮市）甲南川柳教室（神戸市）創立七周年記念・河相すすむ還暦祝賀川柳大会は七月十九日（日）午後一時から西宮市鳴尾公民館で開催。兼題、少女・男・空（そら）・鈴・志・宝・善意、会費百円。出席者に記念品贈呈。▼第二回三陸川柳大会は八月二十三日（日）午前十時から宮古市役所会議室で開催。兼題、みちのく・石・理想・母・燃える心・砂浜▼第八回全国国鉄川柳人連盟大会は昭和三十九年七月四日、五日片山津温泉「湖畔荘」で開催。▼井上剣花坊三十年忌記念紙上句会は、献句一句。（半紙半截に書こくと）雑詠二句一組のもの五組（十句）各組とも別句で一組ごと別紙のこと。表彰は一組毎五位まで記念品、一位に表彰状贈呈。参賀費百五十円。（切手可）〆切七月三十日厳守。宛先は東京都町田局区内鶴間四八四八川柳人編集所。▼昭和三十八年度花童子賞は小樽川柳社同人の新川洋洋氏が受賞された。

どんぐり会春の川柳会（羽曳野市）　—川村好郎師と樋高薫風子氏を迎えて—

消息

▼若本多久志氏（西宮市）は五月三十日久しぶりに金沢へ。青葉の兼六園から山頂の秋声の碑を訪ね鏡花・秋声・犀生等が生まれ育った所以のものが街のすみずみに窺えるのをなつかしまれた。「いらかにも百万石がしのばれて」▼北川春巣氏（大阪市）は富岡淡舟氏らと五月二十四日浜田久米雄帰郷歓迎備前支部句会出席、久米雄・東岸両氏と同道、大森嬢句楽居を訪問、路郎先生の第四句碑と対面された。▼高鷲亜鈍氏（尾道市）から寄せられた衒気の弁、「ロングフェローをもじった長野笛郎なる匿名が衒気なしでは命名されるものではない。又、笛郎の柳誌展望は印象批評の域を出ていないが衒気ふんぷんたるものがある。昭和初期の『詩と詩論』は編者春山行夫の衒気で、日本の詩概念は変革された。世界知識を蒐めた「セルパン」もしかりである。われわれは文学者でも科学者でもない。広く知識を外に求め大いに衒気たっぷりな現代川柳観を持とう。」▼戸倉普天氏（兵庫県）は喜寿を迎えられたが、この程八カ年を費して編纂された郷土誌「沼貫村誌」の脱稿を見、休養に五月八日九日の両日、赤目四十八滝、榊原温泉へ、五月二十四日からは仙台蔵王温泉、エコーラインを廻遊された。▼阿部佐保蘭氏（東京都）から、路郎先生の喜寿金婚を心からおよろこび申し上げます。相より相たすけて川柳の道にいそしまれ、多くの名作を残された点、与謝野

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

鉄幹ご夫妻を思い出させます。「妻を語る」に小生撮影の葭乃先生の写真をのせて戴き光栄です。昨春お伺いしたあの楽しかった一夜を思い浮かべます。▼市場没食子氏（大阪市）は六月九日から十四日まで、蔵王山、羽黒山、蓼科高原方面を廻遊、山形、福島、宮城諸県へは初めてなので心ゆくまで旅を楽しまれたと。「エコーライン中途で雨や風になり」▼佐野卜占氏（八代市）は四月末単車から転落、鎖骨を折り、肩骨にひびが入り、左腕打撲で半月ばかりは字も書けぬ状態であったが、六月中旬にはギプスもとれ快方に向かってる由。▼田垣方大氏（倉敷市）から、先日久米雄さんの退職記念句会に出席して、路郎先生の力強い激励の電文を拝聴し感激しました。久米雄さんも一瞬目をしばたいて居られました。六月六日社内のレクレーションで京都を馳足で見学、清水寺、竜安寺、苔寺比叡山の展望台に立ち、年令によって京都の感じ方が違うのに我ながら驚きました。▼直原九面山氏（岡山県）は五月十七日第十回愛媛川柳研究会に出席、「いのちある句を創るには」と題して有益な講演をされ、「秀句選別器」を公開して、散会後、月原皆明氏らと歓談された。▼若柳湖花氏（高槻市）は日舞の師匠として多忙の日を送っておられるが、テラスに四季の草花を咲かせることが趣味になり、朝のひととき四十五の鉢に水をやるのを楽しみにしておりますと。▼河相すすむ氏（西宮市）は五月二十七日から松本市に滞在、学会の余暇に石曽根民郎氏を訪問、楽しく時間を過ごされた。浅間温泉から上高地を回り、黒部ダム見学の後帰神された。「信濃路を旅情のつきぬまま三日」又、六月六日高知へ出発、七日の四国川柳大会に出席後、名所を探勝された。▼須藤俊江さん（高知市）は六月七日の四国川柳大会に川竹松風さんに誘われて出席、出席者百二十名、投句五十七名の高知としては最大の会に驚かれ、課題吟に弱いと痛感された由。▼清水白柳氏（大阪府）は六月八日本社句会から小松市へ。墓参をしてすぐ帰阪するというあわただしい旅をされた。「ジェット機の音に墓石ゆれそうな」▼川岡霊眼子氏（諫早市）は本業の千里眼の他に、諫早駅前に料亭式の酒場を建築中であると。路郎先生の「妻を語る」に寄せて、「嬉しさは語れる妻を持ち合わせ」の句信があった。▼八木摩天郎氏（堺市）は六月二日神戸から舟で瀬戸内海にし島へ、後姫路城を見物して楽しい一日を過ごされた。「にし島へ汗を落しにくるもよし」▼本多柳志氏（大阪市）は五月十九日から夫人同伴で旧婚旅行を計画、東海道から信越北陸路を回遊、旅に出て川柳を作るよろこびを満喫された。「スケジュール婦唱夫随で又変わり」

酒清
金露
灘・魚崎
金露酒造株式会社醸

▲濱辺晩童氏（愛媛県）は五月十八日から教育委員の研修旅行で阿蘇、熊本、鹿児島、青島、別府、巡遊、快適な旅を続けられた。▼藤村〆女さん（大阪市）は六月五日優績社員大会入賞により出雲路へ。玉造温泉、松江城、小泉八雲旧邸、出雲大社と慰安の旅を楽しまれた。「祝辞より早く食べたい顔ばかり」▼永松道雄氏（八代市）は年七十に達し、全部の小さい公職からも四月限りで手をひき、静養を専一に心掛けているので「川柳雑誌」を唯一の友としていますと。▼橘高薫風子（大阪市）は六月六日「啞三味を激励する会」に出席のため上京、三太郎・扇魚・鞍馬・佐保蘭諸氏に懐旧を叙し、山村祐・松井清志両氏と歓談、会終了後、武蔵庵（啞三味居）で迷亭・茶六・星文洞諸氏に大いに歓待された。

慶

▼西いわを氏（大阪府）の二女啓子さんは中松巌氏夫妻の媒介で、グリコ（株）勤務の神原績氏と婚約整い、五月二十五日華燭の典を挙げられた。およろこび申し上げる

電話開通

▼藤村〆女さん（大阪市）の自宅に電話が開通した。大阪（六九八）八一九〇番。

住所変更

▼軽部武氏（仙台市）は仙台市片平丁大町頭一へ転居。

正　誤

▼本誌五月号三十五頁上段三行目「うたた寝へ」の句、和郎とあるは和三郎の誤りに付訂正。（薫）

不朽洞の人々

霊眼視の川岡光雄氏

長生きはもう嫌などと贅沢な

（霊眼子）

詩人は早逝が多い、だが川柳人には長寿が多いと思う。川柳は精神統一を「ナリワイ」とする私の時折の良薬だ。霊感許りの遠隔透視と予言を世にひろめ、霊眼視という職名を残して死にたいと思ったが、何時からか他人様が千里眼さんと呼称する様になったので自分も何時しか、それに馴れ、そうした呼ばれ方に甘じている。

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 六月句会（大阪市）

6月8日　午後6時
会場――　千日前 自安寺

法善寺横丁に名高い、千日前の水掛け不動尊にほど近きところ、自安寺の門をくぐると、釣り下げられた法灯の盤は、我々川柳家を迎えて呉れるよう。句筐を手にいそしむひとときも、一瞬にして、法盤も、会場の蛍光盤も消えて、暫らく沈思黙想、久々の停電である。思わぬ停電に、戦時の苦難を偲び、電灯がパットつくと電化ブームの今の有難さ、時代の格差を思わす飛んだ句会風景で、人々の顔が一層明るく見えた。今日の白柳氏の句評は、本誌五月号課題吟や、各地柳壇から取り上げての懇切な指導句評、いつも乍ら人を肯かせる句評振り、後ち席、兼題の披講を聞く楽しさ、川柳家ならではである。本月の不朽洞杯は新鋭、城一舟氏の「黒髪」の句に輝いた。時に九時半（摩）

出席者――路郎、摩天郎、いさむ、白溪子、たつみ、野菜、圭水、八郎、すみれ、清人、滋雀、玲人、青米、庸佑、珠笑、一舟、文秋、トメ子、市郎、句楽坊、有子、吉太郎、柳太、花梢、進之助、圭井堂、静馬、白柳、金三、多久志、四郎、仲字呂、舟遊、柳宏子、柳志、薫風子、一栄、清子、みさ子、阿茶、美房、林松、〆女、孝夫、季賛、葭乃、宏子、

兼題「ぼろ口」　麻生路郎選

ぼろ口がいつの間にやら襤褸を吐く　野迷路
ぼろ口で危い橋も目につかず　半月
ぼろ口に金の有るのはうなずかず　宗義
うわずった声でぼろ口きき返えし　同
専務から息のかかったぼろい口　三時
ぼろ口は声を落として話し出し　黙平
ぼろ口のつもりの無尽夜逃げされ　どんだく
ぼろ口を嗅げば蟻よりおとる群　章雅
ぼろ口のその口に乗って離婚沙汰　吉蔵
ぼろ口のケタ違うてた指二本　八九寸
ぼろ口に名工耳を傾けず　玲人
ぼろ口へ肩書だけで稼いで居　花梢
ぼろ口と聞いて電話の声変り　〆女
ぼろ口がニヒルなこころ焚きつける　舟遊
ぼろを追うて今だに路地住まい　市郎
相談に来たぼろ口は高が知れ　柳志
ぼろ口を聞きサクリーマンいやになり　トメ子
ぼろ口が筆談となり酒が冷え　柳太
ぼろ口を妻が一番案じてた　舟遊
頭かきかきあまり話がうまずきた　青米
清貧に甘んじぼろ口へ振り向かず　金三
ぼろ口は最初に小金儲けさせ　静馬
ぼろ口を追うてて家も土地も売り　文秋
よつぼどのぼろ口キャッシュで取引きし　珠笑
ぼろ口と信じ社長も下座に来　圭水
ぼろ口を望まぬ妻でつつがなし　一栄
ぼろ口に三国人が介在し　野菜
ぼろ口といえど妻を信用せず　一舟
ぼろ口へ乗ったが運のつきとなり　すみれ
ひつぞりはしてても影でぼろもうけ　みさ子
手配師のぼろ口に乗り地獄べや　句楽坊
ぼろ口の誘いに老舗逆らわず　珠笑
ぼろそうな話やっぱりもとがいり　阿茶
ぼろ口の元手女房のものも曲げ　多久志
ぼろ口へ退職金が消えていき　静馬
ぼろ口の元手血を売る外になく　多久志
学がありすぎてぼろ口又にがし　柳志

兼題「黒髪」　橘高薫風子選

ゴンドラを漕ぐ髪黒しベニスの陽　章雅
黒髪を茶に染めたのにまた振られ　珠笑
黒髪のない幽霊でもの足らず　柳太
黒髪をそって尼僧は若々し　半月
頭髪の黒と赤とが恋競い　吉太郎
黒髪の乙女の頃の恋がなし　すみれ
黒髪を唄う名妓もパーマなり　吉太郎
むぞうさに黒髪束ね土に生き　一舟
還暦に髪黒々と夢多し　圭井堂
黒髪がきれいで前へ回ってみ　あいき
黒髪をたばねて働き者の妻　舟遊
清潔な黒髪紺と白づくめ　阿茶
黒髪をなびかせ岩に座す人魚　いさむ
黒髪誇り男三十和服着る　光道
漆黒のおすべらかしに住き日晴れ　八九寸
鬼刑事指名てはいの黒い髪　三時
黒髪のひとすじ画伯の気がこもり　静馬
黒髪を昭和生まれはもてあまし　圭水
黒髪の長き少女にある聖書　舟遊
社会への抵抗黒髪赤く染め　南宗
黒髪は染めても目玉だけは無理　美房
黒髪の良さを外人だけがいい　珠笑
黒髪はないが色香はまだ残り　柳志
黒髪が赤毛になって娘が戻り　あいき
黒髪が取柄でもろうた妻なのに　同
黒髪も煩悩もたち嵯峨に住む　すみれ
せち辛い暮らしに耐える髪を染め　進之助
黒髪をパサリと落とす美容院　トメ子
整形の顔へ黒髪赤くする　たつみ
黒髪は三ツ編妻は肺を病み　いさむ
黒髪を洗う姿はまだ女　一舟
ほどかれたその黒髪に巻かれたし　薫風子

兼題「早合点」　若本多久志選

早合点シドロもどろの電話かけ　三時
早合点水でも呑めと落ち付かせ　章雅
暖冬へ早合点した桜咲く　どんだく
早合点仲裁したのがなぐられる　半月
妹のと分かって仲人うろたへる　宗義
早合点して姑く妻を持て余し　一舟
帰るなり妻をなぐった早合点　圭水
しまいまで聞かずふくれて席を立ち　清子
駈けつけりゃ事故の本人出迎へる　野菜
早合点泰然自若と聞き違え　青米
異性からの電話をママの早合点　圭井堂
早合点あとで一人で苦笑する　いさむ
早合点母はつわりと信じきり　清子
早合点公益社にも電話かけ　八郎
呑みこみがよいと思うた早合点　白柳
娘と泊まる宿の女中の早合点　あいき
早合点して年甲斐が記びる破目　進之助
早合点大事なとこは聞いとらず　摩天郎
自惚れが断わられたと気がつかず　柳宏子
立話すれば恋かと第三者　進之助
早合点判こをついてからあわて　たつみ
親戚をみんな呼んだら持ち直し　柳志
返事せぬ内に結納決めに来る　珠笑
断わりに来たのにサービスこれっとめ　阿茶
早合点預り物に礼をいい　吉太郎
早合点としより耳のせいにする　静馬
終いまで聞かず任しとけ任しとけ　一栄
お見外れをしました社長作業服　市郎
窓閉めに立った女へ早合点　玲人
早合点勝手にしといておこらはり　静馬
早合点一一〇番に叱られる　柳志
早合点違う産婆を乗せて来る　柳太
早合点隣りで悔みいうていに　文秋
聞こえてる顔でつんぼの早合点　静馬
両替えを仲居チップと思い込み　静馬

兼題「スタイル」　吉田圭井堂選

スタイルにこだわり朝の飯を抜き　白溪子
スタイルへ笑い事ではない努力　花梢
スタイルの苦心知らない栄養論　八九寸
スタイルの良いのがいっち売れ残り　章雅
スタイルを気にしておれぬ真夏の夜　どんだく
最上のポーズ隅まで拭く鏡　黙平
美智子妃に以たスタイルで嫁さおくれ　光道
更年期そろ〳〵スタイルくずれて来　宗義
スタイルで食える身分にある苦労　南宗
スタイルの悪さ仕立てのせいにする　いさむ
男の眼意識している身のこなし　柳宏子

素人でないスタイルを見破られ　柳志
スタイルは八つに割れぬ身をなげき　進之助
颯爽とスタイルガール露地を出る　滋雀
隣から美容体操に苦情出る　仲字呂
スタイルに惚れたが六十年の不作　多久志
スタイルは満点しかしぬけており　摩天郎
スタイルの良いのは祖母の気に入らず　青米
スタイルを気にして痛いハイヒール　吉太郎
スタイルも目下姙娠八カ月　花梢
前すがたうしろもよいとほめ上手　句楽坊
スタイルに注文つけるプロデューサー　金三
しようことなしに後姿をほめておき　静馬
振り袖に一家総出で見送られ　花梢
ウインドへうつす横目の衣替え　滋雀
スタイルがよくて面接文句なし　市郎
マネキンが着てたドレスが身に合わず　野菜
好きな物も食べずスタイルに気をつかい　あいき
スタイルを今更いうてどうする気　摩天郎
スタイルはいわずデザイン気に入らず　柳宏子
天二物与へずうしろ姿のよいだけか　吉太郎
スタイルに頭の方は追いつけず　美房
振り向いて見たスタイルに振り向かれ　玲人
スタイルをいわず仕立屋こきおろし　一栄
貫禄があるわと太さ気にしてず　有子
スタイルで都会育ちの人と知り　白溪子
スタイルのことで今更親を責め　清子
隙のないスタイルほどに持っていず　静馬
スタイルを喰いものにするやせ薬　柳太
貫禄がついてスタイル気にならず　美房
スタイルが智能指数を疑はせ　圭水
スタイルへお腹の脂肪もてあまし　一栄
女にはスタイルで喰う道もあり　阿茶
ビーナスと思うて妻が太り出し　一舟
姙娠の妻へスタイル惜しくなり　圭井堂

席題「口ひげ」　金井文秋選

チャップリンに以た口ひげで親しまれ　清子
口ひげを落とせ落とせと子の願い　玲人
蝶ネクタイのちょぼひげおつちょこちょいに見え　一栄
どじょう髭はやして町で見る手相　句楽坊
髭の塵払っただけの出世なり　野迷路
口ひげは功なり遂げた色に生え　静馬
口ひげを落とし倒産詫びに来る　いさむ
口ひげの手前笑うて逆らわず　金三
口うつしひげの存在など忘れ　清子
小児科の医者で口ひげつけられず　清子
口ひげに鋏を入れて社長ひま　いさむ
口ひげの写真に残る明治調　柳志
クラス会出世頭が髭を置き　進之助
当確で天神髭はそのまんま　野迷路
理髪屋に相談をしてひげを立て　柳志
父さんの口ひげ栄養ないらしい　トメ子
税吏より立派なひげで低姿勢　柳太
口ひげで似合う男で出世せず　たつみ
口ひげをそれば斯うだとモンタージュ　圭井堂
口ひげを一寸残してくれるパパ　みさ子
口髭の亡父に客間見下ろされ　白溪子
口ひげの白髪ポツポツ角がとれ　進之助
口ひげも香具師営業用として生やし　清人
肺ガンを笑うニコチン焼けのひげ　珠笑
ひげ生やし近より難く守衛居る　柳宏子
ひげさんと呼んで屋台の呑み仲間　多久志
そり落とすロひげ念を又押され　青米
風采と別に社長としてのひげ　文秋

席題「指」　傍島静馬選

くすり指一軒建ちそうなダイヤはめ　みさ子
指相撲子供両手でかかって来　文秋
ダイヤルを回す指先はずんで居　青米
内職の指が酷使を訴える　玲人
借金をやっと済ました母の指　摩天郎
初産の児の指の数かぞへてみ　吉太郎
エンダージ指のサイズを聞いておき　一栄
ひよそになったのでスリを廃業し　多久志
指先が器用で娑婆に居つかれず　圭井堂
指折りの良妻型でかたがこり　一舟
そろばんは合わんがパチンコ巧い指　金三
開けに来たママに親指出してみせ　圭井堂
筆だこの指が一家をささえてる　句楽坊
指つめた過去を語らぬ齢になり　柳宏子
うしろ指さされた事なく五十年　みさ子
ピアノひく指美しく胸を病み　〆女
指切りに行けばホステス顔みせず　花梢
指切りへ幼い瞳の輝やける　柳宏子
倖せな指げんまんの指と指　青米
指二本吸う赤ちゃんに欲を見る　珠笑
どの指が病んでも困る五本の和　市郎
算数へ指が足りない一年生　清子
指差されへんかと無芸落ちつかず　静馬

席題「お転婆」　本多柳志選

お転婆も伏目勝なり角かくし　清子
お転婆と見られとうない裾さばき　市郎
おてんばも性に目覚めたおとなしさ　文秋
転校もお転婆の子苦にしてず　みさ子
藤娘より奴さんが板につき　圭井堂
お転婆も勝手が違うお茶の会　市郎
お転婆は男の子まで家来にし　野菜
お転婆も一寸気になる嫁き遅れ　摩天郎
お転婆が居て応援負けていず　白溪子
お転婆の過去が見えないしおらしさ　文秋
お転婆の妹のほうが先に嫁き　静馬
お転婆が無口になった二人きり　白溪子
お転婆で一生通しまだふけず　一舟
お転婆の昔なつかしビヤホール　舟遊
お転婆が母の純情はがゆがり　多久志
お転婆とくさした末娘に養われ　静馬
お点前も出来てお転婆まだ失せず　圭井堂
時速百女に見えぬサングラス　進之助
お転婆を叱ってる瞳が笑ってる　柳宏子
お転婆も親の苦労を着て歩き　たつみ
転んでもお転婆らしい向うきず　柳志

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

ぐれ出した子に気付かない共稼ぎ　良
油虫忍者のごとき面構え　静馬
散髪屋惜しそうに油つけてくれ　野菜
油でも差したい隣のバイオリン　好郎
燃ゆる恋裂けば油に火を注ぎ　梅里
油照り沙魚も食欲ないらしい　圭井堂
身の為を思い無粋を押し通し　一舟
拗ねてから夫は甘いものと知り　滋雀
粋人の勘それとなく座を外し　文秋
粋人の自慢は惚れた事がない　章雅
ママになる油汗なり食いしばる　一栄
何んで拗ねたか判らん程に拗ねつづけ　柳宏子
世を拗ねて孤独の日々の白々し　清子
拗ねている肩とも知らず歩を合わせ　凡子
植木市油かすだけ買うて来る　嘉代子
口先のうまさに乗った食わせ物　弥生
共稼ぎ突然の母しめ出され　白柳
粋きかしつんぼさじきに居る平和　八郎
拗ねられて男ソロバンはじいとり　紀太呂
転勤へ中途半端な恋が消え　金三
半端同士一しょになって丸くゆき　あいき
半端ぎれ型紙置いたりはずしたり　悦子
拗ねている魂胆指輪と踏んでみる　痴亭
一銭の半端も負けぬと高利貸　つる子
嫁が来て我が家に油ものがふえ　洋敏
油かす二度のつとめに木は育ち　喜仙
母親に見せてよかった食わせ物　阿茶
油絵のウソ病妻に紅をさし　一三夫
半端物値切って得した顔でいに　宗義
汗と油でにぎった金で飲む手酌　庸佑
電話口声聞くだけで油汗　紫水

川雑 **玉造支部句会**（大阪市）
西出一栄報

日曜大工曲ったままで釘を打ち　城東
識らざりし隠しマイクがありしとは　八郎
おはやしはテープでもよし座が乱れ　白柳
遺言を録音してなかなか死なず　天真
録音へ着更えまでしてかしこまり　清子
パチンコで封筒の金きずがつき　半月
封筒にキッスしておくいい便り　静馬
ためらいが指先にあり封をする　有子
封筒の喜怒哀楽をのむポスト　六竜子
ぶっつけ本番準備不足をふくこなし　章雅
準備中ですと食堂いい匂い　太路
準備完了早過ぎたのも落ちつかず　柳宏子
売り上げのザルから八百屋つりを出し　野菜
税務吏の来た日に売り上げ多いこと　一栄
売り上げを苦労知らずの子が使い　草々
ライバルの売り上げにまで気を使い　良
老舗売る店売り上げのサバを読み　文秋
売り上げが増えてだんだんけちになり　風仙洞

川雑 **京都支部句会**（京都市）
田中烏雀報

嘘のない顔を並べておかみそり　和三郎
ある女かみそりを持ち子をなさず　ゆきら
片寄せる悲しい事に来た下駄は　紫蘭
風景を背にプリンスは遠い人　礫
平和に乗せられてプリンスの不安　豊次
返へす事を忘れていた金が汚点となってしまう　白史
失意の朝食パンの汚点にでくわす　枯粒
きれいやわと月きれいだと月　烏雀
月例の様に欠け初め五十歳　句楽坊

川雑 **大聖寺支部句会**（加賀市）
野村味平報

苦労した人の話に味が出る　平凡
看板のでっかいものに薬あり　併呑
薬局に言わせばあれもこれも効き　味平
皮膚薬変えた当座はちょっと効き　雅城
毒舌も味が自慢でよくはやり　酔羊
癒え近く不美味いものなく食べ終わり　光郎

ハワイ支部句会（ハワイ）
築山快夢起報

養子にはどの子もやれぬ親ごころ　泉水
これが子宝みなそれぞれの寝顔なり　快夢起
子宝も老後は元の二人だけ　平八郎
子宝へ気楽な暮らし崩れて来　雪女
子宝に恵まれすぎた生活苦　浅太
子宝がみんな巣立って室が空き　カロ女
七十年青史に光る二世三世　峯園
子宝もなくて養老院ときめ　内海
軽妙な嘘を来客ませていい　三石
石女の眼に子宝の羨やまし　柳葉
子は宝やれ肩を揉み腰を揉み　拝山
来客の眼に焼きついた娘の笑顔　暁舟
子宝と世間はいえど邪魔にされ　紅茶
脂粉の香残して粋な客はいに　魔花麗
来客が上戸で妻を慌てさせ　あき坊
来客が多く家計簿狂い出し　斧平
遠来の客を犒うフリも見せ　万里歩
珍しくない来客はほっとかれ　紅渓

川雑 **木次支部句会**（島根県）
藤井明朗報

別宅へ二三歩だけの下駄を借り　好江
肩一つ叩かれ別室承知する　勇
切り札を持って別室に居る社長　緑之助
別室で反対党も協議する　舞吉
別室で争議解決する気配　独仙
別室で六法全書繰ってみる　可明
別室も同じ個性のカーテン地　清嵐子
故郷の山放浪の父帰る　李明
別室は洋間棟方志功の絵　大鳥
別室の二人ムードをほしいまま　祥月
四十になってもやっぱり若旦那　岬月
別室のスットンキョウな笑い声　雅行
別室に通され話題にちと困り　あき坊
残忍な音で夜桜折られたり　孤呂二
別室でこっちの気持ち呑み込ませ　千翁
人事課は別室人事異動前　緩美
別室があって小料理屋繁昌し　照子
別室で病名聞いた母の癌　清泉
おしゃべりが果てるともない十五の娘　かよ子
終列車過ぎて帰らぬ子を案じ　政吉
別室へ連れて事情を呑みこませ　夢草
別室もラーメンが来る若さなり　新雪
別室に父母対仲人笑い声　千草
別室へ呼ばれて医者に見はなされ　朱紅
知らぬまに父親のくせ継いでおり　勝美
別室へ報道陣の目がひかり　一生
別室へ来いとは手落ちある様子　英城
別室はもめているらし待たされる　三鈷
別室で飲むから高い請求書　雄々
別室へ呼んで本心を確かめる　晃男
別室で先生やさしい顔を見せ　綾子
別室で先生方は飲む旅行　健太郎
別室も同じ猷立なら我慢　草丘
横綱が乗れば落ちそなヘリコプター　鶴丸
叱っても甘くても駄目十五歳　千草
中年の落ち着きみせて白い足袋　木実枝
中年のつもりへ退職回って来　和幸
連れ添って十五年立ち愚痴もなく　信夫
箸つけず妻が待ってた終列車　一栄
一徹の父も年波に寄る弱気　きみえ
今日の栄え苦節十五の実を結び　冬樹
思想なき顔を四十の顔とする　水客

川雑 **備前支部句会**（岡山県）
横山一声報

八十八夜素肌の匂う化粧にし　東岸
百姓に八十八夜を教えられ　一声
八十八夜河豚中毒のうわさきく　秋月
八十八夜近く火鉢の灰を捨て　正州
八十八夜もちゃんと知ってたこぼれ種　伊久野
温室で花が八十八夜へそっぽ　三六
八十八夜茶つみ唄など口ずさみ　宗義
八十八夜去年のことも言うてまき　良江
八十八夜呑気な春を忘れさせ　計
八十八夜ひょこの尻尾が少し生え　胡風
朝顔をまこう八十八夜が来　浄美
八十八夜忘れた株から芽がのぞき　のぶ子
一票をせしめる獲物をさげて来る　譲士
一匹の魚を子等にのぞかれる　幸仙
間に合った美人にはっとするホーム　鼓山
有名になって内証の旅出来ず　美枝子
毒舌家案外きれいな腹をもち　あやめ
神棚の内証を今日も拝んどき　久米雄
初恋はそっとしておき嫁に行く　千秋
内証話勝手つんぼによくきこえ　清美
男の子内証話が皆きこえ　芳月

川雑 **岡山支部句会**（岡山市）
浜田久米雄報

勇退を飲み友達が淋しがり　一声
勇退へはげも白髪もないおつも　方大
お人好で良かった勇退祝われる　英作
勇退に豚を飼わせる友が待ち　美舟
血圧のことにもふれて勇退し　東岸
この辺が限度勇退妻を定め　静水
勇退の顔さみしさを祕めて笑み　三平
勇退の筆持つこともなく過ごし　水客
勇退の出来るゆとりを羨やまれ　和子
勇退をして長生きの相が出る　照路
勇退の若さを人がほっとかず　正一

食品と原資材機械包装の総合誌
食品と科学
Food Science
本社　大阪市北区濠ノ町5 (361)9373代
支局　東京都千代田区神田錦町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

勇退をして老眼の度が進み　素身郎
勇退へ共に歩んだ長い道　よしお
勇退をしても汽笛が耳につき　葵丸
勇退の足へ鼻緒がきつすぎる　流風
あちこちから来いと勇退いたわられ　章雅
勇退を待っていました次席椅子　承平
勇退をして消息がそれっきり　白溪子
勇退へまだこれからという名残り　忠三
詰腹を切らす勇退　美辞麗句　永断
勇退の当分遊ぶのに疲れ　遠二
勇退の決意己れを偽わらず　紅月
勇退を送る拍手を背で聞き　秋月
勇退をして清逸の日にむかい　薫風子
勇退を口先だけで惜しまれる　宗義
勇退へ他人が弾く退職金　雄々
まだ野心のある勇退を派手にする　万的
勇退と言えば歳かときかえし　たつみ
勇退へマイクはえんりょなくたずねる　鼓山
勇退をしてしたいことするつもり　遠二
惜しまれて去る老兵の苦笑い　鮫虎狼
勇退で知る制服の有難味　佐賀恵
勇退へ続くレールの遙かなり　胡風
勇退の両手に孫がぶら下がり　芳月
勇退へ子供の年令をすぐ聞かれ　白溪子
勇退へ腰巾着が鉾を変え　忠三
勇退の盃まるくまるく持ち　水客
勇退はしてもロープは残しとき　礎石
勇退を待っていたのも酌ぎに来る　三林坊
勇退の春へ煎茶をつぎこぼし　久米雄

土佐支部句会（高知市）

雑川　川竹松風報

末の娘のおでこへ春が乗ってくる　紅雨
春の日の孤独がさせる大欠伸　勝子
観光団帰り名産売り切れる夢　生
この代で終わるのれんの品が切れ　古城
品切れの薬に用のない身体　嘉子
新柄はもう品切れと言う人気　呑洋
暴力へ小さな抵抗品が切れ　美知
口伝にやっと探したハイライト　未遂
子供等のお残り食べて妻達者　窓花
火の用心だけは呉れ呉れ言い残し　大将
居残りの友は遊びの友であり　小雀
学ばせて僅かに残る家やしき　百日紅
砂浜へ残こす二人の靴のあと　斐山
二日酔い妻は家計のことに触れ　蟠蛇
先妻の子が出来すぎるのに困り　松風

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

エエ人やけどあんさんは切れ過ぎま　亀心
父ちゃんの正直も母の手腕なり　一生
人垣を分けて入ればラストシーン　勝
ラストシーンたやすく泣ける程に老い　るみ
ポケットを見抜いたようにセビる妓ら　理休
うぬぼれた手腕だったが陽の目みず　理休
大根も一役買って幕終わる　同
昔とは違うポケットさぐるなよ　亀心
春愁のレザーを首にチョット当て　るみ

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

同窓会出世頭はこせつかず　静幸
ゆとりなどおまへん商売いそがしい　宏子
並木路の歩道に過去の夢を追い　昭月
水打っているのにゆっくり二人連れ　洞庵
歩道から遠い向かいの店となり　鳥荘
歩道ギリギリに車止めてくれ　圭水
ゴミ箱を歩道に置いてモデル都市　貴山
商魂は歩道も売り場荷造り場　専翁
春が来た歩道に立った女から　句念坊
丼池の歩道そろばんついてくる　和郎
如何みても戴けません不満顔　幸児
足ることを知れと説かれて尚不満　恵美子
ため息をついても思案まとまらず　水邦
ため息をついて母になる歩み　尤三
ため息をつけばいくらか楽になり　福郎
電話口何か不満のある気配　ゆきを
気に喰わぬワケは楷の序列なり　素郎
金ですむことにため息はげまされ　梅里

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

五月雨に疲れた飯場の週刊誌　六竜子
五月雨を聞いてホテルで待つ永さ　静林庵
五月雨の晴れま集金帳を繰り　きはち
鯉のぼりあげて亭主の浮気止む　半月
鯉のぼり縁なく夫婦貯めている　美房
鯉のぼり祝に来ても孫の世話　摩天郎
マイナスになっても良いわとあつい恋　紅月
マイナスは承知の上でたてをつく　青米
あんたまたマイナスだっせとつめよられ　菊代
マイナスをしても儲けはちゃんと読み　圭水
口紅を買うて娘の春を知り　吉太郎
残り火の口紅そっとしのばせて　花梢

どんぐり川柳会（羽曳野市）

西いわを報

酔ったパパ子供のように寝かされる　くにを
子を産めぬ悲しさ女だけが知り　のん子
うちの子にパット持たせか唄わせか　猟人
春風にええ恰好して風邪を引き　帯人
春風に吹かれて歩く連れが欲し　宣子
春風に今日も逢瀬の薄化粧　則子
他人様の退院祝へ春の風　アキ子
ボート漕ぐ二人にそっと春の風　登代子
春風に月賦の口が一つふえ　恥芽
盃に桜ひとひら春の風　川太郎
魚釣り餌も取られる春の風　一楽
想われている幸福に春の風　功雄
神経の通わぬ義手に長い袖　孝子
無神経そこまでうちにいわせるの　史好
左眼を髪で隠した神経質　胡人
全神経集中させてプロポーズ　桜子
神経質の母を残して入院し　のぼる
疲れ切った神経に闇が恐い　静波
無神経ふられた恋を又しゃべり　一人
無神経になった頃には病癒え　ふじ子
神経を休めるだけの薬のみ　ひろし
神経をすりへらし待つ腕時計　保生
道草の影がだんだん長くなり　薫風子
道草も一人ぼっちの子は哀し　圭太
人生の道草あって人が出来　凡太

日の丸川柳会（鳥取市）

河村日満報

金策の着物を母の日に送り　多加子
赤いべべ着た子が花嫁さんになり　三恵子
着物作って帯も草履もほしくなり　すが子
世の流れ着物姿の見当らず　蒼水
来客へ和服の妻のかいがいし　多可志
噂とはちがう女とあるいてい　芳道
信じてはならん噂にまだ迷い　三歩
帯解いてやっと寛ぐ扇風機　若人
不快指数へ妻も着物をきたがらず　日満

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL（六二）三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街
TEL（六三）〇一四七番
串の店　南区畳屋町三ツ寺センター
TEL（三一）九一八四番

柳樽室

路郎生

★新潟震災お見舞——国体が済んで、ヤレヤレと思われて間もなくの強度の地震、さぞ驚かされたことと思う。これればかりは微力な私たちには為すべき方法もなく、ただただ柳人諸氏の上に、少しでも被害の尠ないことを祈るばかりでした。

★旬日を経てようやく新潟大学教授阿達義雄氏はご一家ご無事、新津市の大野風柳氏は勤務先が新潟市にあったので、会社がメチャメチャになったこと、佐渡の高野不二氏（不朽洞会員）は本棚が倒れる程度の強震、海岸地帯は津波があったとのこと、何れもご無事だったことを知らされ安堵の胸を撫でおろした次第。

★引き続いて、静岡方面、紀勢線方面、九州方面、山口県広島県方面と各地の豪雨水禍、地震といい、豪雨といい、天変地異には全くお手挙げの状態である。

★前号も原稿がフクソウしたが、本号は更に原稿が輻湊したので、「明治・大正柳誌巡礼」「現代柳人録」「続・川柳書架」「柳志寸言」其他を割愛したことを執筆者ならびに愛読者諸賢にお詫び申し上げる。

★河野春三氏選「人生譜」は本号から発表の運びとなった。アンケートの「駅弁」は肩の凝らぬ読物として、句評デイスカッション」は中堅作家の真摯な研究として好評を疑わない。なお古川柳研究の権威冨士野鞍馬氏が筆を新たに「古川柳と古俳句」を発表されたのでご愛読をお願いする。

★老生の喜寿・金婚の祝賀行事が、不朽洞会が主体となって、全日本はもとより海外まで呼びかける大々的な企画の下に行なわれることになっていたが、別欄広告の如く、老生の固辞によって取りやめとなったのでご了承をお願いする。東都はもとより、遠隔の地からいつやるんだ祝賀に押しかけて行くぞと感謝するに言葉のない問い合わせをうけておりましたが私一存で回答も出来ないので、申し訳ないとは思いながらそのままになって居りましたが、ようやく老生の意のあるところが、不朽洞会役員諸氏の容るるところとなったので茲にご好意の諸賢にお礼とお詫びを兼ねてご報告申し上げる要は老生の目下の健康状態が諸賢のご好意にお応えする事が不可能なことを痛感する以外他意のないことをご諒承下さって今後とも一層のご支援が願いたい。ムリに断行すれば出来ないことはないと存じますが、明治・大正・昭和の川柳人ならびに川柳関係者が一堂に会する顔顔顔に親しく接するとすれば、おそらく老生は喜びのあまり、ショックによって仆れるであろうと思う。その点老妻も同感だと申しているので、遺憾ながら固辞した次第、ここに重ねて諸賢のご好意に深謝申し上げる。

★別欄広告の如く、川雑川柳まつりは昨年の七月で予定の十年を終了した訳で本年はその後始末の会なので、頗る気楽な川雑川柳ゆかた会を催すことになったのであるから、好きずきな浴衣着服又はご持参で賑々敷参加して役員諸氏の労に応えて欲しいものである。老生からも特にお願いする一番素晴らしい浴衣をお召しの方には投票により本社から呈賞いたすのでよろしく。

★七月句会—**川雑支部**☆**南海電鉄句会**・16日（木）六時、題、救急車・くされ縁・片言、所、難波高架下親和クラブ、☆**京都句会**・16日（木）夕、題、請売・短気・そよ風、所四条縄手仲源寺、☆**明和研究句会**・19日（日）一時、題、少女・男・空（そら）・鈴・志・宝・善意、所、阪神鳴尾駅下車東南二百米、鳴尾公民館、☆**かがみ句会**・2日（木）正午題、残酷・年寄・癌・傷口・酷暑、所、池田古心居、☆**富柳会句会**・12日（日）一時、題横車・台所・尻込み、所、富田林市公民館、☆**阿倍野句会**・20日（月）六時半、題、七夕・水いらず・中毒・早計、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万☆**玉造句会**・10日（金）6時、題、小刻み・呆ける・ズバリ、所、市電玉造南百米大阪信用金庫

柳人交歓暑中見舞広告を募る

八月号へあなたの暑中見舞広告を

★一口金三百円。幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は七月五日着便。

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

川柳雑誌社主催

本社七月句会

8月本社句会

川柳ゆかた会は7月末までに投句のこと（表紙の2広告参照）

日時 七月六日（月）午後六時

会場 自安寺（妙見さん）電話(四)一四七八番 南区千日前電停東スグ北側

兼題 「黒」二句 麻生路郎選 「せせらぎ」三句 若本多久志選 「ベストセラー」三句 西尾栞選 「肌」三句 土井文蝶選 三題 当日発表 川村好郎

席題

柳話 各題天位・各題天位を路郎選により

星賞 天位に不朽洞賞。

会費 百円

★投句だけの方は郵券三十円封入（〆切は七月五日）本社宛。

川柳雑誌社句会部

電・大阪(371)六〇八一

麻生路郎著

新川柳鑑賞

好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。

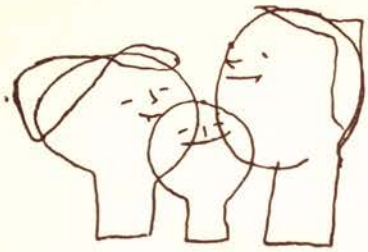
この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話大阪(671)六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

一家そろつてホーライ党



廣東料理 豚饅 焼売

蓬莱

大阪なんば・TEL (641) 551—2

C·M·C児童音楽サークル

バイオリン・ピアノ・声楽・チエロ・特設バレエ科

千林教室
大阪市旭区北清水町九六　北清水集会所　バイオリン科

あびこ教室
大阪市住吉区南住吉四ノ一　あびこ幼稚園　バイオリン科　電(691)1874

西九条教室
大阪市西九条　防犯会館　バイオリン科　電(681)9836

生駒教室
奈良県生駒町北新町　文化会館　生駒2027

指導　麻生アート　外数氏

★サークルに関するお問い合せは下記へお願いたします
奈良県生駒町本町103　電話生駒（〇四三七）二〇二七
主宰　麻生アート

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から一〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

募集

課題吟募集

碧い目（十句以内）戸田古方選
異端者（十句以内）河村日満選
ペターパーフ（十句以内）水谷竹荘選
セールスマン（十句以内）大鶴喜由選
地図（十句以内）杉谷湖山選
緑（十句以内）早川清生選
（七月十五日締切）
（八月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
人生譜（雑詠十句以内）北川春巣選
川柳塔（雑詠十句以内）河野春三選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（七月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が出来る。
▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　三十九年第七号

定価　一二〇円（送料六円）

（禁転載）

半カ年　七五六円（〒共）
一カ年一、四四〇円（〒社負担）

昭和三十九年六月廿五日印刷
昭和三十九年七月一日発行

大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行人　麻生幸二郎

大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話大阪(671)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

Printed in Japan

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅九年七月一日発行　（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　麻生孝二郎　発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪（67）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番　定価百二十円（送料六円）

リキもってこい！

だるい・精力が衰えた・すぐ疲れる・肌に若さがない・こんな時とくにリキの効果は見のがせません　リキホルモは高単位男女両性ホルモン　強精強心成分　天然ジャコウ牛黄のほか綜合ビタミン11種強肝剤6種を美しい新型ユニットカプセルに収めた強力な薬です

疲労回復・体力増進・精力増強に

リキホルモ

小野薬品

●12カプセル・30カプセル（各携帯容器付）6カプセル・32カプセル

貫禄は充分です

樽で貯蔵しはじめてから40年…
まろやかな味！
ふくよかな香り！
すべてが完璧なウイスキーです　サントリー

世界の名酒

サントリー

ローヤル三、〇〇〇円　オールド一、六〇〇円
角瓶一、三五〇円　白札　七五〇円

Toray

東レ　テトロン®　レインコート

EASY CARE／手のかからないせんい

東洋レーヨン株式会社

涼風のかなた

高野山

デラックス特急「新こうや」号　毎日2往復
なんば発　①8時40分　②13時30分
座席指定券 170円　1週間前から発売

昭和40年

高野山開設1150年記念大法会
ただいま全国で参拝団を募集中です

(641) 8686
(341) 5038
(316) 8661

南海電車